ENIX ORIGINAL GAME BOOK

ゲームブック

FIREEMBLEM
ファイアーエムブレム
紋章の謎



エニックス文庫

ENIX ORIGINAL GAME BOOK

ゲームブック

FIREEMBLEM
ファイアーエムブレム
紋章の謎



ENIX エニックス文庫

世界中を恐怖のどん底に陥れた地竜王メディウスを、同志たちと共に討ち破り、平和を取りもどしたアリティアの光の王子・マルスのもとに、ある日、突然の伝令が届く。
グルニア地方の反乱鎮圧に赴くようにとの命令は、かつての盟友にして、現アカネイア帝国皇帝・ハーディンからのものだった。
さっそく出征するマルス。しかしそれは、生死をかけた戦いの、幕切れに過ぎなかった。
スーパーファミコン版ファイアーエムブレムのファンタジーワールドを再現した、オリジナルゲームブック！
世界に平和は、再び訪れるのか!?

ILLUSTRATION/森下直親
COVER DESIGN/水野敏雄＋TWINSTAR

FIREEMBLEM
ファイアーエムブレム
紋章の謎



イラストレーション/森下直親

冒険の書

このページは、ゲームブックのためのチェック項目です。4ページからの「遊びかた」と以下の解説をよく読んで使ってください。ここに直接書きこんでもかまいませんが、できればコピーをとって使用するとよいでしょう。

●フラグチェック表●「Aにチェックをして」などの指示にしたがって、マス目の中に○印を書きこみます。

●経験値／レベルチェック表●「経験値にプラス1して」などの指示でマス目をぬりつぶします。経験値が❷、❸などの丸数字に達すると、その時点でレベルアップです。

●装備表●「○○の装備表に△△を記入して」などの指示にしたがい、武器や杖などのアイテムを書きこみます。また、職業をチェックする際にも使用します。

●アイテムリスト●アイテムを入手したとき、指示にしたがい○などでチェックします。なお、傷薬は入手数が多いので、正の字などでチェックするとよいでしょう。

●星のかけらリスト／オーブリスト●冒険を進めるうえで重要なアイテムですので、入手したら必ずチェックしましょう。

●バトル対戦表●事前にA～Eの下の空欄に、1～5までの数字をランダムに書きこんでください。使いかたは、バトル対戦表記入例を参照してください。

●経験値/レベルチェック表

❷ ❸

❹ ❺

❻ ❼

❽ ❾

❿

●フラグチェック表

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト	ナ

●人物別装備表

名前	職業	武器
マルス	ロード	レイピア
ルーク	Sナイト／パラディン	手槍
セシル	Sナイト	細身の槍
ゴードン	アーチャー／スナイパー	鋼の弓
ライアン	アーチャー／スナイパー	鉄の弓
アラン	パラディン	銀の槍
ドーガ	Aナイト／ジェネラル	鋼の槍
マリーシア	シスター	ライブの杖
リンダ	魔道士	ファイアーの書　オーラの書
ジュリアン	盗賊	鉄の剣
パオラ	Pナイト	鋼の槍
カチュア	Pナイト	細身の槍
オグマ	傭兵／勇者	鋼の剣
シリウス	パラディン	銀の槍
シーダ	Pナイト	鋼の槍
ウェンデル	司祭	サンダーの書
ナバール	傭兵／勇者	キルソード
フィーナ	踊り子	
バヌトゥ	マムクート	
ジョルジュ	スナイパー	パルティア
カイン	Sナイト／パラディン	キラーランス
ミネルバ	Dナイト	銀の槍
マリク	魔道士	エクスカリバーの書
チキ	マムクート	神竜石
アベル	パラディン	ナイトキラー
アストリア	勇者	メリクルソード
エスト	Pナイト	
シーマ	ジェネラル	銀の槍
ロシェ	パラディン	銀の槍
ミディア	パラディン	

●アイテムリスト

傷薬	
銀の斧	
パワーリング	
竜の盾	
聖水	

●星のかけらリスト

星のタウルス	
星のジェミニ	
星のリブラ	
星のアクエリア	
星のキャンサー	
星のスコーピオ	
星のレオ	
星のサジタリス	
星のカプコーン	
星のバルゴ	
星のアリエス	
星のピスケス	

●オーブリスト

光のオーブ	
星のオーブ	
大地のオーブ	
命のオーブ	
闇のオーブ	

●バトル対戦表

	A	B	C	D	E
初期設定					
書き替え用					
書き替え用					

バトル対戦表記入例

A	B	C	D	E
2	1	3	5	4

『◆マルスたちはC、相手はB』の場合
C=3、B=1
↓
1よりも3の数値のほうが上なので、
『●上』へ進む

エニックス文庫

ゲームブック

FIREEMBLEM

紋章の謎

ENIX

ゲームブック

FIREEMBLEM

紋章の謎

FIREEMBLEM
ファイアーエムブレム
紋章の謎

遊びかた

●冒険の進めかた

7ページのプロローグからゲームが始まります。プロローグを読み終わると「⬇1へ」という指示がありますので、今度はシーン1へ進みます。それ以降は進んだ各シーンの文末の指示に従って読み進めてください。次のシーンへの指示が二つ以上ある場合は、自分の状況に適したものを一つ選んで進みます。間違って指示と違う番号へ進むと、冒険が続けられなくなりますので、万一に備え、自分の進んできた番号をメモしておくとよいでしょう。

●フラグチェック

冒険の途中で「◆Aにチェックして」という指示が出てきたら、巻頭のカラーイラストの裏にある《冒険の書》フラグチェック表の「A」の欄に、○印をつけてチェックしてください。また「◆Aのチェックを消して」という指示が出た場合は、「A」の欄の○を×などで消しておきましょう。

●アイテムチェック

冒険を進めていくと、アイテムが手に入ることがあります。「◆『○○○』を入手した。アイテムリストにチェックして」の指示が出てきたら、《冒険の書》アイテムリストのアイテム名の欄に入手した数だけ○などの印をつけてください。また、「◆アイテムリストから『○

○○』を消して」という指示が出たら、アイテム名の欄の○印を×などで消してください。

●装備チェック・職業チェック

マルスたちは、仲間に加わった当初から武器や杖、魔道書などの持ち物を装備していることがありますが(装備表に印刷されているものが初期装備です)、冒険を進めていく途中で新たに装備することもあります。**「◆マルスの装備表に『○○○』を加えて」**などの指示が出たら、《冒険の書》人物別装備表に指示された武器などの名前を書きこんでください。

また、傭兵、アーチャーなどは、クラスチェンジで職業が変わることがあります。**「◆オグマが勇者にクラスチェンジした。装備表の職業にチェックして」**の指示が出たら、職業欄の指示された職業名を○などで囲んでください。

●星のかけらチェック・オーブチェック

星のかけらやオーブは、マルスたちの冒険に欠かせない重要アイテムです。入手したら、文末の指示に従って、《冒険の書》リストの各欄に○印をつけてください。

●経験値・レベルアップ

ゲームスタート時、マルスたちの経験値はゼロですが、敵との戦闘後に**「◆経験値にプラス1して」**というような指示で加算されます。経験値が入ったら、《冒険の書》経験値 レベルチェック表のマス目を、得た経験値の数だけ塗りつぶしてください。

また、マルスたちのレベルは、冒険を始めた当初は1ですが、得た経験値がレベルチェッ

ク表の②の目盛りに達するとレベル2になります。以降は得た経験値の数が③・④の目盛りに達するごとに、レベル3、レベル4……とレベルアップしていきます。

●バトル対戦表

敵との戦闘にバトル対戦表を利用する場合があります。冒険をはじめる前にバトル対戦表のA~Eまでの欄に、1~5までの数字をランダムに入れておきましょう。**「◆バトル対戦表で戦います。マルスたちはD、相手はA。相手より数値が……」**などの指示が出た場合、自分で書いたDの欄とAの欄の数値を見くらべ、相手よりも大きい数なら**「●上」**、小さい数なら**「●下」**を選んで進みます。バトル対戦表の詳しい説明は、《冒険の書》バトル対戦表記入例を参照してください。

――それでは、冒険の始まりです。

プロローグ

アカネイア大陸――。それは、アカネイア聖王国をはじめ、アリティア、グラ、マケドニア、グルニア、タリス、オレルアンの七王国から成る、美しい大陸だった。それを蝕んだのが、竜への変身能力を持つ地竜王メディウス率いるドルーア帝国。数百年前に一度滅んだはずのメディウスは、復活後、悪の司祭ガーネフを味方に引き入れ、たちまちのうちにグラ、マケドニア、グルニアの三国を平定、聖王国アカネイアを滅亡に追いやった。

これに対抗し立ちあがったのは、かつてメディウスを滅ぼした勇者アンリの血を引く、アリティアの王子マルス。協定を結んでいたグラの裏切りによって父王を失い、姉エリスを拉致された彼は隣国のタリスに逃れ、タリスの王女シーダとともに出征。アカネイアの王女ニーナから、聖王国に代わって正義の戦いを行う者の証であるファイアーエムブレムを授かると共に、オレルアン王弟ハーディンや、兄ミシェイルの考えに対抗するマケドニア王女ミネルバらを味方につけ、神剣ファルシオンをもって、ついにメディウスを倒した。

戦いの中では、いつしかロマンスも芽生えていった。アリティアの騎士アベルとマケドニアの白騎士エスト、魔道士マリクとアリティア王女エリス、盗賊ジュリアンとシスターのレナ、そして、マルスとシーダ……。苦しい戦争のさなかに生まれた愛は、大切に、そして静かに育まれていった。

しかしまた、長い戦いのうちに数々の悲話が生まれた。マケドニア王女ミネルバは、ドルーア帝国に加担する兄ミシェイルを涙ながらに討った。また、帝国に捕らわれていたニーナをかくまい、逃がしてくれたグルニアの勇猛な騎士カミュは、ニーナと心を通わせあいながらもグルニアの騎士である立場を重んじ、マルスらの剣の前に倒れた。そしてマルスは、父王の仇であるグラ王を討ちとった。

なにはともあれ、苦難の時代は終わった。人々は後に、メディウスの脅威にさらされたこの戦争を、暗黒戦争と呼んだ。

そして、瞬く間に一年の歳月が流れた――。

この間にオレルアン王弟ハーディンは、アカネイア王女ニーナに迎えられて結婚、アカネイア帝国を新たに建国した。また、アリティアの王子マルスは、タリス王女シーダと婚約。アカネイア大陸は、喜ばしい雰囲気に包まれていた。

人々は、再び訪れた平和を謳歌していた。

⬇1へ

1

「マルス様、ハーディン皇帝より、緊急連絡が入りましたぞ！」

アリティアの誇る〝光の王子〟の右腕にして、優秀な軍師ジェイガンの声が、自室でくつろいでいたマルスの耳に届いたのは、春の訪れを知らす暖かい風の吹いた翌日のことだった。

「どうしたんだい、ジェイガン？　そんなに慌てて。ハーディンはなんだって？」

マルスにとってのハーディンは、暗黒戦争のとき、苦労を共にした友である。その、友からの突然の連絡が、まさか出兵命令であろうなどと、マルスには思いもよらなかった。

しかし――。

『親愛なるマルス王子　グルニア地方で反乱が起こった。至急、アリティアの兵を鎮圧に向かわせてほしい　ハーディン』

ハーディンからの手紙には、まさに、こう書かれていたのである。

メディウス率いるドルーア帝国に加担したグルニアは、今では王国としての地位を剥脱され、アカネイア聖王国の管理下に置かれているはずだった。そのグルニアで反乱とは……。

「よし、さっそく向かおう。シーダには、誰か使いを出して、このことを伝えておいてくれ。〝連絡がとれない〟とヘソを曲げられても困るからね」

手紙を読み終えたマルスは、明るくそう言った。グルニアの鎮圧など、一週間もみておけば充分だ。マルスだけでなくジェイガンも、そして出兵するアリティア軍を見送る国民も、

誰もがそう思っていた。

↓2へ

2

　グルニア遠征のためにマルスがまず行ったのは、兵を選出することだった。
　若いが優れた腕を持つソシアルナイトのルークと、同じくソシアルナイトで紅一点のセシル。暗黒戦争のときからマルスに仕える怪力無双のアーマーナイト・ドーガ。ドーガと同じく暗黒戦争を戦い抜いたアーチャー・ゴードンと、その弟ライアン。そして、騎馬隊の隊長を務めるパラディンのアラン。数こそ少ないが、皆、腕利きの戦士たちだ。これに、軍師を務めるジェイガンを加えた計八名が、鎮圧隊としてアリティアを出発した。
　もちろん、国を守るための警備隊も整えておかねばならない。この隊長を務めるのが、先の戦争で活躍した騎士のカイン。彼に任せておけば、なにも心配はなかった。
「マルス殿ですな!?」
　グルニアに向けて旅立ったその夜、設置した野営地に、突然、一人のジェネラルがやってきた。現在、グルニア地方を統括するアカネイアのラング将軍である。
「のんきに野営ですか？　いいご身分ですなあ……」
　マルスの顔を見るなり、嫌味を発したラングは、鎮圧隊全員に驚くべき事実を告げた。なんと、グルニア反乱軍のリーダーが、ロレンス将軍――暗黒戦争でマルスらと共に戦った、



温厚なジェネラル――だというのである。さすがのアリティア軍も、これには耳を疑った。
ラング将軍は、そんなアリティア軍全員の顔を眺め、ニヤリと顔をゆがめる。
「ロレンスは、あなたがたの仲間でしたな。ま、アリティアが、我がアカネイアを裏切るとは思いませんが、念のため釘を刺しにきたわけですわい。はっはっはっ……」
しかし、すでに誰も、ラングの言葉は聞いていなかった。我々は、かつての友を討たなければならないのだろうか？　あの、逞しく優しい将軍を……。
「ま、せいぜいお手並み拝見といきましょうかな、わっはっはっ……」
ラングの意地悪い笑い声が、夜の静寂にこだました。

➡29へ

3

ファルシオンの攻撃を受けたメディウスは、死に物狂いで闇のブレスを吐きつづけた。恐ろしい息は、マルスだけでなく周囲の者をも容赦なく襲う。
辛く、苦しい戦いは、どこまでも続くかに思われた。マルスは、何度もくじけそうになったが、周囲で必死に戦っている仲間を見、勇気を奮いたたせた。
「ま……まだまだ！　メディウス、覚悟しろ!!」
その手のファルシオンが、キラリと光る!!

➡460へ

4

マルスは部隊を率いて西へ向かった。
だが、そこにはアーマーナイトたちが待ちうけており、たちまち激しい戦闘となった。
マルスは自ら先頭に立ち、剣を振るってアーマーナイトたちをなぎ倒す。
鬼神のごとく戦うマルス！
だが、そんなマルスの目に信じられない光景が飛びこんできた！
なんと、最も信頼する家臣であったはずのパラディンのアベルが、敵の部隊の指揮をとっているではないか！
「ア、アベル！」
ショックを受け、一瞬、頭の中がまっ白になったマルスは、敵のまっただ中のアベルのもとに、一直線に駆けよった！

⬇50へ

5

皇帝を失ったアカネイア軍は、あっけなく抵抗をやめ、マルスたちアリティア軍に下った。
反乱分子の首謀者として捕らえられていたミディアも救出され、恋人アストリアとの再会も果たした。
だが、ハーディンに幽閉されているはずのニーナ王女の姿はどこにもなかった。連れさら

れたマルスの姉エリスの姿もまたなかった。
パレスの玉座の間に集まったマルスたちに焦りの色が浮かぶ。そんな中……。
「ニーナにエリス、それにマリアとレナ。四人の司祭たちは飛竜の谷におる……」
そう告げたのは、魔道の力を駆使して突然現れた賢者のガトーであった。
「飛竜の谷に？　それは本当ですか、ガトー様！」
「まことのことじゃ、マルス。ガーネフは四人の司祭を使って、暗黒竜メディウスを復活させようとしているのじゃ。これはなんとしても阻止せねばならん」
この話を聞いたマルスは、即座に飛竜の谷へ旅立つ決意を固めた。

➡21へ

6

「北の砦に行ってみよう！」
マルスの一声で、隊はアランが言っていた砦をめざした。
砦では、ペガサスナイトの女騎士が一人、反乱軍の残兵を相手に戦っているところだった！
「パオラ！　よかった、無事だったんだね!!」
「ああ、マルス王子！　みんなも！」
敵の剣の切っ先を避けつつ、ペガサスの上からパオラが応える。
「さあみんな、加勢するんだ！」

◆Fにチェックして
●Mにチェックがあれば……45へ　●なければ……92へ

7

ズズズズズズ……ッ！

再び神殿全体が大きく揺れたかと思うと、ガーネフの背後にあった壁が崩れおちた。奥は、どうやら部屋になっているらしい。ひんやりと冷たい空気が、皆の頬をなでていく。

マルスたちは慎重に、奥の部屋へと歩を進めた。そして、そこで見たものは、行方不明のシスターたちだった。エリス、マリア、レナ、そしてニーナの四人が、部屋の中央にある五芒星の祭壇を取りかこむように立っていたのだ。

そればかりではない。シスターを助けようと皆が動いたその瞬間、祭壇にドス黒い霧が立ちこめ、暗黒竜メディウスが姿を現しはじめたのだ!!

「レナさんっ！　こっちに来るんだ！」

ジュリアンが、思わず声をあげた。続いてミネルバが妹のマリアを、マリクが愛するエリスの名を、それぞれ呼ぶ。しかし、シスターたちは、なんの反応も見せない。

「まさか、彼女たちは操られているのでは!?」

マルスが悲痛なつぶやきを漏らした。

➡31へ

8

アリティア軍は、次から次へと湧いて出るバイキングに手を焼き、なかなか先へ進めずにいた。
やっと一息ついたと思ったところへ、近くの砦から、またも攻撃をしかけてくる。
すると、それまで後方で戦っていたシリウスが、マルスたちの前に駆けでてきた。
「ここは私たちがくいとめます！　王子たちは先へ！　頭さえ叩けば、こいつらも！」
言うが早いか、愛馬を走らせ、一人バイキングたちの中へ突進していった！
そして、みるみる敵を打ち倒していく！
「あのシリウスとか申す男、かなりの腕前。王子、ここは彼の言うとおりにしましょう！」
マルスはジェイガンにうながされ、バイキングの根城をめざす！
馬を進めながら振りむいたジェイガンの目に、シリウスの雄姿が映る。
『あの鮮やかな槍さばき……どこかで見たことが……そうだ、グルニアのカミュ！　……いや、そんなはずはない。彼は死んだはず……』
ジェイガンは首を振ると、向きなおり、マルスに続いた。

経験値にプラス4して

●現在のレベルが2以下なら　……………43へ　●3以上なら　……………………19へ

9

「アベルが敵方につくなんて、そんなバカなことがあるもんか……。きっとなにかの間違いに違いない……」
マルスは自分の心の中に浮かんだ疑念を打ち消すように言った。ジェイガンはそんなマルスにすかさず助言を送った。
「マルス様。今はとにかく眼前の敵を倒すことが先決です。あの牢を打ち破ることに全力を尽くしましょう」
マルスは、このジェイガンの言葉に己を取りもどしたようだった。すかさず仲間たちに指示を送る。
「ジョルジュ、あの扉の前にいるジェネラルを狙いうちできるか?」
「任せてください！」
ジョルジュはすぐさま宝弓パルティアを取りだすと、弓を振りしぼって完全武装のジェネラルに狙いを定めた。
ビュン!! すさまじい弓音が響く。その瞬間、矢は炎を放ちながら、一直線にジェネラルに向かっていった。
炎の矢は狙いたがわず、ジェネラルの胸を貫いた。たまらずジェネラルが倒れる。指揮官を倒された敵軍はたちまち混乱に陥った。

「今だ！」
号令を下したマルスは、自ら先頭に立って、牢獄を守る軍勢の中に飛びこんだ！
ふいをつかれた兵士たちは、まともに反撃することもできず、マルスたちに倒された。
◆経験値にプラス3して……………………………………47へ

10

盾で霧のブレスを弾いたマルスは、ファルシオンでメディウスに切りかかりながら叫んだ。
「フィーナ！　援護してくれ!!」
おろおろと事の成り行きを見ていたフィーナは、自分の出番とばかりに大急ぎでマルスに近づき、美しく舞う。次の瞬間ナバールが、マルスとフィーナの援護にまわった。
とたんに、周囲にいた者たちも我に返り、それぞれの武器を手に取る。
「よいか！　メディウスは、マルス様のファルシオンでなければ倒せぬ。武器を持った者は、攻撃能力のない者の援護に努めよ！」
軍師ジェイガンが、高らかに言い放った。皆の気持ちが、一つにまとまる。これを感じ取ったマルスは、再度ファルシオンを振るった。
◆バトル対戦表で戦います。マルスはE、相手はB。相手より数値が……
●上……………………450へ　●下……………………460へ

11

「……みんなだいぶ疲れているな……よし、僕が行く！」
「お、王子おやめください！」
マルスは剣を構えると、ジェイガンの制止を振りきり、火竜の吐いた炎の中へ突きすすむ！
そして、敵の口に愛剣を突きたてた！
炎よりも赤い血しぶきをあげ、火竜は息絶えた。
「……王子」思わず胸をなでおろすジェイガンに、マルスは焦げた前髪をかきあげながら、
「平気だよジェイガン。少しは僕の腕前も信じておくれ」と、微笑んだ。

◆経験値にプラス2して

●傷薬があれば……………………57へ　●なければ……………………28へ

12

「エリス様……どうか、お気をたしかに。マリクです。あなたをお救いするため、ここまでやってきました。さあ、マルス様も待っています。私を信じて……」
メディウスをも恐れずエリスに近づいたマリクは、焦点の定まらないエリスの手を取り、静かに、ささやくように話しかけた。すると、信じられないことが起こった。
なんと、エリスがゆっくりと首をまわし、マリクを見たのだ。そして——。

「マリ……ク？　マリク……マリクなのね！　私、不気味な司祭に襲われて、それから……ああ、なにも覚えていない。でも、とても恐ろしい夢を見ていたような……」
奇跡が起こった。なにを言っても無駄だと思っていたシスターの一人が、正気づいたのだ！
エリスは、マリクに手を取られ、ゆっくりと祭壇を離れる。
「愛する者の力が、奇跡を起こしたのです！」
ジェイガンが、喜びの声をあげた。

⬇225へ

13

オグマ、ドーガ、シリウス、マルス、それに神竜に変身したチキが足音をしのばせて、魔竜を取りかこんだ。マルスが目で合図した瞬間にいっせいに攻撃を開始。
寝込みを襲われた魔竜たちは傷を負い、メチャクチャに暴れだした。逃げきれなかったドーガが、ふっとばされて地面に叩きつけられた！

●ソにチェックがあれば……195へ　●なければ……………207へ

14

オレルアン王の命令により、狼騎士団は祖国に帰っていった。もはや行く手をさえぎるものはなにもない。

ついにアリティア軍は山岳地帯を抜け、いよいよパレス城へと迫った。
「マルス様、今、知らせが入りました」
ジェイガンが感情を押し殺した声でマルスに報告した。
「アカネイアでは、ハーディンのあまりの非道な行為に騎士たちが反乱を起こしたそうです。しかし反乱はすぐに鎮圧され、リーダー格のミディア殿も捕まってしまったようです。ハーディンは、反乱分子を残虐な方法で次々に処刑しているとのこと。心配です」
「こうなったら一刻も早くハーディンの暴走を止めなければならない。よし、一気にパレス城を攻略するぞ！」
マルスは全軍に向けて、パレス城攻略を声高らかに宣言した。

⬇42へ

15

マルスは城内で手にいれたオリオンの矢を、城の外で待機していたゴードンに渡した。それにより彼はアーチャーからスナイパーにクラスチェンジ！

◆ゴードンが『スナイパー』にクラスチェンジした。装備表の職業にチェックして ……241へ

16

部屋の中では、ラングが一人、石畳にひざまずいていた。
「マルス王子よ、すまぬ許してくれ、わしは皇帝の言うとおりにしてきただけなのだ……わしはいやいや命令を聞いていただけなのだ。な、だから許してくれ……」
「……」
マルスは、無言でラングに歩みよる。と！
「ぶわはは、ばかめ、わしの芝居を本気にしたか、死ね！」
ラングは脇にかくしてあった槍でマルスの喉もとめがけて突いてきた！
マルスはそれを横に跳んで避けると、すぐさま剣を振りおろす！　ラングはその剣を槍の柄で受けとめる！
「ふ、まもなくジョルジュの弓兵部隊が援軍に駆けつけることになっているのだ、まんまと罠にはまりおって！」
剣と槍を交えたまま、ラングは、吐きすてるように言った。
「……それまでに、果しておまえが生きていれるかな、ラング！」
マルスもまた厳しい口調で言うと、敵の槍を押しかえす！

●サにチェックがあれば……………132へ　●なければ…………………………159へ

17

「これがアンリへの道……」
砂嵐吹き荒れる広大な砂漠を前に、マルスたちは立ちつくした。
◆K、T、Z、ア、イ、ウ、キ、テにチェックが……
●3つ以上あれば……………………26へ　●2つ以下なら……………………38へ

18

皆に取りかこまれ、守られながらマリーシアがアランのもとへ駆けつけた。
「大丈夫です。このくらいの傷、一瞬のうちに癒してみせますわ」
彼女がライブの杖をアランの頭上で一振りすると、グッタリとなっていたアランの顔に、たちまち生気がみなぎる。
「いや、面目ない」
アランは照れ笑いを浮かべ、ルークの側に駆けよった。
↓141へ

19

バイキングたちが根城としている古城にたどりついたアリティア軍は、まずユベロとユミナを戦いに巻きこまれぬよう、マリーシアとセシルに任せ後方に待機させた。それから、グ

ルリ、城の周囲を固める。
と、ほどなくしてバルコニーにひげ面の大男が現れた。バイキングの親玉・ガイルだ！
「……許してくれといったところで、聞いちゃくれねーんだろうな」
「あたりまえだ！ 村々を襲い非道の限りを尽くしてきたおまえを誰が許す！」
「フン、アリティアの坊やがえらそうに……だったらしゃあねえ、頭かち割ってやるまでだ！野郎ども、いくぜ！」
ガイルの合図に、バイキングたちが襲いかかってきた！ ガイルもまた、鉄の斧をまるで木の枝かなにかのように軽々と振りまわし、迫る！
アリティア軍対マケドニアバイキングの、壮絶な戦いが始まった！

◆R、S、L、キにチェックが……

●一つでもあれば……124へ ●一つもなければ……248へ

20

「え！ ウェンデル司祭が行方不明だって!!」
「はい……先日、突然押しかけてきたアカネイアの兵が連れていってしまったのです……」
ここは、ホルム海岸の南に位置する村。ウェンデルに会うため、マルスらは海賊、盗賊蹴散らして、なんとかここまでやってきた。だが、待っていたのは、村長の残念な言葉だった。

「……なんの用でアカネイアは司祭を……御無事ならよいのだけれど……」
「そう祈りましょう、マルス様。アカネイアといえども、カダインの最高司祭であるウェンデル殿に、そう簡単に手出しできますまい。今はとにかくオグマらを」
「うん、ジェイガン。たぶんオグマもこの村をめざしているはずだ。しかし、この辺りはバイキングの支配地。いくら彼が最強の傭兵でも、子ども二人を連れていたら目立つし、危険だ。よし、さっそく出発だ！」
マルスたちは休む間もなく、村を後にした。
さて、その頃……。

↓66へ

21

飛竜の谷はマケドニア北部に位置する。そこは野生の飛竜が飛びかい、蛮族の支配する土地。大軍で攻めこむより、小数の部隊でそっと行動するほうが侵入は容易と思われた。
仲間が一堂に集まり、マルスに同行するメンバーを選びだした。もっとも強い意志で同行を申しでたのが魔道士のマリク、ドラゴンナイトのミネルバ、盗賊のジュリアンだった。彼らは、皆、ガーネフにさらわれた女性たちと深い関わりを持つものばかり。さすがにマルスも同行を認めないわけにはいかなかった。彼らのほかに同行が決定した者は……。
司祭のウェンデル、踊り子のフィーナ、マムクートのチキ、勇者のオグマ、ジェネラルの

ドーガ、ペガサスナイトのシーダ、そしてパラディンのシリウスであった。
もちろんジェイガンも同行する。
さて、あと一人メンバーを加えるとしたら誰にする?

●シスターのマリーシア……………49へ　●魔道士のリンダ……………97へ

22

ウェンデルがチキに向かって、ワープの杖を振った。その瞬間、チキはワープして、牢獄の中に一人送りこまれた。
牢獄の中では、ジェネラルを中心にした警備の兵たちが数人待ちかまえていた。
「なんだ、この小娘は!?」
突然現れたチキにめんくらう兵士たち。
「小娘って、誰にむかって、言ってんのよー!」
チキはすかさず竜石を使って、神竜に変身! 見あげるほど大きな神竜と化したチキは、霧のブレスを吐いて、あっという間に兵士たちを倒してしまった。
敵をすっかり倒してしまったチキは、牢獄の扉を中から開け、マルスたちを導きいれた。

◆経験値にプラス3して……………………………………47へ

23

もう一人のメンバーはシスターのマリーシアに決定した。
◆オにチェックして……117へ

24

アストリアを仲間に加えたマルスたちは、そのまま城中を進んだ。めざすは、アカネイアの司祭ウィローが潜む玉座の間。
立ちふさがる敵を倒しながら、マルスたちはなんとか玉座の間までたどりついた。
ジョルジュは皆の先頭に立ち、玉座の間の扉を一気に蹴破った！
ダーン！　勢いよく中に飛びこむ。
玉座に座っていたウィローは、それを見て、覚悟を決めたように立ちあがった。その左右には、手下の司祭が二人控えている。
手下の司祭たちがウォームを唱えた。虫が大量に発生し、一行を襲う！
マルスたちは虫に襲われながらも、玉座めがけて懸命に進んだ。
ジョルジュとゴードンは、それぞれの強弓を引き絞り、手下の司祭めがけて矢を放った。
二本の矢が左右の司祭のそれぞれの胸に突きたった。
同時に、マルスが玉座にたどり着いた！



◆マリーシアのアイテムに『マジックシールドの杖』が……
●あれば……314へ　●なければ……424へ

25

敵の猛攻をくぐり抜け、マルスらはなんとか北西の砦にたどりつくことができた。
マルスと行動を共にしたのは、シーダ、ジェイガン、ゴードン、ナバールにフィーナの五人。あとの戦士たちは、アカネイア軍の攻撃によってバラバラになってしまったのだ。
「僕らが一番のりか……どうか、みんな無事でいてくれ！」
と、天を仰ぐマルスの耳に、ナバールの緊張した声が響く。
「……王子、どうやら我々も安心するにはまだ早いようだ」
なんと、安全だと信じた砦には、アカネイアの弓兵部隊が弓を構えて待ちうけていた！
バルコニーから身を乗りだしてマルスらを見おろす男の顔に、皆息を飲む。
大陸一と言われた弓の名手・ジョルジュだ！
さて、かつての戦友にして今は敵の彼に、ナバールとゴードンがなにか言いたそうだ。
どちらが話しかける？

●ナバール……39へ　●ゴードン……68へ

26

過酷な砂漠の旅を前に、負傷者が多いのが気になる。
●傷薬があれば……………107へ　●なければ……………………55へ

27

「逃がすもんですか！」
カチュアがペガサスで敵の前に駆けでると、槍をクルクルとまわしておどす！
「うっく……命だけはお助け〜〜〜〜！」
盗賊は、宝箱を投げだすと森の中へと消えていった。
箱の中には小さな星のかけらが！
「おお、それは『星のスコーピオ』！　十二個のかけらのうちの一つです」
ウェンデル司祭が目を輝かせる。
マルスらは星のかけらを手に、本隊に合流すべくラーマン神殿をあとにした。
◆『星のスコーピオ』を入手した。星のかけらリストにチェックして……………243へ

28

「！」

平気だといいながらも、思わずマルスが膝を落とした。
「マルス様!」
シーダが駆けより、助けおこす。
見ると、マルスだけではない。皆、あきらかに消耗している!
◆エ、ス、U、Vにチェックが……

●三つ以上あれば ……………78へ　●二つ以下なら ……………46へ

29

翌日、重苦しいムードの中で前進を続けていたマルスたちは、険しい山道にさしかかったところで、ハッと我に返った。数十歩離れた右手の草むらで、なにかが音をたてたのだ。
「ジェイガン、そこからなにか見えるかい?」
輸送隊の馬車の中、ほかよりも高い位置から周りを見まわすことのできる軍師に、マルスが声をかける。
「いや、ここからでも無理です。誰か、足の速い者に、偵察に行かせたほうが得策でしょう」
馬車から降りてきたジェイガンが、冷静にそう判断した。

●アランに行かせる ……………75へ　●ルークに行かせる ……………58へ

30

ニーナが、シリウスと共に祭壇を離れたその瞬間！　ついに暗黒竜メディウスが、完全な復活を遂げた。辺りの闇の気配は、いっそう濃くなる。

「シーダ、ジェイガン、行ってくるよ……」

マルスは、一言そうつぶやくと、祭壇までの短い距離を、一気に駆けぬけた。

『光の王子……マルスか……久しぶりだな……』

メディウスが、辺り一面に響きわたる不気味な声を放った。

とたんに、祭壇の四方から、巨大な地竜が姿を現す。

ところが、意外なことが起こった。

ピキ――――――ン!!

まばゆい光がファイアーエムブレムから放たれ、地竜をすべて消しさってしまったのだ。

『うぬぅ……それは、封印の盾。わが地竜族を、再び闇に葬りさろうとするのか!?　そうはさせんぞ、光の王子よ……我と勝負だ！』

グガアァァァァァァァゴォォォォォ……!!

メディウスが口を大きく開け、黒い霧を放った。暗黒竜の強力な武器、闇のブレスだ!!

マルスはとっさに、ファイアーエムブレムを掲げる。

「神様……どうか、マルス様を……」



遠く離れた場所で、シーダが、一心に祈りはじめた。

●現在のレベルが10以上なら　……10へ　●9以下なら　……………193へ

31

「マルス様、ここは一つご決断を。シスターがたとて、あのような状態は辛いことでしょう。大義のために犠牲を出すことは、いつの時代の英雄も行ってきたことです」

ジェイガンが、マルスの耳にそっとささやいた。

「ジェイガン！　おまえは、僕に、あの四人のシスターたちを殺せと⁉」

「殺すのではありません。解放するのです。皆、きっとわかってくれるでしょう」

マルスの反論に、ジェイガンは、辛そうに、しかしきっぱりと答えた。たしかに、ジェイガンの言うことは一理あるが……。マルスの表情に苦悩の色が宿る。

●ジェイガンの意見に賛成　……100へ　●反対だ！　……………60へ

32

ミシェイルがマルスに手渡したものは、スターライトの魔道書だった。

「ガーネフにはこの魔法しか効かぬ。これはヤツから奪ってきたのだ……」

「ガーネフから……。ヤツはどこにいるのです……」

「ガーネフは竜の祭壇にいる。ふ、無様だな……。俺としたことが、ガーネフにやられるとは……」

ミシェイルの傷は重く、とても助かりそうにもない。兄の最期をみとるため、ミネルバがその手をそっと握りしめた。

「ミネルバか……。マリアを助けてやってくれ。頼む……」

やっとこれだけを言うと、ミシェイルは静かに息をひきとった。

◆マリクの装備表に『スターライトの書』を加えて ……………………………**226**へ

33

部屋の中では、ラングが一人、石畳にひざまずいていた。

「マルス王子よ、すまぬ許してくれ、わしは皇帝の言うとおりにしてきただけなのだ……わしはいやいや命令を聞いていただけなのだ。な、だから許してくれ……」

「……」

マルスは、無言でラングに歩みよる。と！

「ぶわはは、ばかめ、わしの芝居を本気にしたか、死ね！」

ラングは脇に隠してあった槍でマルスの喉もとめがけて突いてきた！

しかし、ジェイガンの忠告を心に刻んでいたマルスは動じることなくキルソードでその槍

をはねあげる！

「ふ、ふん！　もうすぐジョルジュの弓兵部隊が援軍に駆けつけることになっているのだ、まんまと罠にはまりおって。貴様らなど一網打尽、こ、降伏するなら今のうちだぞ！」

武器を失ったラングは、叫びながら部屋の中を逃げまわる。入口にはドーガとシリウスがデンと構えており、部屋の外には逃げられない。

「……いいかげん見苦しいまねはやめろ、ラング。さあ、槍を拾え。僕は騎士道に基づき、正々堂々とおまえを倒す」

マルスは、ラングを見すえると言った。

●サにチェックがあれば……215へ　●なければ……471へ

34

国境を固めていたマケドニア反乱軍を撃破したマルスらは、さらに兵を進め、マケドニアの砦を臨むところまでやってきた。

その頃、砦の南東に位置する森の中、マルスらと合流するために、ペガサスをかる女騎士が一人。彼女こそ、マケドニア白騎士団・ペガサスナイト三姉妹の一人パオラだ！

「パオラ、パオラじゃないか！」

懐かしい声に手綱を引き立ちどまると、木の影から一人の青年が現れた。

34

「ジュリアン！　あなた、無事だったのね、よかった！」
思わぬ出会いに、パオラの顔に久しぶりの笑みがこぼれる。
ジュリアン。かつて、悪の司祭ガーネフ討伐のさい、パオラ同様、マルスたちと共に戦った一流の腕を持つ盗賊の若者だ。
「あなたは、シスター・レナとしあわせに暮らしていたのでしょ？　……それなのにマケドニアがこんなことになってしまって……。レナは元気？」
「それが……。夕べからレナさんは行方不明なんだ……必死に捜したんだが、どこにも……」
ジュリアンは、悲痛な面もちで唇をかんだ。
「そんな！　マリア王女も行方がわからないというし、シスターばかりがどうして……」
「……マリア王女まで!?　なぜ？　……とにかくオレは、マケドニア中の村を捜してみるつもりだ。……ミネルバ王女が人質になっているという噂を聞いたが、大丈夫なのか？」
「カチュアがアリティア騎士団を連れてきてくれたから。私も合流してミネルバ様を！」
「そうか……本当なら、オレも王女救出を手伝いたいところだが……」
「大丈夫。王女は私たちがきっと助けだすから、あなたはレナを！」
「ああ！　ありがとう。マルス王子によろしく伝えてくれ！」
そういうと、ジュリアンは風のように走りさっていった。
その姿を見送ったパオラは、再び厳しい表情になり、木々の影からマケドニアの砦を仰ぎ

見ると、祈るようにつぶやいた。

「……ミネルバ王女……どうか御無事で……」

⬇53へ

35

一行は明りを避けて脇道へ入った。どんどん進んでいくと、今度はなにやら変な物音が。
そっと探ってみると、魔竜が二匹大きないびきをかきながら眠っている。
眠っている今なら攻撃をしかけるチャンスだが……。

●攻撃する……………………13へ　●やりすごす……………………56へ

36

大ワープの術は空間をねじり、一瞬にしてマルスたちをアリティアに運んだ。
マルス王子帰還す！
この情報は、あっという間にアリティア中を駆けめぐった。アリティアの民はこの報せに涙して喜び、アカネイアの軍隊には緊張が走った。
アリティアに駐在してアカネイア軍を指揮しているのはエイベル将軍。将軍は騎士団を東西にわけ、マルスたちの侵攻に備えた。
東の部隊はパラディンを中心とする騎馬部隊。西の部隊はアーマーナイトを中心とした歩

兵部隊が守りを固める。

やむを得ずマルスも部隊を二つにわけ、それぞれが東西に進行する作戦を立てた。

西へは、アラン、ドーガ、セシル、ルーク、オグマ、ナバールらを、東へは、ウェンデル、マリーシア、マリク、リンダ、チキらを向かわせる。

さらにドラゴンナイトやペガサスナイトたちには、東西をつなぐ連絡役を務めさせることに。さて、マルス自身は東と西、どちらの部隊に加わる？

●東の部隊……………………167へ　●西の部隊……………………4へ

37

「そうだ。気は優しくて力持ちのドーガなら、ニーナ様も心を開くかも知れない。それにドーガの力をもってすれば、ダメでもニーナ様をかついでこられる！」

マルスは、名案だとばかりにドーガを見た。しかし――。

「その案は、かなり苦しゅうございます……マルス様……どうか冷静に……」

ジェイガンが、申し訳なさそうに進言した。

「マルス様……こればっかりは、力任せってわけにはいかないんじゃあないですか？」

ドーガも、ジェイガンに同意。たしかに、もっともな意見ではある……。

●マルスが説得する……………250へ　●シリウスが説得する……………177へ

38

過酷な砂漠の旅を前に、兵士たちの状態を見てまわるマルス。
大怪我をした者はいないようだが、これからの試練を考えると予断は許されない。

●傷薬があれば…………107へ　●なければ…………79へ

39

「貴様、ハーディンの犬になりさがったか」
「なに!?」
ナバールの挑発に、ジョルジュの細い眉がくく――っとつりあがる。
たまらず、ゴードンがナバールを押しとどめる。
「や、やめてくださいナバールさん！　ぼくに、ぼくに話をさせてください！」　**➡68へ**

40

ファルシオンの攻撃を受けたメディウスは、死に物狂いで闇のブレスを吐きつづけた。恐ろしい息は、マルスだけでなく周囲の者をも容赦なく襲う。
「回復の杖を持ったシスターは、味方の回復に努めよ！」
再び老軍師の声が響いた。シスターたちが、いっせいに杖を振るう。傷ついた者の体が、

一瞬にして元気を取りもどした。マルスは、体じゅうに力が蘇ったことを感じると、大声で叫んだ。
「メディウス！　覚悟しろ!!」
その手のファルシオンが、キラリと光る!!
◆バトル対戦表で戦います。マルスはC、相手はD。相手より数値が……
●上……………………450へ　●下……………………460へ

41

残る山賊は三人。まずは強靱なドーガが手槍を持って先頭の一人に襲いかかっていった。アリティア一の弓の腕前を誇るゴードンは、後方の山賊に照準を合わせ、弓を引く。速さに自信のあるセシルは、細身の槍でまん中の山賊を狙った。ドーガとゴードンは、それぞれ一撃で相手を倒し、セシルの槍攻撃で苦しむ残る一人には、マルスのレイピアがとどめをさした。これで、邪魔者は消えさった。あとは、ロレンス将軍と対面するだけだ。
◆経験値にプラス3して……………………230へ

42

いよいよパレス城攻略が始まった。報告によれば、かつてのアカネイアの騎士団は皆ハー

ディンに反旗をひるがえし、今城を守っているのは金で雇われた傭兵がほとんどだということだった。
「ヤツらなら、命をかけてまで城を守るとは思えないな」
城をうかがいながら、魔道士のマリクがつぶやいた。
「しかし、それでも敵は僕たちの倍はいる。油断はできない」
そう警告を発したのは、オレルアンの狼騎士団の一員であったロシェ。彼は、騎士団の中ではただ一人国に帰らず、たっての希望でマルスの軍に加わっていた。
「ロシェの言うとおりだ。この戦力で普通に攻略したのでは、城を落とすことはまず不可能だろう。そこでだ……」
マルスは、皆に胸に秘めていた作戦を明かした。
「まず軍を二つにわける。主力部隊と奇襲部隊にだ。主力部隊は正面から全力で城を攻略する。奇襲部隊はその隙をついて秘かに城中に侵入する。主力部隊を率いるのはドーガ。奇襲部隊は僕が率いる！」
作戦の発表の後、マルスは奇襲部隊の人選に入った。奇襲部隊は小数精鋭で構成しないと意味がない。そこで選び出されたのは、勇者のオグマとアストリア、スナイパーのゴードン、魔道士のマリク……。さて、あと一人は？

●シスターのマリーシア　……………23へ　●司祭のウェンデル　……………133へ

43

ヒュン！

バイキングが本拠地とする城まで、あと一歩と迫った時。一本の矢がマルスをかすめた！

敵のハンターだ！

◆バトル対戦表で戦います。マルスたちはA、相手はC。相手より数値が……

●上……………108へ　●下……………61へ

44

隕石の直撃を受けたマルスとオグマの足が止まった。アストリアだけは、そのまま一気に魔道士との距離をつめ、これを一撃で倒した。

怒り狂った残り二人の魔道士は、アストリアめがけてエルファイアーの呪文を唱える。紅蓮の炎に身を包まれ、高熱に身もだえるアストリア。

「ぎゃ———！」

だが悲鳴を上げて倒れたのは、二人の魔道士のほうだった。マルスとオグマが剣を振るって倒したのだ。魔道士が攻撃をアストリアに集中させている間に、ウェンデルがリブローの杖で二人の体力を回復させていたのだ。

◆経験値にプラス3して……………67へ

45

先ほどの村で整えた武器が戦力アップにつながったのか、アリティア軍の活躍はめざましく、あっという間に反乱軍を蹴ちらした！

「さあ、パオラ。僕らと共にマケドニアの砦へ！　そしてミネルバ王女を助けだそう」

「はい！」

◆**経験値にプラス４して**……………………………………**134へ**

46

「ああ、こんなところに宝箱が！」

ジュリアンが火竜の遺体の下に、宝箱を発見した。まだ体力の残っている戦士たちで、重い亡骸をどかす。宝箱の中には、星のかけらの一つ、星のピスケスが入っていた。

「さあ、こんなところに長居は無用だよ！」

チェイニーにせかされて、さっき来た通路をまっすぐと戻ることに。

◆**『星のピスケス』を入手した。星のかけらリストにチェックして**

●**ケにチェックがあれば**……**103へ**　●**なければ**……………**377へ**

47

牢の中に捕らわれていたのは、アベルの恋人のエストだった。エストはペガサスナイト三姉妹の末の妹でもある。
「申し訳ありませんマルス王子。わたしが人質にされたばかりに、アベルはあなたを裏切ることになってしまったのです」
牢から解放されたエストは涙ながらに、アベルの裏切りの事情をマルスに語った。
「そうか。そんな事情があったのか……。苦しかっただろうなアベル……」
「マルス王子、お願いです。アベルを許してやってください」
「もちろん許すとも。それよりも、きみが助けだされたことを一刻も早くアベルに伝えよう。そうすれば、彼もこちらの陣営に駆けつけるだろう」
その時、空から白い影が舞いおりてきた。見れば、それはペガサス。乗っているのは、ペガサスナイトのパオラだ。妹のことを聞きつけてやってきたのだ。
「エスト、無事だったのね」
救出された妹に駆けよるパオラ。エストもたまらず姉に抱きついた。
「パオラ、再会した二人を引きさくようで申し訳ないが、すぐに西のアベルのもとに飛んでくれないかい？」
マルスの命を受けたパオラは、ペガサスにまたがって西へと向かった。

●セにチェックがあれば……………65へ　●なければ……………………130へ

48

と、言われても……。
マルスは、そっとジェイガンを見た。老軍師は、すっと立ちあがり、商人の脇に並ぶ。
「あいにくだが、我々は持ちあわせが乏しい。この次の機会にさせてもらおう」
「そりゃ、残念ですな。またどこかの町で会ったら、その時はお願いしますよ」
商人は相変わらず調子のいい笑みを浮かべながら去っていった。

⬇467へ

49

あと一人はシスターのマリーシアを加えることにした。

⬇62へ

50

「マルス様！」
マルスを見つけたアベルはすさまじい苦悶の表情を浮かべた。
思わず後ずさりし、兵を鎮めさせる。
「アベル、なにがあったんだ。きみが裏切るなんて信じられない」

無防備に近づくマルスをじっと見つめるアベル。
「やはりあなたにだけは剣を向けることはできません……。あなたと共に戦います。軍勢に加えてください」
剣をさやに収めたアベルは、ひざまずいてマルスを迎えいれた。
「実はエストが人質になっていたのです……」
拳を震わせながら、打ち明けるアベル。エストはアベルの恋人のペガサスナイトだ。
「アベル、きみは僕のためにエストをあきらめたのか……」
「もう言わないでください。私が決めたことです……」
アベルはうなだれたまま答えた。
「まだ間にあうかもしれん。伝令を飛ばして、東へ向かった部隊にエストを救出させよう!」
「その役割は私が!!」
エストの主君にあたるミネルバが、大いそぎでドラゴンの手綱を引いた。

◆経験値にプラス3して

●セにチェックがあれば ……………104へ ●なければ ……………………81へ

51

「そうだ。傷薬が残っていたんだっけ……」

マルスは誰にともなくつぶやくと、残り少ないそれを適当に割り、怪我をしている者に手渡してまわった。
「さぁ、準備はいいかい？　そろそろ出発しよう！」
皆の表情に英気が戻ってきたのを確認すると、マルスは努めて明るく声をかけた。
◆アイテムリストの『傷薬』のチェックをすべて消して……………70へ

52

「……王子、おそらくラングのヤツはこの中に……」
城の一番奥にある部屋の前までやってくると、ジェイガンが言った。
そこはかつて、グルニア王の玉座があった部屋で、大きな扉にはグルニアの紋章のレリーフが施されている。
「私はセシルと共に、行方不明になっている人々を捜しますゆえ、ラングのことはお任せします……ヤツのことです、どんな卑劣な手でくるか。どうか油断なさいませんように！」
「ああ！」
マルスはジェイガンの言葉に力強く答えると、扉を開けた！
◆マルスが『キルソード』を……
●持っていれば……………33へ　●持っていなければ……………16へ

皆がそれぞれの思いで見守るマケドニアの砦の中では敵将・リュッケが、不利な戦況にいらだっていた。

53

と、そこへ！
一陣の風と共に、一人のドラゴンナイトがバルコニーに現れた！
そのナイトを見た、リュッケの表情が凍りつく！
「あ、あなたは、ミシェイル王子！　先の戦いで、妹君のミネルバ様にお命を奪われたはず」
「あいにくとこうして生きている。それにしてもリュッケ、おまえのような小心者が大それたことをしたものだな。おそらく、ハーディンにでも乗せられたというところか」
端正な顔に冷たい笑みを浮かべ、ミシェイルは続ける。
「まあいい。俺にはもうそんなことはどうでもいい。それよりも、ミネルバを俺に渡せ。あいつだけは俺の手でカタをつけねば気がすまぬ」
「しかし、ミネルバ王女は我々にとっては大事な人質……」
「つべこべいわずに早く連れてこい！　それともこの槍で串ざしにされたいか！」
ミシェイルは、槍の先をリュッケの喉もとに突きだした！
「わ、わかりました！　誰か王女をお連れしろ！」
ミシェイルの前に引きだされた王女は、すでに無数の傷を負っており、苦しい息の下でつ

ぶやいた。
「……ミ、ミシェイルどうして……」
「……一時はこの国を守るためと、この兄に剣を向けたおまえが……無様な姿だな」
それだけ言うと、ミシェイルはミネルバの傷ついた体を、ドラゴンの上に引きあげた。そして……。
「さらばだ、リュッケ！　ミネルバはもらっていくぞ！」
と、一言いいおき、バルコニーから、天高く昇って行ってしまった。
一方、ミネルバがミシェイルにさらわれたことなどつゆ知らぬマルスたちは、砦から北東に位置する橋の近くまで来ていた。
が、そこには盗賊が待ちぶせ！

◆バトル対戦表で戦います。マルスたちはB、相手はE。相手より数値が……

●上……………………91へ　●下……………………77へ

54

マルスらが、故国を想い暗い夜の海を航行している頃、カダインのとある村では……。
小さな空き家のベッドに、ミシェイルがミネルバを横たえているところだった。
「ミネルバよ、この村で待っていればたぶんマルスに会える。あの小僧、好きにはなれぬが、

たしかに英雄の器。それが証拠に、ヤツの周りには自然と人が集まる。ヤツに力を貸してやれ」
「……兄上、変わったな。私を助けた上に、アリティアに協力しろとは……」
かつて敵として戦った兄の変貌ぶりに、ミネルバは感慨深げに言う。
「……父をこの手にかけ、その報いからおまえの槍を胸に受けることとなった。しかし、そんな俺をマリアが救ってくれた。こんな兄のために、あいつは徹夜で介抱し、そして涙を流し神に祈っていた……俺はその姿に己の罪を深く恥じたのだ……」
「兄上はこれからどうするのだ？　できれば一緒に……」
「そのつもりはない。俺はただ、マリアを捜しだし、マケドニアに連れて帰りたいだけだ。あいつを救いだすことが、せめてもの俺の罪滅ぼしだと思っている。では、俺はもう行くぞ」
ミシェイルは窓から身を躍らせ、ドラゴンに飛び乗った。
「ミシェイル……」
久しぶりに心通わせることができた兄――。ミネルバは窓辺に駆けよると、次第に小さくなっていく兄の姿を見送った。

➡95へ

55

マリーシアが、ライブの杖で戦士たちを癒してまわる。
その間、フィーナもまた不思議な踊りを踊りつづけ、戦士たちの力はみるみる回復！

すべての治療が終ったとき、マリーシアとフィーナの額には大つぶの汗が。

◆ツにチェックして……………………93へ

56

寝ている竜をわざわざ起こすことはない。マルスたちは足音を忍ばせて、その場をそっと通りすぎた。

⬇216へ

57

傷薬でマルスの火傷を癒していると、

「ああ、こんなところに宝箱が！」

ジュリアンが火竜の遺体の下から宝箱を見つけてきた。そしてその中には星のかけらの一つ、星のピスケスが入っていた。

「さあ、手当てがすんだら長居は無用だよ！」

チェイニーにせかされて、さっき来た通路をまっすぐと戻ることに。

◆アイテムリストの『傷薬』を一つ消す。『星のピスケス』を入手した。星のかけらリストにチェックして

●ケにチェックがあれば……103へ　●なければ……………377へ

58

ルークは、背筋をぴんとのばして、颯爽と茂みに立ちいった。が、手斧を持った二人の山賊が、ルークの行く手を阻んだ。
とっさに身の危険を感じ低姿勢でかわしたが、一瞬遅し！
ザシュ――――ッ。山賊の斧は、ルークの肩口をかすめた。
反射的に起きあがったルークも、手槍で応戦。我に返り冷静に状況を把握したルークにとって、山賊などは敵ではなかった。一撃で仕留め、さて残るは一人……、と体勢を立てなおした彼の目に、恐ろしい速さで逃げていく山賊の後ろ姿が映った。
「ふん、取り逃がしてしまったとは残念」
◆Aにチェックする。経験値にプラス1して……………………**99**へ

59

「む、あやつが持っているのは、ラーマン神殿の宝物！」
森に向かって逃げていく盗賊の一人を指さして、司祭が声をあげる！
●Iにチェックがあれば……………**119**へ　●なければ……………………**27**へ

60

「僕は……僕にはそんなこと……できない……っ！」
マルスが悲痛な叫び声をあげたその時、それまで、事の成り行きを黙って見ていたマリクが、すっと歩みはじめた。
「マルス様……あなたばかりに辛い思いをさせるわけにはいきません。私は、エリス様のもとに。そして、エリス様がもし目覚めなければ、この手で……」
マリクは、ゆっくりと、しかしたしかな足取りで、祭壇に向かった。

⬇12へ

61

平原を進むアリティア軍は、岩山から矢を射かけてくるハンターの絶好の餌食！
「このままではまずい！　空と陸から二手にわかれて敵に接近する。アーチャーたちは弓で援護を！」
ジェイガンの指令で、ペガサス部隊が空から、そして動きの素早いジュリアンとオグマが矢の間を縫って敵に迫る！
「！　き、貴様らいつの間に！」
油断をしていたハンターたちは、目の前に現れた敵にうろたえる！
「あいにくだったな！」

間合いをつめられたハンターたちに、なすすべはなく、アリティア軍の前に一網打尽！
◆Lにチェックする。経験値にプラス5して……………………………19へ

62

ガトーに導かれ、マルスたちはマケドニアの北部に位置する飛竜の谷に潜入した。
飛びかう飛竜、凶暴な蛮族をたくみに避けながら谷を進んでいくマルスたち。
だが、この隠密行動をとるマルスたちの居場所をたくみにかぎつけ、訪ねてくる者があった。それはミネルバの兄ミシェイル王子だった。
ミシェイル王子は深手を負っているらしく、息をするのも苦しげだった。
「マルス、これをきみに渡すためにやってきたのだ……」

↓32へ

63

「ウェンデル司祭、ワープの杖を！」
騎馬部隊をほとんど制圧したマルスは、ひとまず自分だけ西へ移動することにした。
ウェンデルが杖を振ると、一瞬のうちにマルスが消えた。残された敵の騎馬の兵士たちは突然の出来事に目を白黒させ驚いた。
中には己の剣を地面に突きたてて悔しがったパラディンもいた。

西側へ着いたマルスはアベルの姿をその目でたしかめ、アベルに向かって全力で走ったのだった。

⬇50へ

64

城中に潜入したマルスたちは、敵兵を倒しながら奥へ奥へと進んでいった。その途中、偶然にも捕らわれの身になっていたボア司祭を救出することができた。

救出されたボア司祭は、悲痛な面もちでハーディン乱心の秘密をマルスに語った。

「ハーディン公は知ってしまわれたのです。結婚はしたものの、ニーナ王女の愛が自分に向けられていないことを……」

ニーナ王女は国の繁栄のため、オレルアン王弟のハーディンと結婚した。しかし、彼女の心には、かつての命の恩人、黒騎士カミュへの思いが消えずに残っていたのだ。

心の底から王女を愛していたハーディンは、このことに気づき、一人苦悩した。

「その時ガーネフが現れ、ハーディン公を誘い、闇のオーブで公の心を暗黒に染めてしまったのです……」

「ガーネフ！　ハーディンの乱心を後ろから操っていたのは、ヤツだったのか？」

「はい。ヤツは今だ世界を暗黒に変えるという野望を捨てておりません。ハーディン公はその暗い野望のために利用されているのです……」

ボア司祭は苦しげに語った。

◆経験値にプラス3して……………………………80へ

65

エストを助けだしたマルスたちは、そのまま城に向かった。しかし簡単に攻めこむわけにはいかない。城の大手門は、グラの騎士たちが厳重に守りを固めている。

マルスたちが様子をうかがっていると、西からオグマたちが合流した。その中には、アベルの姿もあった。エスト救出の報せを聞き、オグマたちに加わったのだろう。

「マルス王子……」

アベルは伏し目がちにマルスの前に立った。

「アベル、なにも言わなくていいんだ。きみの気持ちは充分わかっている。それよりも一刻も早くきみと会いたがっている人がいるよ、さあ……」

マルスはそう言うと、アベルの手を引き、エストのもとへ導いた。

⬇88へ

66

オグマたちは、ホルム海岸の北東にある森の中に身を潜めていた。

「ユミナ、ユベロ。この辺りはあの悪名高いマケドニアバイキングの支配地だ。出来れば近

寄りたくなかったのだが、ウェンデル司祭がいる村に行くためにはしょうがない」

オグマは、小さな王子と王女を振りかえると、言った。

「バイキング……ねえ、オグマさん。ぼく……恐い……」

つかんだオグマの手を揺すりながら、王子ユベロが不安気に言った。

「ユベロ、しっかりしてよ。あなた男でしょ！　私たちもいざとなったら戦うのよ！　あなた、炎の魔法を使えるじゃない」

王女ユミナが、弟を叱りつける。

「……でも、ウェンデル先生は、戦争はいけないことだって……」

「もう、つべこべいわないの！　私たちはもう二人っきりなのよ。ロレンスだって、私たちを守って死んでしまった……」

それまで気丈にしていた幼い王女の目に涙が浮かび、ハラハラとこぼれ落ちた。

「ごめん、ごめんよユミナ！　ぼく、しっかりするから。だから、もう泣かないで！」

「シッ！　二人共静かに!!」

二人の様子を見守っていたオグマの目が、優しい保護者のものから百戦錬磨の傭兵のそれへと変わった。

そのただならぬ気配に、思わず二人は息を飲む。

「……敵に気づかれたらしい。やむをえん、一気に切り抜ける。二人共離れるなよ！」

それだけいうとオグマは二人をかばうようにして立ち、剣を抜いた！　と、同時に、薄ぐらい林の中から、バイキングたちが襲いかかってきた！

◆バトル対戦表で戦います。オグマはC、相手はE。相手より数値が……

●上　……………………139へ　●下　……………………111へ

67

マルスたちは宝物庫を制圧した。だが、宝物庫にはほとんど宝が残されていなかった。マルスたちの襲撃に備えて、ハーディンが宝をすべて別の場所に移してしまったようだった。

➡421へ

68

「ん？　ゴードンか！　……少しは逞しくなったようだな。弓の腕はあがったか？」

ゴードンに気づくと、それまで厳しかったジョルジュの表情が、ふっとゆるむ。

属する国は違うが、同じ弓兵としてジョルジュはゴードンを弟のようにかわいがっていた。

「はい、今ではアリティア一の弓の名手と言われるようになりました。でも、ぼくがここまで上達できたのは、みんなジョルジュさんのおかげです！」

「……で、俺と勝負でもしようというのか？」

「いいえ！　とんでもない。そうじゃなくて……その、また、一緒に戦って欲しいんです！」

この申し出に、ジョルジュはあぜん、味方のマルスやジェイガンでさえ思わず絶句！

「無理は承知の上です。でも、ジョルジュさんは本当にハーディンを信じて戦っておいでなのですか？　冷静に見れば、ハーディンがどんな無茶なことをしているか、わかるはず」

ゴードンの言葉は、この戦いが始まってからずっと迷いつづけていたジョルジュの心を大きく揺さぶった。

「……俺はニーナ様には忠誠を誓うが、ハーディンのやりかたは好きになれない。それゆえこの前も、ラングの援軍要請を無視したのだ……ハーディンは力で他国を侵し、反抗する者は有無を言わさず処刑する。それに、今のアカネイア軍は金で雇われたゴロツキの集まりだ。騎士の誇りなどかけらもない……」

「ジョルジュ、僕からもお願いする。僕たちと共に戦おう！　再び、正しいアカネイアを取りもどすために!!」

マルスの言葉に、ジョルジュの心から迷いが消えた。

「全軍、戦闘体勢を解除！　俺はこれより、アリティア軍と運命を共にする。部下のおまえたちにはすまないと思う。しかし、自分の心に嘘はつけない……おまえたちは国に戻って、ニーナ様をお守りしてくれ！」

ジョルジュの言葉に、弓兵たちは静かに弓を降ろした。

こうして、ジョルジュはアリティア軍に参加、祖国に弓をひくこととなった。
さらに、それもガトーの導きか、ジョルジュは星のかけらの一つ、星のサジタリスを持っていた。

◆『星のサジタリス』を入手した。星のかけらリストにチェックして……85へ

69

アランの傷は気になるが、今は頑張って、戦闘員全員でこのピンチを乗りきるしかない。

◆Gにチェックして……41へ

70

城を出たところで、待ちかまえていた蛮族に、弱いマリーシアが襲われかかった。が、元気を取りもどしていた兵士たちはマリーシアをかばい、あっという間に敵をうち倒す！　しかし、この蛮族の出現で、思わぬ幸運が!!
なんと、敵のふところから、弓矢系の兵士のクラスチェンジアイテムである、オリオンの矢が出てきたのだ。マルスはこれを、ライアンに渡した。
「よかったな、ライアン。これでお前もスナイパーの仲間入りだ」
ライアンの兄、ゴードンが、弟の肩をポンと叩いた。

城の外は、青空が広がり、さっきまでの戦いが嘘のように平和に見える。
しかし、この世界は、闇の力によって、着実に蝕まれつつある。それを阻み、真の平和をもたらすのが、僕らの努めだ――。マルスは青い空を眺めながら、改めてそう心に誓った。

◆ライアンがスナイパーにクラスチェンジした。装備表の職業にチェックする。経験値にプラス１して……………………２４６へ

７１

防御力に優れているドーガは、鉄の槍を手に、ゆっくりとアーマーナイトへ接近した。そして、敵が攻撃を仕かけると見たらすかさず一歩後退、今度は手槍で間接攻撃と、さすがに効果的な動きを心得ている。
一方のゴードンはといえば、こちらもさすが、アリティア一のアーチャー。続けざまに鉄の弓を放ち、敵を翻弄。
二人は鮮やかな動きで、みごとにアーマーナイトを倒した。

◆経験値にプラス１して……………………１３７へ

７２

「あれ、ジュリアンは？」

戦いを終え、マルスが辺りを見まわして言った。すると、
「王子！　ここです!!」
ラーマン神殿の裏からジュリアンが現れた。
「裏口から、これを持って逃げようとしてた盗賊がいたんで、奪いかえしてきました」
ジュリアンの手の中には、星のかけらがひとつ。
「おお、それは星のスコーピオ！　十二個のかけらのうちの一つですぞ」
ウェンデル司祭が目を輝かせる。
マルスらは星のかけらを手に、本隊に合流すべくラーマン神殿をあとにした。

◆『星のスコーピオ』を入手した。星のかけらリストにチェックして**……………243へ**

73

盗賊を倒したところに、今度は魔道士が現れた。
「我々はアリティアの者ですが……」
マルスが、話しかけようとしたその時！　魔道士はいきなりファイアーを繰りだしてきた！
「そんな、カダインの魔道軍は中立のはずでは!?」

●イにチェックがあれば……………261へ　●なければ………………………242へ

74

傷ついたジュリアンは、開かずの扉に挑戦するのを断念。マリーシアに回復の術・ライブをかけてもらうために城の外へ。

シリウスはジュリアンを送りとどけると、再びマルスらを追って城の奥へと突きすすむ！

➡114へ

75

マルスの命を受けて茂みに入ったアランは、突然閃いた銀色の光を見、とっさに身をかわした。そして、手に持った銀の槍を軽やかにさばく。

ザシュッ！　ザシュ――――ッ!!

マルスたちを狙っていたのは、手斧を持った二人の男だった。しかし、相手が悪かった。聖騎士ジェイガンの愛弟子にして、ジェイガン引退後、騎士団を統率しているアランを前に、彼らは、なすすべもなく崩れおちた。

「マルス様、ご心配にはおよびません。相手は山賊でした」

数分後に茂みから出てきたアランは、端正な顔に笑みを浮かべ、そう言いはなった。

◆経験値にプラス2して……………………………………99へ

76

ビシュッ！　ライアンが放った矢は、盗賊の肩をかすめた！
「ひいい！」
盗賊は悲鳴をあげ、持っていた荷物を放りだすと、一目散に逃げていった。そして、盗賊の持っていた荷物の中には、8000ゴールドもの大金が入っていた。

➡126へ

77

盗賊は、鉄の剣を手に、先頭を走っていたセシルに切りかかってきた！
不意をつかれた彼女の白いふくらはぎにうっすら血がにじむ！
「くっ……チョロチョロと!!」
すかさず槍を繰りだすセシル！　その切っ先は、盗賊の喉を貫いた！　それを、近くの草むらで見ていたほかの盗賊たち。かなう相手ではないと悟ってか、足早に逃げていってしまった。そして、そのあとには、2000ゴールドもの金貨が詰めこまれた麻袋が！
「このぐらい、かすり傷よ」と苦笑いするセシルに、マリーシアがライブをかけ癒す。

◆経験値にプラス2して……………………125へ

78

「ほら、グズグズしてたらみんなバーベキューになっちまうよ！　先へ急ごうよ！」
チェイニーにせかされて、さっき来た通路をまっすぐ戻ることに。

●ケにチェックがあれば……103へ　●なければ……377へ

79

「みなさん、大丈夫ですか？　ほら、じっとして……」
マリーシアが、ライブの杖で戦士たちを癒してまわり、フィーナもまた皆を元気づけようと不思議な踊りを踊りつづける。やがて戦士たちは、みるみる回復！

➡93へ

80

ボア司祭は、ハーディンが籠る玉座の間への最短ルートを二つ教えてくれた。宝物庫を抜けていくルートと大広間を抜けていくルートだ。
さて、どちらを選ぶ？

●宝物庫ルート……233へ　●大広間ルート……477へ

81

アベルを仲間に加えたマルスたちは、西の村に入った。村には盗賊が潜んでおり、隙あらばマルスを倒そうとしていたが、反対にマルスにやっつけられてしまった。
マルスは盗賊の持っていたワープの杖を取りあげた。
「このワープの杖はウェンデル司祭に渡そう」
マルスはペガサスナイトのカチュアに命じて、ウェンデルにワープの杖を届けさせた。
◆ウェンデルの装備表に『ワープの杖』を加える。経験値にプラス1して ……**104へ**

82

ザシュッ！
アランの槍は、正確に一人のナイトの胸にとどめをさした。しかし、ドーガがもう一方に駆けよろうとしたとき、敵は馬を方向転換させ、反対方向に猛ダッシュ！
重い鎧をつけたドーガでは、とても追いつめることは無理だった。
「くそう、すばしっこいヤツめ！　逃げるぐらいなら、最初から来るんじゃねぇ！」
地団駄を踏んで悔しがるドーガ。
「相変わらず血気盛んね、ドーガ！」
声に振りかえると、そこには……。かつての暗黒戦争で共に戦った、マケドニア白騎士団

ペガサスナイト三姉妹の次女、カチュアの姿が！
「カチュア、カチュアじゃないか！　無事だったのか!!」
◆経験値にプラス1して……………………………………179へ

83

「マルス様、彼らはあなたの命に狙いをしぼっています。このままではあなたを守りきれないかもしれません。どうか西の村へ瞬間移動し、オレルアン王に兵を引くように談判してください」
戦局を冷静に見すえていたジェイガンが、マルスに決断をうながした。
マルスはこの助言を受けいれ、ウェンデルのワープの杖によって瞬間移動した。
⬇120へ

84

盗賊は宝箱を放りだすと、セシルに向かい剣を振りかざす！　彼女はそれを、槍の柄で受けとめると、グイと押しかえした！
その華奢な体からは想像もつかないような女騎士の力に、盗賊は思わず後ろへと飛びのく。
セシルはさらに槍を振りまわして盗賊を追いまわすが、馬に乗っている屋外とは勝手が違

い、石の壁が邪魔！　が、気迫は充分、盗賊を圧倒する！

「ヒ、ヒイイイイ！」

盗賊は宝箱もそこそこに、逃げていってしまった。

セシルが槍を収めたところに、マルスらが追いつき、さっそく宝箱を開けた。

宝箱の中には星のリブラが入っていた。

◆『星のリブラ』を入手した。星のかけらリストにチェックして **……52へ**

85

砦の裏には、大きな船が一艘停泊していた。

「まもなく追っ手も参りましょう。お急ぎください！　幸い日が沈み、船を漕ぎだすなら今です！」

「そんな……ジェイガン、みんなを置いてはいけないよ！」

「……しかし……」

「頼む、あと少し、あと少しだけ待たせてくれ！」

待つこと、小一時間たった頃だろうか、一人、また一人とアリティアの戦士たちが砦へとやってきた。

皆あちこちに怪我を負い、疲れきった顔をしてはいるものの、マルスを見つけると、笑顔

で駆けよってきた。
「全員いるか!? みんな……みんな無事なのか？ ウェンデル司祭もお怪我はありませんね？ ああ、ドーガ、鎧にこんな深い太刀傷を受けて……」
全員の無事を確認しようと、マルスは皆の間を走りまわる。
兵を思いやる王子の姿に、ジェイガンは思わず胸が熱くなった。
「さあ、ジェイガン！ カダインに向かって出航だ!!」

⬇54へ

86

砂漠を進む途中、マルスらは砂に埋もれるようにして落ちていた銀の斧を発見。それも三本も。
「おそらく、ここで息絶えた冒険者のものでしょう」
ジェイガンが感慨深げにつぶやいた。
◆**『銀の斧』を三本入手した。アイテムリストにチェックして**……**223**へ

87

「よし、ここを出よう。その前に、城で一休みしていったほうがいいな」
マルスがそう告げると、全員の顔に安堵の笑みが浮かんだ。

「い〜やっほう!!」

我先にと涼しい城に飛びこみ、鎧を脱ぎすてるドーガ。

それを見て呆れたように文句を言うセシル。

皆のくつろいだ表情を見るのが、マルスにとってのなによりの喜びだった。

●傷薬が残っていれば……………51へ

●残っていなければ……………70へ

88

アベルの姿を認めた瞬間、エストはその胸の中に飛びこみ、顔をうずめた。

「アベル、ごめんなさい。わたしのために、国を裏切らせるようなことになってしまって」

エストの言葉を受け、無言で彼女を強く抱きしめるアベル。

その時アベルは思っていた。エストを救いだした上に、黙ってすべてを許してくれたマルス王子。自分は一生かかってでも、マルス王子の恩に報いねばならないと……。

恋人たちは再会を果たした。しかし今は戦いのさなか。いつまでも甘い気分に包まれているわけにはいかない。

仲間が全員集結したところで、マルスは城への正面突破を命じた。

城門を守るは、グラ騎士団の精鋭たち。激しい戦いが続いたが、常に軍の先頭に立ったアベルの奮闘もあり、マルスたちはついに城中へ入ることに成功した。

またマルスはこの戦闘のさなかに銀の剣を入手した。

◆**マルスの装備表に『銀の剣』を加える。経験値にプラス4して** ……**251へ**

89

盗賊たちは、やみくもにマルスたちに切りかかってきた！　が！

「フン、所詮ザコ！」

新戦力のナバールが切りこみ隊長になり次々と敵を倒していく！

さらに、風のように素早いジュリアンの攻撃、馬を降りてもなお冴えわたるカチュアの槍に助けられ、マルスはウェンデルをかばいながら神殿の廊下を突きすすむ！

そして、ついに宝物庫へとたどり着いた。

◆**経験値にプラス2して** ……**149へ**

90

アストリアは隕石の直撃を受けた。

衝撃に動きが止まる。

「危ない！」

マルスは一瞬目を伏せた。

しかしアストリアは息絶えなかった。ウェンデルがリブローの杖を振るって、アストリアの受けたダメージを取りのぞいたのだ。
復活したアストリアは魔道士にじりじりと近より、これを一刀のもとに斬りすてた。
◆経験値にプラス3して……67へ

91

盗賊は、鉄の剣を手に素早い動きで切りかかってきた！
「……チョロチョロと、邪魔よ！」
先陣を切っていたセシルが槍をお見舞い！　さらに、草むらから飛びだしてきた敵にはゴードンの弓が命中！
勝負はあっさりとかたがついた。
「こいつ、こんなに盗んでいやがった」
ドーガが拾った麻袋には、2000ゴールドもの金貨が詰めこまれていた。
◆経験値にプラス4して……125へ

92

アリティア軍の参戦で、負けを悟った反乱軍は、砦に油をまき火をかけた！

「く、愚かな！」
煙にまぎれ逃げようとする敵を追おうとしたパオラらだが、
「もうヤツらには戦意もありません。深追いは逆に危険です」
とのジェイガンの言葉で、ペガサスの足を止めた。
ひととき、互いの無事を喜びあったパオラとマルスたち。今度は、さきほどルークが言っていた近くの村に寄ることにした。

◆経験値にプラス3して……………………150へ

93

灼熱の太陽、吹き荒れる砂嵐、凶暴な砂の部族に飛びかう飛竜の群れ……マーモトードはまさに死の砂漠と呼ぶにふさわしい地だった。
「王子、テーベの塔は遥か北西にあります。どのようなルートで参りましょう？」

●西に進み、それから北上する…128へ　●北上し、それから西へ………172へ

●砂漠を斜めに横切り、まっすぐテーベの塔をめざす……………175へ

94

カチュアは、ダールが繰りだすサンダーの攻撃をひらりひらりとかわすと、敵の頭上に舞

い、槍を突きおろした！ 肩から胸へと槍が突きぬける！

ダールは、サンダーソードを振りあげたままの格好で息絶えた。

カチュアは、ダールの手からサンダーソードを抜きとり、他の敵の様子を見る。しかし、残りの盗賊たちは、ナバールがほとんど片づけ、残った盗賊も命からがら逃げだしていた。

◆経験値にプラス3して

●Jにチェックがあれば……………72へ　●なければ……………………59へ

95

東の空がしらじらとあける頃、アリティア軍を乗せた船はカダインの港に着いた。

カダインの地に降りた彼らを待ちうけていたのは、遠々と続く広大な砂漠——。

「……我々がいる場所からみて北西の方向にカダイン神殿、そして北東には砂漠の民が暮らす村、無人の砦に遺跡……あとは砂、砂、砂……」

ジェイガンが、カダインの地図を広げマルスに見せる。

「アカネイアの追撃部隊がやってくるのも時間の問題。幸いカダインは中立都市です。ひとまずカダイン神殿へまいりましょう」

「うん。でも、できれば武器の補強をしたい。この村で調達できないだろうか？ ……よし、そのまま神殿をめざす隊と、村をまわってから神殿に向かう隊にわけて進もう！」

マルスの提案で、マルス、シーダ、そしてルークが村を訪ねることになった。
体力勝負になりそうな、砂漠の旅。踊り子のフィーナはどちらに同行させる？

●マルスたちに同行させる……127へ　●本隊に同行させる……113へ

96

T字路まで戻って来た。
枝道を背にして、ここを？

●右に曲がる……239へ　●左に曲がる……295へ

97

あと一人は魔道士のリンダを加えることにした。

◆ソにチェックして……62へ

98

ビシュッ！　ライアンの放った矢が、みごと盗賊の胸を射ぬいた！　今度の戦いで、彼の腕もだいぶあがってきたようだ。
盗賊はどこから盗んできたのか、8000ゴールドもの大金を持っていた。

思わぬ収入にいちばん喜んだのはもちろん、裏かたに徹しているジェイガンだった。

◆経験値にプラス1して……………………………………126へ

99

グルニア地方一帯は、山賊たちの巣窟だ。反乱軍を率いているロレンス将軍の動きに便乗して、大いに暴れまわっているという情報を、ジェイガンが持ってきた。

アリティア軍の旅はまだ、始まったばかり。彼らは周囲の気配を気にしながら、慎重に北の方角をめざして進んだ。

と、やがて小さな村に到着。

●まずは住人の話を聞いて情報を収集する……………121へ

●武器屋をのぞいてみる……………………………………185へ

100

「よしわかった！　この辛い役目、すべて僕が受けいれよう!!」

マルスは剣をかざし、前方のシスターたちを見据えた。暗黒竜が完全に復活し、シスターたちを取りこむ前に、この手で解放してやる……!!

マルスの目に、決意の炎が点る。

と、その時！
「マルス様、待って!!」
シーダが、マルスをはがいじめにした。
「マルス様、彼女たちには、愛する人が待っています。よく考えてみて！　私、私がマルス様の立場で、マルス様があのシスターたちの中にいたとしたら、絶対に殺せない……っ！」
すると、それまでマルスの行動を黙って見ていたマリクが、すっと歩みはじめた。
「マルス様……あなたばかりに辛い思いをさせるわけにはいきません。私は、エリス様のもとに。そして、エリス様がもし目覚めなければ、この手で……」
マリクは、ゆっくりと、しかしたしかな足取りで、祭壇に向かった。

➡12へ

101

盗賊は宝箱を放りだすと、セシルに向かい短剣を振りかざす！
セシルはそれをヒョイッとかわすと、スラリとレディーソードを抜き、バランスを崩した敵の腹を一直線に振りはらった！
盗賊の体はまっ二つ！
「怪我じゃ、すまなかったわね」
と、セシルが剣を収めたところに、マルスらが追いつき、さっそく宝箱を開けた。

宝箱の中には星のかけら、星のリブラが入っていた。

◆『星のリブラ』を入手した。星のかけらリストにチェックする。経験値にプラス1して……**52**へ

102

「俺が先に動くよ。アラン、最後のしあげは任せるぞ！」

言うが早いか、ドーガは鉄の槍を手に、ゆっくりと敵に接近していった。

そして、相手が攻撃を仕かけると見たらすぐさま後退し、手槍に持ちかえて間接攻撃と、さすがに頭を使った行動を心得ている。敵に大きなダメージを与えたところで、とどめはアランだ！

●Gにチェックがあれば……**203**へ　●なければ……**168**へ

103

「さあ、もう気がすんだだろ？　さっき見つけた扉まで戻って、もうこことはおさらばしようよ！」と、チェイニーが駆けだす。

⬇**256**へ

104

マルスは西の外れの村を通りぬけ、城へ進撃を開始した。城門前までたどりつくと東で勇敢に戦っていたマリクたち一行と合流した。

⬇88へ

105

しかし、敵の攻撃の方がほんの一瞬速かった。

二人がかりでルークに突進する山賊たちの前に躍りでたアランは、彼らのかっこうの餌食となった。

身を呈してルークをかばおうとしたのが裏目に出たのか……。

傷を負ったアランを休ませ、ルークは槍を振りまわした。

力では彼のほうが数段上。いきなりの苦戦に少し精神的ダメージを与えられたが、ルークはなんとか二人の山賊を片づけた。

◆経験値にプラス2して

●Pにチェックがあれば……………18へ　**●なければ**……………………………69へ

106

どこに隠れていたのか、盗賊たちは次々と湧いてでる！　しかし、マルスらはナバールを

切り込み隊長に、神殿の奥へと突きすすむ！

敵を蹴散らし、宝物庫にたどりついたときには、皆かなり消耗していた。ただ、ナバールだけは、汗一つかかず、なにごともなかったかのような顔をしている。

「……さすがだね、ナバール。僕は、まだまだだな」

マルスが息を切らせながら言った。

◆アにチェックする。経験値にプラス4して……………149へ

107

傷ついた者たちに、傷薬が配られた。

効果てきめん、飲んだ者から次第に元気を回復！

◆アイテムリストの『傷薬』のチェックをすべて消して……………93へ

108

「そこだ！」

岩影から攻撃してくる敵を、ゴードンが発見！　矢を射かける!!

その間を縫って、素早く進行したオグマとジュリアンが一気に敵を叩きふせる！

◆経験値にプラス5して……………19へ

109

「ルーク、アラン、頼んだぞ!」
マルスの一声で、二人はすぐさま飛びだした。
◆ルークが『鉄の槍』を……
●持っていれば……………123へ　●持っていなければ……………253へ

110

マルスは山道に残って、皆と戦いつづけることにした。仲間を見捨てて一人だけ、この場を離脱する気にはとうていなれなかったのだ。
だが急襲に長けた狼騎士団を相手に一本道で戦いつづけることはあまりにも無謀であった。
戦局はどんどん不利になっていった。

⬇83へ

111

オグマは、鋼の剣を振りかざし、バイキングの中へ切りこんでいった! そして、次々とバイキングたちを切りたおす。
が、しかし!
子どもの手を引きながらでは、いくら最強の傭兵と恐れられた彼にも限界がある。

と、その時！
馬のいななきと共に仮面をつけたパラディンが現れた。そして、優雅な槍さばきでバイキングたちを次々と打ちたおしはじめた。
「ありがたい！」
思わぬ味方を得て、オグマの剣も再び冴える！　その二人の腕前に、残りのバイキングたちは戦意喪失。森の中へと逃げていってしまった。
「助かった、礼を言わせてくれ。……俺の名はオグマ。あんたは？」
剣を収めたオグマは、どことなく気品ただよう謎のパラディンに話しかけた。
「私はシリウス。ただの旅の者だ」
仮面のパラディンは、穏やかな声で言った。
◆経験値にプラス3して……155へ

112

裂け目に沿って進んでいくと、途中で道が二つにわかれている。
右と左どちらに進むべきか？　マルスは左右の道を見くらべた。
●右……35へ　●左……216へ

113

フィーナは、本隊と同行することになった。
カダイン神殿で落ちあうことを約束し、マルスらはひと足先に出発！

⬇146へ

114

先頭を切って進んでいたセシルの前に、盗賊が現れた！
小脇に宝箱を抱えている。
「チッ！　ねえちゃん、さっさとどかねえと、怪我するぜ！」
「怪我をするほうはどっちかしら？」
セシルは盗賊に対してまっこうから挑む！

◆セシルが『レディソード』を……

●持っていれば……………101へ　●持っていなければ……………84へ

115

城の中を静かに潜行するマルスらは、途中、誰もいない部屋で宝箱を発見！　その中にはアーチャーのクラスチェンジアイテム、オリオンの矢が入っていた。

◆Wにチェックして……………………221へ

116

ぐずぐずはしていられない、しかし……。

マルスはワープの杖で西側に向かうかどうか迷った。

どうする？

●ワープで西へ移動する……63へ　●ここで指揮を続ける……135へ

117

主力軍のパレス城総攻撃が始まった。マルス率いる奇襲部隊は、その騒ぎを利用して隠密に城壁に取りつく。

奇襲部隊には先ほどのメンバーのほか、マムクートのチキとバヌトゥが加わっている。

「ここであたしが暴れるから、その隙にお兄ちゃんたちは中に入って！」

チキはそう叫ぶと、竜石の力で巨大な神竜に変身。

「チキ！　単独行動は危険じゃぞ!!」

それを見ていたチキの守り役バヌトゥも慌てて氷竜に変身した。

神竜と氷竜がそろって暴れたのだからたまらない。彼らの力によって城門の一つが壊れ、マルスたちはやすやすと中に侵入した。

「ここを片づけたら、すぐに後を追うからね——♡」



城に潜入したマルスの背中に向かって、神竜と化したチキが声をかけた。

⬇64へ

118

幸いにも傷薬が残っていたことに気づいたマルスは、それを愛する婚約者の口に含ませた。

間もなくすると、シーダの顔に、赤みが戻ってくる。

「すみませんマルス様、みんな……もうだいぶすっきりしました」

シーダの元気そうな顔を見て、アランとセシルも一安心したようだ。

「ではマルス様、ここを戻り、さっきの角をまっすぐ進んでみることにしましょう」

◆アイテムリストから『傷薬』を一つ消して……281へ

119

「マルス王子、大変です！」

盗賊を追いかけようとしたマルスたちのもとへ、ルークが馬を走らせ伝令にやってきた。

「敵の勇者軍が我々に気づいて、カシミア大橋を封鎖しようと動きだしたそうです！　一刻も早く橋を渡るようにと、ジェイガン殿が！」

ルークの報告に、マルスらは盗賊を追いかけるのを断念。本隊に合流すべくラーマン神殿をあとにした。

⬇243へ

120

気がつくとマルスは村の中に一人立っていた。さっそくオレルアン王の居所を村人から聞きだそうと歩きだしたところ……。ふいに背後から声をかけられる。振りむくと、そこにはオレルアン王その人が立っていた。
「マルス王子、会えてよかった。そなたを捜していたのだ」
「え、あなたも僕を……」
王は、すでにニーナ王女からの手紙によって、弟のハーディンが乱心した事実を知っていた。
しかし手紙が届いた時には、もう狼騎士団はハーディンに協力するために出発した後だった。
王は狼騎士団を呼びもどすため、自らここまで出向いてきたのであった。
「騎士団には国に帰ってくるようにすでに命令を出してある。わが国は中立の立場をとる。事情を知らずにアリティアを攻撃した彼らを許してやってくれ」
王はそう言うと、深々と頭をさげた。
「頭をあげてください、オレルアン王。わかっていただければいいんです」
「許してくれるか、マルス王子。ならば、わが謝罪の証に、これを受けとってくれ」
王がマルスに手渡したものは、オレルアン一の宝として名高い命のオーブだった。

命のオーブは持つ者に不思議な生命力を与えるこの世に二つとない宝石だ。
マルスはこれをありがたく受けとった。

◆『命のオーブ』を入手した。オーブリストにチェックして ……………14へ

121

とにかくこの国の状況を少しでも把握しておきたい。
そう考えたマルスは通りすがりの男に声をかけてみた。
「ちょっとお尋ねしたいのですが……」
「あ、これはこれは帝国軍の……。申し訳ありませんが、この村にはもう、若い女など一人たりとも残ってはおりません。村の外れにマリーシアという女の子が住んでいると聞きましたが、なにぶんにもまだ十歳だとか。ラング将軍のお眼鏡に適うかどうか……」
男はわけの解らないことを一方的にまくしたて、そのまま早足で逃げるように立ちさっていった。
どうやらマルスたちを帝国軍の一行と思いこんでいるらしい。しかし、ラングは一体、なにをしているのだろうか。
若い女？　ラングのお眼鏡に適う？
「どうやらラング殿は、力にまかせて破廉恥な行為を行っているようですな」

ジェイガンが、眉間にシワを寄せて吐きすてるように言った。
と、そこに旅の薬売りが。
「どんな傷もたちまち直してくれるありがたい傷薬、いかがですか？　御一行様の中に、怪我人は？　いればぜひお試しあれ。いかがですか、たったの100ゴールドですぞ」
◆Bにチェックして
●Oにチェックがあれば…………299へ　●なければ…………138へ

122

ダールが剣を天にかざすと、雷雲が巻起こり、青白いいかずちがマルスを襲った！
「！」
なんとか直撃はかわしたものの、全身に衝撃が走る！
「ウェンデル司祭、王子を頼みます！」
ペガサスに飛びのったカチュアが、マルスを守ってダールに挑む！
◆Kにチェックして…………94へ

123

ルークとアランの前では、ソシアルナイト二人など敵ではなかった。槍を使ったみごとな

コンビネーションプレイで、あっという間に勝負はついた。
「おみごと！　あなたがた、アリティアの兵士でしょう？　私は、マケドニアのカチュア。私をマルス様のところに案内していただけない？」
聞き心地のいいきっぱりとした声に二人が振りかえると、なんとペガサスに乗った女性の姿がそこに！
彼女はなんと、暗黒戦争でマルスと共に戦った同志、マケドニア白騎士団ペガサスナイト三姉妹の次女、カチュアだったのだ。

◆経験値にプラス2して……………………………………179へ

124

実力で言えばアリティア軍の方が明らかに上なのだが、長旅で傷ついた者もおり、敵の数もやたらと多い！
どうする？

●速攻で戦う……………148へ　●後方へ一時退却……………222へ

125

さて、あとは堀にかかった橋を渡ればマケドニアの砦だ。

と、そこへ偵察に出ていたルークとアランが戻ってきた。
「王子、ここから北東へやや後退したところに村がありました。まだ反乱軍に荒らされた様子もないようです。まいられますか?」と、ルーク。
「北にある別の砦から煙があがっておりました。気になるのですが……」と、アラン。
どちらの方角へ行くべきか、マルスはちょっと考える。

●村へ……………………150へ　●北の砦へ……………………6へ

126

マルスたちは休むことなく、オグマらの姿を求めて捜し歩いた。そして、日が、西の大地に沈みかけた、ちょうどその時。夕日を背に彼らは現れた。
「オグマ!」
「マルス王子!」
「無事だったんだね、子どもたちも!!　ああ、神よ、感謝します!!」
二人は駆けよると、ガッと手を取りあった。オグマの後ろには、グルニアのユベロとユミナ、そして見知らぬ仮面の男が立っていた。
「私は、シリウスと申す旅の者にございます。縁あって、オグマ殿と行動を共にすることとなりました。できれば、王子の軍に加えていただきたい」



男は、一歩進みでると、言った。
「もちろん！」
マルスは、シリウスと名乗るパラディンを、旅の仲間に加えることにした。
「！　オグマ、君、怪我をしてるんじゃないか!?」
子どもたちを守りながら、戦いぬいてきた彼の腕からは、一筋の血が滴り落ちていた。
「なめときゃ治ります」と、オグマは言うが……。

●傷薬があれば……………154へ　●なければ……………197へ

127

「じゃあ、私はマルス王子たちと行くけど、ナバール、すねないでね！」
「……」
フィーナの言葉に、ナバールは呆れてなにも言えないでいる。
『……泣く子も黙る紅の剣士ナバールに、あんなことが言えるのは彼女ぐらいだな』
二人の様子に、オグマは思わずクスリッとやりそうになった。
二つの隊は、カダイン神殿で落ちあうことを約束し、出発！

◆チにチェックして……………………146へ

128

「ん！」
テーベの塔に向かいはじめて間もなく、急にマルスが足を止めた。
「……いま砂の中でなにか光ったような……」と、前方を指さすマルスに、
「よし、俺が見てきます！」言うが早いか、ジュリアンが駆けだした。
「気をつけろ、ジュリアン!!」
マルスが、ジュリアンの背に向かって声をかけた。と、その時！　砂山に隠れていたハンターが、矢を放ってきた！
思わず砂漠に身を伏せるジュリアン！
「罠か!?　早く彼を助けなくては!!」
しかし、どこからともなく矢を射かけてくる敵にうかつに動けない！
誰を行かせるべきか!?　マルスの表情に緊張がはしる。
●シリウス……161へ　●パオラ……142へ

129

「マリーシア、頼む……マリーシア、どうしたんだ！」
その時、マルスははじめてマリーシアの異変に気づいた。なんとか立ってはいるものの、

唇は色をなくし、浅い呼吸を繰りかえしている。
「そういえば、この前も徹夜でみんなの介護にあたっていたっけ……」
なれない長旅と戦いの連続にも弱音一つ吐かずについてきた彼女を思い、マルスは胸が熱くなった。
「……ごめんなさい、ぼうっとしてしまって。さあ、ライブを！」
そういってけなげに杖をかかげたマリーシアをマルスが止める。
「僕らは大丈夫！　ジェイガン、マリーシアを頼んだ！」
マルスは剣を構えると、飛竜に向かってジャンプ！
すかさず、ナバールが、そしてオグマがそれにつづく！
死闘の末、ついに飛竜はその巨大な体をドウッと横たえた。

◆経験値にプラス2して

●力にチェックがあれば……………87へ　●なければ……………………206へ

130

牢獄を守っていたジェネラルはワープの杖を持っていた。マルスはこの杖を取りあげて、ウェンデルに持たせた。

◆ウェンデルの装備表に『ワープの杖』を加えて……………………65へ

131

しかし！

右に折れた道の行く手には、溶岩の河が!!

「……マルス様……い……行き止まりで……す」

熱波にやられたのか、シーダが蒼白な顔でつぶやく。

マルスは慌ててシーダに近よった。シーダは、はあはあと吐く息も荒いが、必死で体を立てなおそうとしている。

●傷薬が残っていれば……………118へ　●なければ……………………153へ

132

「きええええ！」

ラングと剣を結ぶマルスの背に、隠れていた兵が切りかかってきた！

マルスの肩に鋭い痛みが走る！

兵はすぐさまシリウスが串ざしにしたものの、体勢を崩したマルスの背を、ラングの槍が襲う！

「卑怯な！　貴様それでも一国の将軍か!!」

オグマがラングに体当り！

思わずラングは槍を取りおとす！
「ラング、これまでだ！」
剣を構えなおしたマルスが、ラングに正面から切りこんだ！

◆テにチェックして……184へ

133

最後の一人は、司祭のウェンデルに決定した。

⬇117へ

134

「さあ、機は熟した。マケドニアの砦へ攻めこもう！　そして、ミネルバを助けだすんだ！」
マルスの号令を合図に、アリティア軍は一気に堀にかかった橋を渡り、砦の前へと突きすすんだ！　そしていざ、攻めこまんとした時、砦の門がギイと音を立てて開いたかと思うと、一人の将軍が現れた。
敵将リュッケだ！　手には鋼の槍が握られている。
反乱軍のほとんどがすでに負けを悟り、逃げた後らしい。
「なぜアリティア軍が……。ふっ……マルス王子、この上は貴様も道連れだ、死ねぇ！」
覚悟を決めたように言いはなつと、リュッケは鋼の槍を構えた！

すでに裸の大将といえども、相手は手ごわいジェネラルだ。
まず、先鋒は誰が？

●リンダ……………………157へ　●カチュア……………………182へ

135

「アベルが……、アベルが敵になるはずがない！　ぼくはそんなデマを信じない！」
マルスは自分に言い聞かせるように言った。マルスはとにかくこの場で指揮を取りつづける決意を固めたのだ。
この時マルスは一つのアイディアを思いついた。チキをウェンデルの持つワープの杖で瞬間移動させ、牢を中から襲撃するという案である。
神竜に変身したチキならば、一人で牢を制圧することができる。
そう思いたったマルスは、すぐにチキとウェンデルを呼んだ。
「チキ、力を貸してくれるかい？」
「任せて、マルスお兄ちゃん！」
ウェンデルは、すぐさまチキを牢内にワープさせた。

➡22へ

136

隕石はマルスとオグマを直撃した。
しかしアストリアだけは難を逃れた。ウェンデルがアストリアにマジックシールドを施し、彼の魔法防御力を高めていたのだ。

⬇44へ

137

さて、いよいよ残るは敵将ただ一人。
ドラゴンナイトのルーメルは、最後の部下が息絶えたと見るや否や、手にした槍を勢いよく振りまわしはじめた。
「みんな、マリーシアを守っててくれ。ここは僕に任せて！」
叫びざまレイピアを振りかぶったマルスは、ルーメル目がけて勢いよく切りつけた！
マルスの気迫に呑まれたように、皆は力弱いシスター・マリーシアを囲む。
もちろん、すぐにでも援護できるように、それぞれの手には武器がしっかりと握り締められていたが、この瞬間、注意はマリーシア一人に注がれていた。
虎視眈々とマルスに狙いを定める、敵の残党のアーチャーにも気づかずに……。

●Dにチェックがあれば……………305へ　●なければ……………………279へ

138

戦いに負傷はつきもの。この口のうまい商人は、万能の傷薬とか言っているが、さてどうしたものだろう。マルスはちょっと考える。

●Aにチェックがあれば……164へ　●なければ……289へ

139

幼い姉弟をかばいながら、無数のバイキングに立ち向かうオグマ！
その鬼神のごとき進撃の前に、バイキングたちは次々と倒れていく！　二人もまた、オグマの足手まといになるまいと、必死でついていく！
「ふう……なんとか、一やま越したかな……」
敵の姿が見えなくなり、オグマがほっと一息ついたその時！
「みごとなものだな」
木の影から仮面をつけたパラディンが現れた。
「貴様、なに者だ！　海賊の手下か、それともラングの手の者か！」
オグマは、ひとたび収めかけた剣を、再び構えなおす！　しかし、仮面の男は慌てるふうもなく、穏やかに言った。
「私はシリウス。ただの旅の者だ、剣を収めてくれないか」

オグマは、長年の剣士の勘で彼が敵ではないと感じとり、剣をおろした。
「すまぬ。少々気が高ぶっていたのだ。許してくれ。俺の名はオグマ、タリスの傭兵だ」
◆経験値にプラス4して……………………155へ

140

騒ぎを起こして、万一敵にこちらの存在を悟られてはまずい。マルスたちはそっとその場をやり過ごし、裂け目に沿って進んでいった。

↓112へ

141

残る山賊は三人。
先頭のヤツにはドーガが槍攻撃を、そして宮廷騎士団一の弓の腕前を誇るゴードンは、後方に控えているヤツを狙って弓を引く。
そして、とどめはマルスのレイピアだ。さあ、攻撃体勢は整った！
◆バトル対戦表で戦います。マルスたちはC、相手はB。相手より数値が……
●上……………170へ　●下……………199へ

142

空からジュリアンを救おうとパオラが動いた瞬間、突然砂嵐が巻き起こった！
突風に体をさらわれ、地面に叩きつけられる！
心配して駆けよるミネルバに、「私よりジュリアンを！」と叫ぶ！

◆Uにチェックして……………………………**161**へ

143

戦闘の前に、マリーシアに回復の魔法ライブをかけてもらうことにした。

●ツにチェックがあれば…………**129**へ　●なければ……………………**169**へ

144

マルスは、ウェンデルのワープの杖によって、西の村へと瞬間移動した。村にいるオレルアン王と直談判するつもりなのである。

⬇**120**へ

145

だがアストリアは隕石の直撃を免れた。マリーシアがアストリアにマジックシールドを施し、彼の魔法防御力を高めていたのだ。

アストリアはそのまま魔道士との距離をつめ、これを一刀のもとに斬りすてた！

◆経験値にプラス４して……………６７へ

１４６

本隊は、マルスらを見送ってから出発。
灼熱の太陽に、砂煙……思わず足どりが鈍る。
そこへ、蜃気楼のように魔道士が一人、また一人と現れた。そして、アリティア軍に向かって炎の魔法を浴びせかけてきた！
「！　どういうことだ!!　カダインは中立国のはず！」
「……我々は、おまえたちに宣戦布告する。カダインの魔道軍は帝国と手を結ぶのだ！」
「わしがおらぬ間に、なんという愚かなことを！」
カダインの最高司祭ウェンデルが思わずうめく。
「とにかく、このことを、一刻も早く王子にお知らせせねば！」
ジェイガンは、マルスのもとへ伝令を送ることにした。
「王子の危機とあっては……私に行かせてください！」と、アランが申しでれば、
「いえ、城をお守りできなかった私に、せめてこの役を！」と、カインも進みでる。

●アランに頼む……………１６２へ　●カインに頼む……………１７６へ

147

傷薬で火傷を癒すと、ジュリアンは再び開かずの扉に挑戦。
みごと鍵を開けてしまった。
部屋の中には小さな宝箱があり、その中には星のかけら、星のアクエリアが入っていた。
◆『星のアクエリア』を入手した。星のかけらリストにチェックする。アイテムリストの『傷薬』を一つ消して……………………………………114へ

148

「傷ついた者は、後方へ！ 無事な者は前へ！」
自ら先陣を切るマルスが叫ぶ！
●傷薬があれば……………173へ ●なければ……………190へ

149

ウェンデルが予期していたとおり、宝物庫の宝はすべて盗まれたあとだった。
「……残念だ。みんなにまわり道までしてもらったのに……」
がっくりと肩を落とす老司祭を、マルスがなぐさめる。
「司祭、どうかがっかりなさらないで。オーブと星のかけらはきっと僕らが探しだします！」

神殿を出ると、盗賊の一団が待ちかまえていた！
「おまえたち、盗んだ宝を返すんだ！」
「てめえら、盗賊のうわまえをはねようってのか？　とんでもねえヤツらだな……そんなヤツは、このダール様が生かしちゃおかねえぜ」
叫ぶマルスを、毛むくじゃらの男がにらむ。
ラーマンシーフの首領・ダールだ！
手にはごついサンダーソードが握られている。
「それはこっちのセリフだ！」
戦闘開始！　全員が武器を手に、盗賊の中に躍りでる！
首領のダールと戦うのは？

●マルス……………122へ　●カチュア……………94へ

150

本隊は村の外で待たせ、マルス自ら数名の兵を連れて村の中へ。
「マルス王子、お久しぶりです！」
村の入口で、マルスはかつての戦友ジュリアンに出会った。しかし、再会の喜びも束の間、レナが行方不明と知り、その顔から笑みが消える。

「……なんてことだ。マリア王女に、シスター・レナまで……」
「四方八方手を尽くして捜したんですが……見つけられなくて。ただ、彼女がいなくなる前に、不気味な司祭がうろついていたそうなんです」
「不気味な司祭……か。しかし、もうここにいてもしょうがないだろう。ジュリアン、僕らとこないか？　そして、一緒にレナを捜そう！」
「ありがとうございます、ぜひ、そうさせてください！」
頼もしい仲間が一人増えたマルスたち。
さっそく、次なる場所をめざして進みはじめた。
◆Mにチェックして
●武器屋へ……………232へ　●近くの民家へ……………166へ
●井戸へ……………………………………………187へ

151

マリクはエクスカリバーの書を、高らかに読みあげた。
とたんに、真空の刃が、飛竜の巨大な体を襲う。
同時に、いち早く体勢を整えたジョルジュが弓を引いた！
狙いさだめた攻撃は、敵の喉に突きささる！



そこへ、マリクが必殺の一撃を決め、飛竜はズズンと音を立てて砂漠に墜落。

◆経験値にプラス2して……86へ

152

マルスは、盗賊の剣をヒョイッとかわすと、次の瞬間にはもう敵の喉に剣を突きたてていた！

もう一人は、ルークが槍で仕止める！

その盗賊の荷物から、5000ゴールドとパワーリングが見つかった。

◆『パワーリング』を入手した。アイテムリストにチェックする。経験値にプラス2して……73へ

153

マルスは傷薬を探した。

が、すぐに、使いきっていたことに気づいた。

「シーダ、ごめん。使える薬がないよ。平気かい？」

シーダは健気にもコクリとうなずく。

「平気です。条件は皆同じですから……さあ……ここにはもう用がないようです。さっきの

角を、まっすぐ進んでみることにしましょう」
マルスは、一つうなずくと、アランとセシルに方向転換の命令を下した。
◆スにチェックして……281へ

154

「私が！」
ユミナは、傷薬を受けとると、テレるオグマを横たわらせ、母親が子どもにするように薬を飲ませた。
「さあ、これで大丈夫！　でも、もう無茶しないでね!!」
そんな二人の様子に、アリティア兵たちの間に、久しぶりに明るい笑い声が起こった。
◆アイテムリストから『傷薬』を一つ消して……181へ

155

「その子どもたちは？」
シリウスと名乗った男は、ユミナとユベロを見て言った。
「訳あって俺が預かっている。……貴様、知っているのか？」
「いや……だが、子ども連れでは逃げきれまい。これもなにかの縁、よかったら手助けさせ

てもらおう。南の村にアリティア軍が来ているそうだ。そこまで行けば、なんとか……。私が後方の敵を始末する。おまえはその子たちを守り、とにかく逃げるんだ」

「なに、アリティア軍が！　そうか、マルス王子が……だが、貴様、なぜ見知らぬ俺たちを？」

「子どもを救いたい。ただそれだけだ」

「……そうか、シリウスとか言ったな。無事脱出したらもう一度会いたいものだ……俺はグルニアの支配者ラングを殺るつもりだ。ロレンスという男の恨みをはらすためにな。貴様、俺に力を貸さぬか？」

「……それも面白いかもしれぬな。だが、生きていればの話だ。さあ、早く行け！」

「うむ！　また後で会おう」

オグマとシリウスは、微かに笑みを交わしあい、わかれた。

↓174へ

156

「さて、わしの力の見せどころかのお！」

バヌトゥが火竜石で火竜に変身！　ヨーデルのボルガノンをものともせず、激しい炎を吐きつける！

「うわあああ！」

たまらず、ヨーデルは砂の上を転がりまわると、やがて動かなくなった。

バヌトゥの変身がとけたところで、ちょうどマルスらが合流してきた。

◆経験値にプラス2して……285へ

157

リンダが繰りだしたファイアーの炎を、マントで必死に避けるリュッケ！

しかし、かなりのダメージだ。

そこへ、カチュアとパオラの白騎士二人がズイと進む。

「ミネルバ様を裏切ったあなたを、私たちは許せない！」

二人の槍が、同時に敵将の体を貫く！

「うぐっ……む、無念……」

ついに、反乱軍の将軍リュッケはその場に崩れおちた。

◆経験値にプラス2して……237へ

158

「神殿を荒らすとは、盗賊の風上にもおけないぜ！」と、ジュリアンが、吠える！

◆バトル対戦表で戦います。マルスたちはE、相手はD。相手より数値が……

●上……89へ　●下……106へ

159

「王子、伏せて！」
リンダの声で身を伏せるマルス！　その頭上を、オーラの光がかすめ、ラングに命中！
「う、うぐ！」
たまらずラングが槍を取りおとす！
「ラング……今こそ、ロレンスの無念、民の苦しみ、思い知れ！　……王子！」
「オグマ！」
オグマとマルスは、同時にラングの体に剣を深々と突きたてた！

↓184へ

160

敵は伸びきった隊列をたくみに狙って、襲撃をかけてきていた。
馬にまたがったシリウスとアランが先行して敵のパラディンを迎え撃つ！　それをライアンとゴードンが弓で援護した。
見れば、奇襲をしかけてきたメンバーのうち何人かは見覚えのある顔だった。
「ロシェ！　ビラク！　ウルフ！　ザガロ！」
マルスは思わず彼らの名前を叫んだ。そう、彼らはかつてのマルスの盟友、誇り高きオレルアンの狼騎士団だったのだ。

だが、彼らはマルスの声など無視し、シリウスやアランと戦い続けた。唯一ロシェのみが、マルスのほうに気弱な視線を投げかけたようにも見えたのだが……。

「なぜ、かつての仲間同士で戦わねばならないんだ……」

戦いを見守りながら、一人苦悶するマルス。

その時、ペガサスにまたがったカチュアが空から舞いおりてきた。カチュアはペガサスから降りると、マルスに報告した。

「マルスさま、ここから西へ行った村にオレルアン王自身が来ています。直接、ハーディン狂乱の事情を話しに行かれてはどうでしょう？」

さてどうする？

●西の村に向かう……………144へ　●この場に残って戦う……………110へ

161

砂を蹴り、シリウスの馬が駆けだした！　それを援護するように、敵の潜む砂山めがけてジョルジュが矢を放つ！

敵の攻撃が弱まったその一瞬、シリウスがジュリアンの体を馬の上へと引きあげた！

そしてそのまま、隠れている敵のもとへ！

しかし、そこには矢を額にさしたハンターの死体が一つあるだけで、あとの者は逃げだし

た後だった。ハンターは高価な銀の斧を三本も隠しもっていた。

◆『銀の斧』を三本入手した。アイテムリストにチェックする。経験値にプラス1して……

183へ

162

アランは優れた腕を持つパラディンで、遠駆けにも長けている。ジェイガンはアランを伝令に出すことにした。

「気をつけて行くのだぞ！」

ジェイガンは、日頃から顔色の悪いアランを気づかって言った。

「さあ、我々は戦闘開始だ！　カダイン魔道軍に、目にもの見せてやるのだ！」

⬇196へ

163

敵の司祭は、不気味に笑うと、両手を高々と掲げた。

その指先に火が点る！

「ハン、おまえごとき、俺一人で充分だぜ！」

ジュリアンは、目にも止まらぬ早さで司祭の懐に飛びこむと、敵が術をかける間もなくその腹に剣を突きたてた！

ジュリアンは敵の司祭が持っていたマジックシールドの杖を拾うと、再び開かずの扉に挑戦。みごと鍵を開けてしまった。
部屋の中には小さな宝箱があり、その中には星のかけら、星のアクエリアが入っていた。

◆**『星のアクエリア』を入手した。星のかけらリストにチェックする。経験値にプラス１して**……**114へ**

164

そういえば先ほどの山賊たちとの戦いで、ルークが肩口に傷を負ったではないか。アリティア軍にとって、彼は貴重な戦力だ。早めに癒してやらなければ——。
そう考えたマルスは商人から傷薬を買い、早速ルークに飲ませた。
「ありがたい。なんだか、体中に力がみなぎってきたようです！」
とたんに元気を取りもどしたルーク。どうやらこの商人の薬は、正真正銘の万能の傷薬だったようだ。
商人と別れ、マルス一行は目の前にある武器屋に入っていった。

◆**Aのチェックを消し、Hにチェックして**……**185へ**

165

次から次へと湧いて出る盗賊たち！
しかし、戦い疲れてもフィーナの不思議な踊りによってすぐに回復！
そのまま、宝物庫のある神殿の奥へと突きすすむ！
「どう？　わたしを連れてきてよかったでしょ？」
宝物庫にたどり着いたところで、フィーナがナバールを突ついて言った。
◆経験値にプラス4して……149へ

166

民家には、男が一人。マルスらを見ると目を輝かせて言った。
「おお、その紋章はアリティアの！　あんたたちが来たならもう安心だ！」
ぶっきらぼうだが、人は良さそうだ。それから男は、急に声を潜めて、
「ここだけの話だが、武器屋は反乱軍ともつきあいがあるらしい。この前もヤツらがうろついていたんだ。店の周りじゃ用心しなよ」と、続けた。
男の忠告に礼を言って、マルスはその家を出た。
◆Eにチェックして……217へ

167

マルスは部隊を率いて東へ向かった。
そこではパラディンたちが待ちかまえており、あっという間に囲まれてしまった。
「来るぞ！」
マリクが警告を発したとたん、パラディンたちは号令と共にものすごい勢いで一斉攻撃を仕かけてきた。馬のけりあげる砂埃で、前が満足に見えない。
だがマルスたちは善戦を続け、一陣二陣と確実に倒していった。その途中、厳重に警戒されている牢屋をマリーシアが見つけだした。
牢に捕らわれている人物は誰なのか!?
マルスが思いをめぐらしている時、西から伝令が飛来した。
「西側が苦戦しています。しかも敵軍の指揮をとるのはアベルです！」
「まさかアベルが！」
アベルは、マルスがかつて最も信頼する家臣であった。この飛びこんで来たメッセージはマルスに大きな衝撃を与えた！
◆経験値にプラス3する。ウェンデルが『ワープの杖』を……
●持っていれば　……………116へ　●持っていなければ　……………9へ

168

「後は任せろ！」
アランは銀の槍を構えると、一撃で敵を打ちたおした。
「鮮やかな連携プレイだったぞ。いや、みごと！」
軍師ジェイガンが、馬車の中から拍手で二人を迎えた。
「しかし、アラン。顔色の悪さが少し気になるが……？」
かつて聖騎士隊長を務めていたジェイガンは、息子のように可愛がって育ててきたアランの青い顔を、心配そうに覗きこむ。
しかしアランは、笑顔で首を横に振った。
「いや、ご心配には及びません。この調子で先を急ぎましょう」
◆経験値にプラス1して…………………………………………**137**へ

169

マリーシアが疲れた仲間にライブをかける。
「ありがとう、これで思いきり戦えるぞ！」
マルスは剣を構えると、飛竜に向かってジャンプ！
すかさず、ナバールが、そしてオグマがそれに続く！

死闘の末、ついに飛竜はその巨大な体をドウッと横たえた。

◆経験値にプラス2して

●力にチェックがあれば……87へ　●なければ……206へ

170

さすがに気心知れている仲間たち。コンビネーションも鮮やかで、マルスのレイピアが残る一人にとどめをさしたとき、三人の息は少しもあがってはいなかった。

楽勝！

これで、邪魔者はすべて消えさった。あとは、ロレンス将軍と対面するだけだ。

◆経験値にプラス3して……230へ

171

ワープの杖でジュリアンを祭壇まで瞬間移動させた。ジュリアンは気配を消してダークマージの背後からせまり、鋼の剣の一突きでこれを殺した。盗賊ならではの鮮やかな手際である。

◆タにチェックする。経験値にプラス2して……112へ

172

テーベの塔へむかうマルスたちの、最初の敵は空から現れた！
「飛竜だ！」
空から吐きつけられる灼熱の火炎に、逃げまどうアリティア戦士たち！
「私が行きましょう！」
「私が叩き落とす！」
マリクとミネルバが同時に声をあげた。
さて、どちらに任せるべきか？　マルスの決断に、皆が集中する。

●マリク……………………151へ　●ミネルバ……………………201へ

173

後方へ下がった負傷兵には、さっそく傷薬が施された。
効果はみるみる現れ、回復した兵士たちはさっそく戦列復帰！
アリティア軍が、再び勢力を盛りかえす！

◆R、S、L、キのチェックの数だけ『傷薬』を消して……………………248へ

174

オグマがシリウスからマルスの出兵を聞いたのと、ほぼ同じ頃、マルスもまたオグマの所在に関する情報を、行商の男から得ていた。

「子ども連れの傭兵？　ああ、ホルムの北の村で会ったなあ。なかなかの男前で、左頬に傷のある……」

「オグマだ、オグマに違いない！　そうか、無事だったんだ……よかった！　よし、ジェイガン進路は北だ！」

しばらく行くと、前方に盗賊発見！

いち早く見つけたライアンが弓を構える！

◆バトル対戦表で戦います。ライアンはB、相手はE。相手より数値が……

●上……………………98へ　●下……………………76へ

175

テーベの塔へ最短ルートをとることにしたマルスたち。その前に、蛮賊が現れた！

◆バトル対戦表で戦います。マルスたちはC、相手はB。相手より数値が……

●上……………………219へ　●下……………………204へ

176

ジェイガンは、カインの気持ちをくみ、彼を伝令に出すことにした。

●イにチェックして……………………………………196へ

177

と、突然、シリウスが、ニーナに向かってゆっくりと歩きはじめた。なにをする気かと驚いて止めに入ろうとしたマルスに、ジェイガンがそっとつぶやく。
「マルス様……シリウスなら、もしや……」
一瞬、その意味がわからなかったマルスだが、ジェイガンにシリウスのうしろ姿を示された瞬間、すべてを悟った。
「あのうしろ姿……見覚えがある……。あれは、まさか……黒騎士カミュ!?」
意外な顔で自分を見るマルスに向かい、ジェイガンは静かにうなずいた。
「ここは、彼に任せてみましょう」

↓192へ

178

神殿の中は、盗賊どもによってすっかり荒らされていた。
壁のレリーフは削りとられ、床にはところどころ穴が開いている。扉という扉はみな破ら

れていた。その無残な姿に、ウェンデルは唇を震わせる。
「……このぶんだと、奥の宝物庫も荒らされてしまっていることでしょう……まったくひどい世の中だ……これでは、守護神ナーガもさぞやお怒りでしょう」
「ナーガ……その昔、世界を襲った魔物から人々を守ったという、神話の神だね」
「さよう。ナーガは右手に光り輝く剣を、左手に五つの宝玉を埋めこんだ盾を持ち戦ったと言われています……ハッ！」
いにしえに思いをはせる一行の前に、盗賊が現れた！ それも、一人じゃない!!
「……よし、速攻勝負だ！ ヤツらを蹴ちらし、一気に宝物庫まで行こう！」
●Jにチェックがあれば ……………158へ ●なければ ……………………165へ

179

「カチュア、どうしたんだい、一体……!?」
遠くからカチュアの姿を認めたマルスは、慌てて駆けより、問いかけた。
「詳しい説明は道すがらするとして、とにかく私も一緒に連れていってください。ミネルバ様を助けださなければ！」
カチュアの口から飛びだしたのは、マケドニアの王女にして、暗黒戦争を共に戦い抜いた同志の名前だった。

「なに？　ミネルバ王女の身になにか起こったのか？」
ミネルバを知ってるドーガとゴードンが、先を争うようにして口を出す。
「反乱軍に捕らえられたのです！　姉は今、砦で敵に戦いを挑んでいます。マルス様、どうか力を貸して！」
カチュアの姉・パオラとてかつての同胞。このまま見殺しにするなど、できる道理がない。
「よし、とにかく急ごう！」
一行にカチュアが加わり、彼らは森の奥深くへと入っていった。

➡202へ

180

隕石がマルスたち三人を直撃した。強烈なダメージに彼らの足が止まる。
「がんばって！」
マリーシアはそんな三人にリザーブの杖を振るった。リザーブの杖は、複数の人間に効果をもたらす。
ダメージから立ちなおったマルスたちは、気力を奮いおこして魔道士の懐に飛びこみ、あっという間に倒した。

◆経験値にプラス3して……………………67へ

181

翌朝、ジェイガン、マルスを囲んで作戦会議が開かれた。
「早くアリティアに帰りたいところだが、バイキングに荒されたこの地をこのまま放っておくわけにはいかない」
マルスの言葉に、一堂うなずく。
「西の方にある城跡が、おそらくヤツらの本拠地と思われます。そこさえ叩けば……」
ジェイガンの言葉に従い、マルスらはバイキングの城をめざして進軍することになった。
兵を進めて一時間と経たぬうちに、早くもバイキングの一団と衝突！
「まずは私の弓で！」
「私の魔法にお任せ！」と、ゴードンとリンダが同時に進みでた。

●ゴードンに任せる……………210へ　●リンダに任せる……………228へ

182

「マケドニアを裏切った者は許せない……リュッケ、私があなたを倒す！」
ペガサスナイト三姉妹の次女、カチュアがリュッケの前に進みでた！

◆カチュアが『レディソード』を……

●持っている……………212へ　●持っていない……………258へ

183

砂に足を取られながら、灼熱の太陽にあぶられながら、オアシス一つない砂漠をアリティア軍は進んでいく……。

➡223へ

184

「……うう、そんなばかな……このわしがやられるとは……ジョルジュは……まだ、か……」
それが、悪逆将軍ラングの最後の言葉だった。
この男のために皆どれだけ苦しめられてきたことだろう。いろんな思いが胸をつき、皆黙ったまますその屍を見おろしていた。その屍の横には、小さな星のかけらが……。
「王子、牢屋にウェンデル司祭が捕らわれておいでてした！」
静寂を破り、ジェイガンが、ウェンデル司祭を伴って現れた。
「司祭、御無事だったんですね！　村から連れさられたと聞いて、心配していたのです」
「おお、マルス王子！　……ラングは私が反乱に協力したと言って、捕らえに来たのです」
「カダインの最高司祭のあなたなら、ラング将軍などは恐れることはないはずでしょう？」
「私は魔道を戦いに使うことは好まない。すでに魔法都市カダインは、もうマリクやエルレーンら若い魔道士たちにあずけました。それに、私には大賢者のガトー様から与えられた大事な使命があるのです」

「ガトー様の使命ですって？　それは一体……？」
「かつて十二星座が描かれていた星のオーブという聖玉があったのはご存じですね。ガトー様は先の戦いで、ガーネフの暗黒魔法を破るために、そのオーブからスターライトという神聖魔法を作られた。だが、その時のショックでオーブは十二個のかけらにわかれ、どこかへ飛び散ってしまったのです。ガトー様はこの世界は不思議な力を秘めた五つのオーブによって守られていて、もし一つでも失われると世界は破滅すると……そして星のオーブが砕けてしまった今、世界は滅びつつあると言われるのです。だから、なんとしても十二個のかけらを集めてオーブを再生せねばならぬのだと。……しかし、なかなか見つからず……おまけに、私が持っていたかけらは、アカネイア軍に奪われてしまいました……」
「星のかけら……それはもしかして！」
マルスは、ラングの横に転がる石を拾いあげると、司祭の前に差しだした。
「おお、そうです！　それはかけらの一つ、星のキャンサーです！」
「だったら司祭、僕らはほかにもいくつか持っています！」
「……なんとまあ、これもガトー様のお導きか……マルス王子、もはや私一人では残りのかけらやオーブを探すのは無理だ。できれば力をお貸し願えないだろうか？」
「……すぐにでもお手伝いしたいのですが……祖国アリティアが……」
「……そうでしたね。アカネイアに攻撃をうけたのですね……勝手を言ってすみませんでし

た。王子、アリティアを取りもどすため、私も力をお貸ししましょう！」
「え！　それではウェンデル司祭も僕らと一緒に！」
「はい。この出会いがガトー様のお導きなら、それに身をゆだねるのもガトー様の御意志。ただ……アリティアに帰る前に、この近くにあるラーマン神殿に寄ってくだされ。あの古代の神殿なら、オーブや星のかけらを見つけられるやも知れません」
「ラーマン神殿のある島は、ちょうど帰り道の途中です。もちろん、いいですとも！」
◆『星のキャンサー』を入手した。星のかけらリストにチェックする。経験値にプラス3して
●ゴードンがアーチャーなら　……15へ　●スナイパーになっていれば　……241へ

185

「いらっしゃい！」
小さな店だが、おもいきり威勢のいい主人が、マルスたちを招きいれる。アリティアから持ってきたのは、わずかなゴールドのみ。果たして、どんな物をそろえたものか……。マルスは店の中を見わたしながら考えた。
◆Oにチェックして
●Hにチェックがあれば　……211へ　●なければ　……265へ

186

「いや、まだ行ってない場所があったはずだ。なにか貴重な財宝が隠されているかもしれない。もう少しこの中を探索してみたいんだが……」
マルスの言葉に、一行は、今きた道を戻りはじめた。
やがて前方に曲がり角が。
「マルス様、まっすぐ進むか右に曲がるか……どうしましょう?」
先頭を行っていたセシルが、マルスを振りかえって尋ねた。

●右に曲がる……………………131へ　●まっすぐ進む……………………281へ

187

井戸で喉をうるおしていると、水を汲みにきた村の娘に出会った。そこで、彼女に話しかけてみることに。
「うーん、司祭にシスターか。見なかったわねえ。でも、少し前に旅をしているってパラディンは来たわよ。仮面で顔を隠していたけれど、きっと素敵な人だと思うわ。少し陰りがあって……そこがまたたまらないのよォ!」
話の途中から、彼女は自分の世界に入ってしまった……。

⬇217へ

188

急いで剣を構えるジュリアンに、司祭の放ったファイアーが襲う！
灼熱の炎をかわしながらも、次第にジュリアンは追いつめられていく！
司祭は、ニヤリと笑うと、とどめの魔法をかけようとした。
が！
「大丈夫か、ジュリアン！」
二人の間に割ってはいったのは、シリウス！　合流の遅いジュリアンを心配したマルスが、よこしてくれたのだ。
シリウスは、息もつかせぬ早業で司祭を串ざしに！
直撃こそ受けなかったものの、ジュリアンは腕に火傷を負ってしまっていた。
しかしラッキーにも敵の司祭の懐から、マジックシールドの杖がポロリ！

◆経験値にプラス１して

●傷薬があれば……………**147**へ　●なければ……………**74**へ

189

シーマに率いられたグラの騎士団を味方につけたアリティア軍は、さらに軍を進め、山岳地帯に入った。ここを抜ければ、パレスはもう目の前だ。

しかし油断はできなかった。山あいを抜ける街道は狭く、アリティア軍の隊列は細くのびきっていた。
「こんなところを襲われたら、苦しい戦いになるぞ……」
マルスがそうつぶやいた瞬間……。前方から奇声があがり、馬に乗って武装したパラディンとホースメンの一団が一直線に向かってきた！　敵襲だ!!

⬇160へ

190

兵を欠き、マルスたちは押され気味！
「マルス様、ここは一時退却し負傷兵の手当てを！」
大切な仲間を失ってはもともこもない。マルスたちは、マリーシアらが待機する場所まで下がることにした。
「ハーハハハ！　アリティアの腰抜けが逃げていくぞ！」
屈辱！

⬇222へ

191

魔道士三人はメティオの呪文を唱えた。
無数の隕石がマルスたちの頭上に降りそそぐ。

◆ウェンデルが『マジックシールドの杖』を……

●持っていれば ……………136へ
●持っていなければ ……………90へ

192

ニーナの側にたどりついた仮面の騎士シリウスは、王女の手を取り、静かに口を開いた。
「ニーナ王女、目覚められよ。正気に戻るのだ」
とたんに、ニーナはピクンと動き、なにかを求めるように辺りを見まわした。
「その声は……カミュ！　カミュですね。生きて……生きていたのですね……」
美しい瞳から、大粒の涙があふれる。しかし、シリウスは、首を横に振るだけだ。
「ニーナ王女。私の名はシリウスだ。カミュはいない。すでに死んだ。しかし、あなたは生きねばならぬ。聖王家アカネイアは、あなたなしでは滅びてしまうだろう……」
ニーナは、聡明そうな目を見はり、シリウスをじっと見つめた。
「……わかりました……あなたがカミュでないというのなら、そうなんでしょう。でも、一言、お礼を言わせてください。ありがとう、あなたのおかげです。カミュ、いえ、シリウス」
ニーナには、すべてがわかっていた。しかし、これ以上シリウスを問いつめるつもりはなかった。愛する者が生きて、側にいる、ただそれだけで嬉しかった。

⬇30へ

193

盾で霧のブレスを弾いたマルスは、ファルシオンでメディウスに切りかかりながら叫んだ。

「フィーナ！　援護してくれ!!」

おろおろと事の成り行きを見ていたフィーナは、急ぎ足でマルスに近づいた。が、慌てすぎて階段を踏みはずしてしまう。とっさにナバールが、フィーナの体を受けとめ、叫んだ。

「フィーナ、ここで舞え！」

ナバールに命令されたフィーナは、くじいた足の痛みをこらえ、懸命に舞う。フィーナの応援を受け、力を貯めたナバールは、剣を振りかぶり、フィーナを抱きかかえると、素早い動きでマルスの援護体制に入った。

とたんに、周囲にいた者たちも我に返り、それぞれの武器を手に取る。

「よいか！　メディウスは、マルス様のファルシオンでなければ倒せぬ。武器を持った者は、攻撃能力のない者の援護に努めよ！」

軍師ジェイガンが、高らかに言い放った。全員の気持ちが、一つにまとまる。これを感じとったマルスは、再度ファルシオンを振るった。

◆バトル対戦表で戦います。マルスはE、相手はB。相手より数値が……

●上……………………40へ　●下……………………3へ

194

「ナバールが行くなら、わたしも行く！　きっと役にたつわよ！」
フィーナが志願して、神殿に同行することに。そんな彼女にナバールは、
「勝手にしろ」とだけ言いおき、背を向ける。

➡178へ

195

しかし魔竜たちの抵抗もそこまでだった。リンダがオーラの書、マリクがエクスカリバーの書で魔法攻撃を行うと、さしもの魔竜たちもたまらずその場で息絶えた。

◆経験値にプラス4して……………………216へ

196

「王子、あそこの遺跡には立ちよらなくていいのですか？」
こちらはマルスたち。北東の村をめざしていたのだが、右手に見える遺跡が気になる。
「私が見てくるわ！」
言うが早いか、シーダが空に舞う。
しばらくして彼女は、宝箱を持って戻ってきた。その中には星のカプコーンが！　しかし、喜んだのも束の間、盗賊が二人現れた！

「へっへっへっ、その宝箱、俺たちがいただこう！」

◆『星のカプコーン』を入手した。星のかけらリストにチェックする。マルスが『サンダーソード』を……

●持っていれば　……………………209へ　●持っていなければ　……………………218へ

197

「私に任せて！」

ユミナはオグマを座らせると、さっそくリブローの杖で回復の魔法を使った。　⬇181へ

198

ニーナの意識は、ハーディンへの罪にさいなまれていた。

『わたくしが、あの優しいかたを闇に陥れた……。黒騎士カミュへの慕情を捨てられなかったばかりに……。ハーディンはなにも悪くない。すべては、このわたくしが……』

メディウスの虜となりながらも、ニーナの胸の奥は、罪の意識でいっぱいだった。罪の意識が深ければ深いほど、闇の奥底に飲みこまれていく。この世に愛する者がいない。その事実も、ニーナを闇に陥れる一因だったのかもしれない。

その、ニーナを目覚めさせる唯一の人は、もうこの世にはいないのか!?

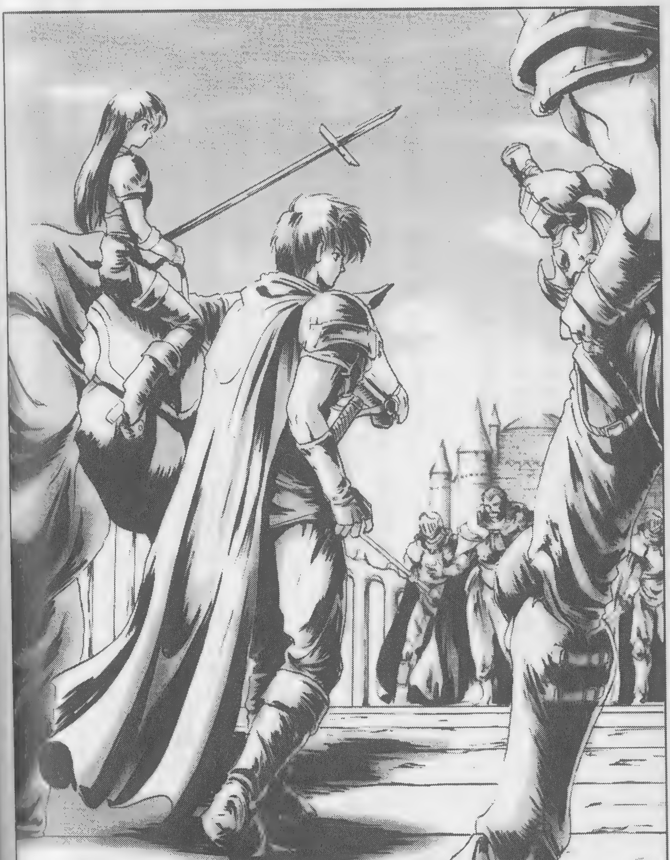
●マルスが説得する……………………250へ　●シリウスが説得する……………177へ
●ドーガが説得する……………………………………………………………………………37へ

199

が、しかし！　背の低い、いかにも素早さだけがとりえといった感じの敵が、マルスの後方から突進してきた。とっさに体勢を作ることができなかった彼の背中を、激痛が襲う！
「マルス様、大丈夫ですか!?　ここは我々の手で！」
ドーガが槍を振りまわしながら、マルスに声をかけた。ゴードンの弓は、マルスに痛手を負わせた、憎き山賊を正確に捕らえる。
　戦いが終わった頃には、マルスもやっと一息つき、立ちあがれるようになっていた。ついに、邪魔者は片づいた。あとは、ロレンス将軍と対面するだけだ。
◆Nにチェックをする。経験値にプラス3して……………………………230へ

200

　あと一歩で橋を渡りきるというところで、マルスらは本隊に追いついた。しかし、どうしたことか本隊は止まったままだ。
「みんな、どうしたんだ……あ！」



200

隊の先頭に出たマルスは思わず絶句した。
そこには、かつての戦友、そしていまは敵となったハーディンが兵を従え待ちかまえていたのだ！

「ふふふ、マルス王子よ、久しぶりだな」

「ハーディン……どうしてわが国を攻める？　僕にはまだ信じられないよ……」

「王子よ、私はこの大陸の支配者アカネイア帝国の皇帝なのだ。私にはむかう者は、誰とて容赦はしない。マルス王子、たとえおまえでもな……私の使命は、この汚らわしい世界を叩きつぶすこと！」

「ハーディン、いったいなにを言っているんだ!?　あなたは本当に変わってしまったのか！」

「反逆者共よ、遊びは終った。おまえたちはここで死ぬのだ……全員出撃！」

マルスの問いには答えず、ハーディンはうしろの兵に向かって手をあげた！
と同時に、兵士たちがマルスらめがけてどっと押しよせ、ハーディンの姿は土煙の中、見えなくなった！

「いくぞ！」

「ああ！」

それまで、マルスとハーディンのやりとりを見まもっていたオグマとナバール、それにシリウスがいち早く武器を抜くと、果敢にも敵に切りこんでいく！　それを合図に、アリティ

ア軍は戦闘開始！

「王子、悔しい気持ちはわかりますが、ここは隊を散らして戦いながら逃げましょう！　そして、カインの言っていた北西の砦から、カダインへ！」

悔しさ、切なさ、やるせなさに肩を震わせているマルスを、ジェイガンが促す。

「わかった。みんな、絶対、絶対死ぬなよ！　きっと、生きて砦で落ちあおう！」

➡25へ

201

ミネルバがドラゴンで空に舞った！

しかし、移動能力は人を乗せていない飛竜のほうが上だった！　飛竜はうしろにまわりこもうとしたミネルバに、しっぽの一撃をおみまい！

そのミネルバにジョルジュの声が飛ぶ！

「王女、離れて！」

狙い定めた攻撃は、敵の喉に突きささった！

飛竜はズズンと音を立てて砂漠に墜落。

「すまぬ、ジョルジュ、助かった」

「いや、王女が敵の注意をひいてくれていたおかげです」

◆Uにチェックする。経験値にプラス2して……86へ

202

森の中で大した敵に遭遇しないですんだためか、予定よりもだいぶ早く、前方に城下町が見えてきた。優れた竜騎士で有名な、マケドニアの町だ。

「この先は、国境を守るために反乱軍の兵士がたくさん持ちかまえているはずです。前後二手にわかれて隊を組んで行動するほうが、賢明と思われます」

マケドニアの事情に詳しいカチュアが、きっぱりと言いはなつ。マルスは黙って彼女のアドバイスに従うことにした。

前方はアラン率いる騎馬隊に、道案内の意味でカチュアが同行する。そして後方は、マルス率いる歩兵隊だ。

「では、我々は一足先に……。行くぞ!」

アランは部下を率いて、馬を駆った。が、ものの数分も経たないうちに、空から力強い羽ばたきの音が。

マケドニアの誇るドラゴンナイトが三人、束になって登場だ!! 彼らは行動範囲が広いうえ、攻撃力にも守備力にも優れている。

●騎馬隊で戦う……………………298へ　●歩兵隊に任せる……………………236へ

203

「よし、任せろ！」
力強い言葉とは裏腹に、アランの槍攻撃にはいつもの威力が感じられない。どうやら、先ほどの戦いの傷がうずいているようだ。
「アラン隊長！　さがってください！」
見兼ねたルークがアランを援護しようと、手槍を構えて手綱を引いた。

●Aにチェックがあれば……229へ
●なければ……254へ

204

慣れぬ砂に足を取られて、思うように戦えないマルスらに、蛮賊は容赦なく斧を振りまわしてくる！　その窮状を救ったのは、リンダの一撃だった。
「これでも……食らいなさいな！」
よろけながらも彼女が放ったオーラの魔法が、賊の一人に炸裂！　相手が怯んだ隙に、ペガサス部隊が空からの攻撃を展開！　やがて砂煙がおさまったそこには、蛮賊の屍が転がっていた。その脇には彼らが振りまわしていた銀の斧が三本落ちていた。
◆『銀の斧』を三本入手した。アイテムリストにチェックする。Uにチェックする。経験値にプラス2して……183へ

205

明りをめざして進んでみた。すると大きな裂け目が行く手をさえぎった。見れば、裂け目の向こうに祭壇が設けられており、そこでダークマージがなにやら儀式めいたことを行っている。まだダークマージはこちらに気づいていないようだ……。

さてどうするべきか？

●**攻撃する** ……………**171へ** ●**やりすごす** ……………**140へ**

206

城の中に入ると、広間の向こう側に、別の扉があるのを発見した。

「このまま外に出られそうですな……。マルス様、どうしますか？」

ジェイガンが、マルスに向かって問いかけた。

●**火竜の墓場を後にする** ……………**87へ** ●**もう少し様子を見る** ……………**186へ**

207

倒れたドーガに対して、ウェンデルがリブローの杖を振るった。とたんにドーガはダメージから回復して立ちあがった。

魔竜たちはさらに暴れつづけ、オグマやシーマに手傷を負わせた。だがマリーシアがリザ

なんとか二匹の魔竜を倒すことに成功した。

◆経験値にプラス４して……………………216へ

208

マルス率いるアリティア軍が、パレスへの進軍途中で野営をしていると、そこに一人の女将軍が訪ねてきた。彼女こそが、かつての暗黒戦争で同盟国アリティアを裏切り、マルスの手で仇打ちをされたグラ王の一人娘、シーマ王女だ。シーマは、アリティアに併合されたグラを解放するため、ハーディンの命令に従っていたのだが、そのやり口に疑問を抱き、真相をたしかめるためにマルスを訪問したのだった。

マルスは今までのことをすべてシーマに話した。ハーディンの狂気、ガーネフの陰謀、そして、自らが葬った、シーマの父・グラ王のことを……。

「もともと、アリティアとグラは兄弟の仲。お互い過去は忘れ、力を合わせましょう」

聡明なシーマは静かに事実を受けいれ、マルスの仲間になることを決意した。⬇189へ

209

マルスがサンダーソードを抜きはなつと同時に、湧きおこる雷鳴！

次の瞬間、盗賊はいかずちに打たれ、立ったまま絶命。もう一人は、ルークが槍でしとめる！　その盗賊の荷物から、5000ゴールドとパワーリングが見つかった。

◆『パワーリング』を入手した。アイテムリストにチェックする。経験値にプラス2して……73へ

210

文字どおり矢継ぎ早に矢を射かけるゴードンに、バイキングたちはバタバタと倒れていく！その隙に、敵の周囲にまわりこんだペガサスナイトのパオラ、カチュアらが敵を一網打尽！

◆経験値にプラス5して……8へ

211

マルスはまず、ルークに鉄の槍、そしてドーガに手槍をそろえておこうと考えた。が、それには少々資金不足。仕かたなく、ドーガに600ゴールドの手槍を買い与える。今回はこれが精一杯だった。

ルークとセシルには、いま少し辛抱してもらわねばなるまい。

◆ドーガのアイテムに『手槍』を加える。Cにチェックして

●Bにチェックがあれば……234へ　●なければ……121へ

212

「白騎士団のカチュア……こしゃくな！」
リュッケとカチュアの武器が、なんども交わり火花を散らす！
が、焦る気持ちのぶんだけリュッケが負けていた。カチュアのレディソードが、ついにリュッケの腕を捕えた！
「うぐっ！」
敵将の手から、槍が落ちる。
「リュッケ、覚悟！」
すかさず、カチュアが左の胸にとどめをさす！
ついに、反乱の将リュッケは、その場に崩れおちた。

◆経験値にプラス2して……237へ

213

「盗賊のことは盗賊に任しときな」
ジュリアンが志願。神殿に同行することに。

◆Jにチェックして……178へ

214

オグマとマルスは首尾よく魔道士の懐に飛びこみ、一撃でこれを倒した。だが残った一人の魔道士は、呪文を読み終えていた。
とたんに隕石がアストリアの頭上に降りそそぐ!!
◆マリーシアが『マジックシールドの杖』を……
●持っていれば……145へ
●いなければ……180へ

215

「王子、危ない!」
ラングに対峙していたマルスの体に、オグマが突進! それと同時に、ゴードンが目にも止まらぬ速さで、矢を放った!
「うぎゃあ!」
とたんに、弓を構えた兵士が転がりでる。その額には、ゴードンが放った矢がブスリと突きささっていた。
「つくづく見下げ果てたヤツだな……こんな男のせいでロレンスは死んだのか!」
オグマが、怒りに声を震わせて言った。
「な、なんとでも言え! わしは、わしは死なん!」

ラングは槍を拾うと、誰も近づけぬようにとめちゃくちゃに振りまわす！
「これまでだ、ラング！」
マルスは、ラングの頭上高くジャンプすると、はげあがった頭めがけて剣を振りおろした！
キルソードの必殺の一撃の前に、ラングは前のめりに倒れふす！

↓184へ

216

一行はさらに竜の祭壇を進んでいった。するとはるか前方に巨大な祭壇が見えた。
その祭壇では、くすぶった色のローブを身にまとった司祭が一心に祈りを捧げている。
「ガーネフだ！」
マルスたちは祭壇へ続く一本道を足早に進んだ。
だがその行く手を魔竜がふさぐ！

↓255へ

217

さて、お次は？（一度行ったところへは二度行けません）

●武器屋へ……232へ　●近くの民家へ……166へ
●井戸へ……187へ　●全部行った……302へ

218

盗賊が、襲いかかってきた！

◆バトル対戦表で戦います。マルスたちはA、相手はE。相手より数値が……

●上……152へ　●下……227へ

219

一瞬、まるで天が味方したかのように砂嵐がやんだ！　そのチャンスに、ドラゴンナイトのミネルバと、ペガサスナイトのシーダが空に舞い、上空から蛮賊を叩く！

倒れた蛮賊たちの横には、銀の斧が三本落ちていた。

◆『銀の斧』を三本入手した。アイテムリストに記入する。経験値にプラス2して……183へ

220

行きどまりにつきあたった。そこには、先程倒した火竜の屍が転がっていた。「ルートの選択を誤ったな……」マルスが小さく舌打ちをする。

灼熱地獄のようなここでは、タイムロスは命取り。一行はすぐに、今来た通路を引きかえすことにした。

⬇377へ

221

しばらく進むと、頑丈そうな錠がかけられた部屋の前に出た。
「開かずの扉か……ここはオレに任せて、みんなは先へ行ってくれ！」
ジュリアンが細いピンを取りだし、鍵開けに挑む。が、その背後にゆらーり、黒い影が！
振りむくと、そこには紫のローブを着た、敵の司祭が！

◆バトル対戦表で戦います。ジュリアンはD、相手はA。相手より数値が……

●上……163へ　●下……188へ

222

「みなさん、大丈夫ですか！」
傷ついて後退してきた兵たちに、マリーシアが次々とライブをかけていく。幼いユミナも、かいがいしくその手伝いをする。
「ありがとう、マリーシア。おかげでみんなすっかり回復したみたいだ。さあ、海賊どもにさっきの借りをかえしてやろう！」
「オ――――！」
マルスの言葉に、皆拳をあげて応える！　再び戦闘開始！

⬇248へ

223

「マルス様、あんなところに家が！」
シーダが砂山を指さした。よく見ると、砂に埋もれるようにして石作りの建物が建っているではないか。
「……蛮賊の隠れ家じゃなければいいのだけれど……」
マルスたちは静かにその建物に近づくと、慎重に扉を開けた。
すると！
「お～や、珍しい！　よくこの秘密の店を見つけたわねえ！」
なんとそこは店になっており、女主人が笑顔で迎えてくれた。
彼女は、マルスらが持っていた銀の斧三本を、３０００ゴールドという高値で買いとってくれた。その金で、さっそく買物をする。
「ええと、騎士勲章に勇者証、ナイトキラー五本に銀の槍とレイピアと……」
マルスの買いっぷりのよさに、女主人はびっくり！
「今日はもうこれで店じまいだよ。５００ゴールド残るけど、傷薬でも買うかい？」
◆『騎士勲章』でカインがパラディンに、『勇者証』でナバールが勇者にクラスチェンジした。ナバールとオグマの装備表に『ドラゴンキラー』と『アーマーキラー』の両方、カインの装備表に『銀の槍』と『ナイトキラー』、フィーナの装備表に『レイピア』、ルーク、アラ

ン、セシルの装備表に『ナイトキラー』を、それぞれ加える。残りの『ナイトキラー』は、シーダ、ミネルバ、パオラ、カチュアのうち一人のアイテムに加える。さらに『傷薬』五つを買う場合はアイテムリストにチェックする。アイテムリストから『銀の斧』三本を消して

……………………476へ

224

司祭のウィローは倒れた。これでマルスは名実共に祖国と城を奪回したのだ。しかし喜んでばかりはいられなかった。マルスの姉エリス王女は、すでにいずこかに連れさられた後だったのだ。

「姉上はいったいどこに……」

焦るマルスにジェイガンは静かに助言した。

「多分、エリス様はアカネイアの聖都パレスに連れさられたに違いありません。もはや猶予はありません。軍をパレスに向かって進める時が来たのです」

「パレスに……」

千年の都パレスを攻める。これまで以上の激しい戦いになるだろう。犠牲者もまた、これまでの比ではない。しかも戦う相手の多くは、かつて共に戦った戦友たちなのである。

マルスの悩みは深かった。

「僕が頼りないばかりに、アリティアの人たちに大きな犠牲を強いてしまった。そんな僕にこれからの戦いを指揮できるのだろうか……」

「なにをおっしゃいます。皆は、あなたについていくことに決めています。さあ、号令を！」

マルスをはげますジェイガン。側にいたシーダもまたマルスをはげました。

「狂気に捕らわれたハーディンをこのままにしておいたら、世界は大変なことになるわ。あのハーディンと渡りあうことができるのはマルス様しかいないの。世界のため、弱音を吐かずにがんばって」

ジェイガンとシーダの言葉に黙ってうなずくマルス。もう決意は固まった。マルスはアリティアの軍勢をすべて集めるように号令を下した。

作戦会議が開かれた。現在の手持ちのゴールドを集めてアイテムの収集にかかる。

その結果、マルスにマスターソード、マリーシアに味方全員の回復をはかるリザーブの杖、ウェンデルに離れた味方を回復させるリブローの杖が授けられた。

◆マルスの装備表に『マスターソード』、マリーシアの装備表に『リザーブの杖』、ウェンデルの装備表に『リブローの杖』を加えて……**208へ**

225

マリクが動きはじめた瞬間、すでにジュリアンとミネルバも、それぞれが愛する人のもと

に向かっていた。ジュリアンは、レナの腕をきつくつかんで叫んだ。
「レナさん、オレと一緒に暮らそう！　もう、こんな思いは絶対にさせない!!」
ミネルバは、年若い妹を抱きしめ、優しくささやいた。
「マリア。私よ、ミネルバよ。恐かったでしょう。でも、もう大丈夫。安心して……」
二人のシスターは、エリス同様に目を覚まし、愛する者の胸にすがった。
しかし——!!
問題は、アカネイアの王女にして、亡きハーディン皇帝妃のニーナだ。
「ニーナ様が心の奥底で求められているのは、黒騎士カミュです。しかし、カミュは暗黒戦争のとき、すでに……。マルス様、いったいどうしたら!?」
ジェイガンが、マルスに向かって言った。

↓198へ

226

ミシェイルの情報によって、マルスたちは竜の祭壇に忍びこむことに成功した。竜の祭壇は、地下の広大な洞窟内に作られており、内部は迷路のように入りくんでいた。
薄ぐらい洞窟内を、一行は勘を頼りに進んだ。すると前方からかすかに明りが見えるではないか。どうする、明りをめざして進むか？

●進む……205へ　●進まない……35へ

227

マルスは、盗賊の剣をヒョイッとかわすと、次の瞬間にはもう敵の喉に剣を突きたてていた！
「うわっ……覚えてろ！」
仲間の死に、もう一人の盗賊は大慌てで逃げだす！
その背には宝の入った麻袋が！
追いかけようとしたが、砂に足を取られ、思うように進めない。ようやく体勢を整えたときには、盗賊の姿は消えていた。
しかし倒れた盗賊の荷物から、５０００ゴールドの大金を発見。

◆経験値にプラス１して……73へ

228

リンダが繰りだしたオーラの聖なる光が、敵を狙う！　が！　間一髪、攻撃をかわしたバイキングは、術を放ったあとのリンダに体当り、さらに剣を振りかざす！
「危ない！　リンダ、伏せるんだ！」
仲間の声に、リンダは地面にうずくまる。と、そのとたん！　ゴードンの矢が、バイキングの喉にブッと突きささった。

◆Sにチェックする。経験値にプラス1して…………8へ

229

「ちょっと待って！」
いまにも飛びだそうとしたルークを、マリーシアが制止した。
「ルーク、傷を負ってるわ。治してから戦ったほうが、攻撃にも威力が出るはずよ！」
そう言うなり、マルスの脇から進みでて、ライブの杖をかざす。みるみるうちに、ルークの体についた傷が癒えていった。
すっかり元気になったルークを加え、形勢は一気に逆転した。敵はあっという間に倒れ、やがて微動だにしなくなった。
◆Aのチェックを消す。経験値にプラス1して…………137へ

230

その頃砦の入り口付近では——。
マルスがかつて共に戦った仲間、あの生真面目で温厚なロレンス将軍が、傷だらけの身を床に横たえていた。
傍らにはグルニア王家の生き残りのユベロ王子とユミナ王女が。



「私はここに残り、後始末をつけなければならない。……だが、王子に王女、あなたがたには未来がある。行きなさい。あなたがたは……生きなければなりません」
彼らの背後には、逞しい男の影が寄りそっていた。
「いやです。ロレンスを置いて行くなんて。私もここに残ります。絶対、どこにも行きたくありません！」
ユミナ王女は、ロレンスの体にすがって泣きじゃくっている。
「……聞きわけのないことを言うものじゃありません……」
そして、ロレンスはその逞しい人影に言った。静かだが、たしかに威厳のある声で。
「二人を頼んだぞ。さあ、行くのだ」
泣きじゃくりロレンスの傍らを離れようとしない王女を右手で担ぎあげ、そして左ではぐっと唇を噛みしめた王子の手を引き、男はゆっくりと砦の裏口から出ていった。
ロレンスは身を起こし、三人の姿が視界から完全に消えさるまで、じっと見送っていた。
砦の外が騒がしくなってきた。どうやら、ラングの手の者が来たようだ――。
ロレンスは、床に横たわりながら、ぼんやりとそんなことを考えていた。

➡252へ

231

やっとの思いで深い森を抜け、ラーマン神殿の前へとたどり着いた。

「僕らが神殿を捜索しているうちに、ほかのみんなは少しでも早くこの島を脱出するように、カシミア大橋へ向かっていてくれ。なに、すぐ追いつくから！」
そう言うとマルスは、ウェンデル、カチュア、それにナバールを伴って神殿へ。が、
「王子、中にはまだ盗賊が潜んでいるやもしれません。せめてもう一人、お連れください」
と、ジェイガンに言われ足を止める。
さて、あと一人、どちらを連れていく？
●フィーナ…………194へ　●ジュリアン…………213へ

232

武器屋に寄ってみることにしたマルスたち。
さて……。
●Eにチェックがあれば…………296へ　●なければ…………266へ

233

宝物庫を通って進むことにした。オグマを先頭に宝物庫の中に飛びこむと、そこでは数人の魔道士が守りを固めていた。
とっさにゴードンが銀の弓を放つ。魔道士の一人が倒れた。同時に、オグマ、アストリア、

マルスが剣を振りかぶって、魔道士に襲いかかった。
魔道士たちは呪文を唱え、魔法攻撃を行おうとしている。

●オにチェックがあれば……214へ　●なければ……191へ

234

「それにしてもラングのヤツ、許せん。村じゅうの女をさらうとは!!」
普段は温厚なドーガが、珍しく憤ったように言う。が、それは、全員に共通の意見だった。
「とにかく、マリーシアという娘に会ってみよう。十歳とはいえ、ラングにひどい目に合わせられるかもしれないからね」
ドーガの肩を叩きながらそう言うと、マルスは皆を率いて歩きはじめた。

➡321へ

235

「食らえ!　エクスカリバー!!」
マリクが、強烈な刃の魔法を放った。
ビシュウウウウウウウン!!
真空の刃に捕らえられた飛竜は、ガクンと飛行高度を落とす。次いでドーガが手槍を放つと、飛竜は地面に墜落して息絶えた。

◆経験値にプラス2して
●力にチェックがあれば　…………87へ　●なければ　…………………206へ

236

「我々はヤツらの注意を引きつける役に専念しよう。飛行系は弓矢に弱いはず。あとは後方隊がうまくやってくれるだろう」
アランはそう言うと、自ら鬨の声をあげ、森の外へ馬を走らせる。それに遅れじと続くルーク、セシル、カチュア。
彼らはドラゴンナイトの目前に飛びだすと、敵の目を釘づけにしながら素早く攻撃をかわし、どんどん前進していった。

⬇267へ

237

マルスは馬を降りると、すでに虫の息のリュッケに歩みより、憐れんで言った。
「……リュッケ、あなたはなぜ反乱など……」
「……わしも、もとはアカネイア王家の名のもとに戦っていたのだ。が、いつの間にか反乱軍となって……ふ、おまえらも気をつけるのだな……」
それが、リュッケの最後の言葉だった。が、その言葉はマルスの胸に大きな影を落とした。

『つまり、この反乱は彼が自ら起こしたものではなく、ただなに者かに罠にはめられたものだというのか……いや、よそう不吉なことは考えまい……』
マルスは、リュッケの遺体の側で、小さな布袋を拾った。その中には小さな石ころが。
この小石が、世界の運命を握るものになろうとは、今のマルスには知るよしもなかった。
◆『星のタウルス』を入手した。星のかけらリストにチェックして ……338へ

238

「みんな、準備はいいか？　早いところ出発しようぜ！」
チェイニーは、一行に向かって叫んだ。マルスは、暗黒戦争に参加しなかった者に向けて、このこなまいきな少年を簡単に紹介すると、皆をうながして出発の準備を整えさせる。

●トにチェックがあれば ……276へ　●なければ ……455へ

239

右に折れ、真っすぐ進む。
先程昇ってきた階段の昇り口を過ぎ、さらに進む。

●カにチェックがあれば ……220へ　●なければ ……281へ

240

城の中を静かに潜行するマルスらは、途中、誰もいない部屋で宝箱を発見！　その中にはアーチャーのクラスチェンジアイテム、オリオンの矢が入っていた。

「ゴードン、さっそくこれでスナイパーに！」

マルスに輝く矢を渡されたゴードンは、その場でスナイパーにクラスチェンジ！　これで銀の弓が使えるようになった。

◆ゴードンが『スナイパー』にクラスチェンジした。装備表の職業にチェックする。サにチェックして……**221へ**

241

マルスらは、様々な思いを胸にグルニアを後にした――。

ラーマン神殿のある島へ渡ったところで、陽が暮れてきたので、一行は野営をすることに。皆、明日からの戦いに備え、武器の手入れや交換をし、兵力を整えている。

「そうだ、ウェンデル司祭。この杖はあなたかマリーシア、どちらかが装備していてください」

ジュリアンが、オルベルン城で見つけた杖を、司祭に差しだした。それは、敵の魔法から味方を守るマジックシールドの杖だった。

◆『マジックシールドの杖』を、マリーシアかウェンデルの装備表に加える。ここで、バト

ル対戦表の書きかえも可能……………………………**283**へ

242

マルスを、紅蓮の炎が襲う！
そこへ、馬のいななきと共にアランが現れ、炎をものともせず突進、魔道士を槍で一突きに！
「アラン！　大丈夫か！」
「……大丈夫です、王子。我らパラディンは魔法防御が高いのをお忘れか？」
アランは、ニッと笑ってみせる。
「ところで王子、残念な知らせです。魔道軍が帝国側についたそうです……」
「な、なんだって！　いったいどうなっているんだ……」
「わかりません。しかし、私どもにはウェンデル司祭もおいでになります。ことの真相をたしかめるためにも、このまま神殿をめざすことになりました。ただ、この先出会う魔道士も、我らをみたらすぐに攻撃をしかけてくるでしょう」
「ありがとう、アラン。君が知らせにきてくれなかったら、危ないところだったよ」
◆経験値にプラス１して……………………………**301**へ

243

マルスらと本隊は、カシミア大橋の手前で合流。
橋を渡る前に、手に入れたばかりのサンダーソードをマルスかナバールが装備することにした。
どちらが装備する？

●マルス……………313へ　●ナバール……………268へ

244

「マリク、頼んだぞ！」
マルスが、火竜に特効のあるブリザーの書を持ったマリクに叫ぶ！
「任せてください！」
マリクは、メラメラと燃える炎で迫る火竜に、冷気の魔法ブリザーをかけた！
火竜は口を開けたまま凍りつく！
そこにマルスが剣を刺すと、氷の破片を跳ねとばしながら粉々に砕けちった。そしてその下には宝箱が！
宝箱には星のかけら、星のピスケスが入っていた。
「さあ、早く戻ろう！」

チェイニーにせかされ、さっききた通路をまっすぐに戻る。
◆『星のピスケス』を入手した。星のかけらリストにチェックする。経験値にプラス2して
●ケにチェックがあれば……256へ　●なければ……377へ

245

さらに歩を進めるマルスたち。その時……。
「マルスよ、塔の前に立つのじゃ。さすれば扉は開く……」
どこからともなく荘厳な声が聞こえてきた。この声には聞き覚えがある——。
マルスは素直に指示に従った。壁に近よると、神竜族をあらわす彫刻の施された扉がゴゴゴ……という地鳴りと共に開いた。そして——。
扉が開いた奥には見覚えのある人物が!!　大司祭ガトーである。
「よくここまで来られたな。さすがは勇者アンリの血を引く王子じゃ」
「ガトー様……」
マルスはガトーのもとに駆けよった。
◆星のかけらは十二個全部そろっているか?
●そろっている……277へ　●アクエリアがない……384へ
●スコーピオがない……360へ　●二つ足りない……347へ

246

吐く息が凍って結晶になるほどの寒さだった。
一行はフローズンランドに入ったのだった。周囲はすべてそびえ立つ氷雪。標高が高くなるにつれ呼吸が苦しくなってくる。時おり吹きつける風も、容赦なく皆の肌を刺した。
「おや!?」
皆の目に留まった一軒の店。
凍てつく寒さに「ちょっと中へ入ろうか」という意見が一致する。重い鉄の扉を開けて中に入ると、そこではいくつかの魔道書を売っていた。見れば、マジックシールドの杖もある。欲しいところだが、9500ゴールドとちょっと高い。手持ちのお金がほとんどなくなってしまう。
「うーん、1000ゴールドのエルファイアーの書にしておこうかな……」
迷うマルス。さて、どちらを買う？

●マジックシールドの杖　……259へ
●エルファイアーの書　……282へ

247

一方、マリクも氷竜に向けて呪文を読みあげているところだった。
彼が今唱えている呪文は……。

●クにチェックがあれば……262へ　●なければ……273へ

248

アリティア軍のいっせい攻撃の前に、バイキングたちはその数を減らし、あとは、ガイルさえ倒せば！　しかし、この男だけは簡単に倒せそうもない。
「まずは、私がお相手するわ！」
と、リンダが大男の前に躍りでた！　彼女はなんの書で攻撃する⁉

●オーラの書……308へ　●ファイアーの書……274へ

249

カダイン城に入るには、このヨーデル司祭を倒すほかなさそうだ！
しかし、なれない砂漠を旅してきたアリティア軍の戦士たちの顔には疲労の色が！

●チにチェックがあれば……349へ　●なければ……260へ

250

「よし、僕が、ニーナ様を説得し、目覚めさせてみよう！」
そう言うなり、マルスは祭壇に向かって歩きはじめた。が、シーダに止められる。

「なにを言っているの、マルス様。あなたが行ってなにかあったら、誰がメディウスを倒すんですか!? 絶対にダメ。私が許さないわ!」

いつになく強い口調のシーダに、マルスはたじろぐ。

「わ、わかった……でも、誰がニーナ様を……?」

●ドーガが説得する……………37へ　●シリウスが説得する……………177へ

251

〝懐かしきわが城〟に帰還したマルスたちだったが、まだ完全に城を制圧した訳ではなかった。城中にはアカネイアの軍勢が随所にひしめいている。

マルスはジェイガンの助言もあり、城中の敵軍を叩くために、仲間をいくつかの部隊にわけて散開させた。

マルスには、勇者のナバール、スナイパーのゴードン、魔道士のリンダ、シスターのマリーシアが同行することとなった。しかし、まだ不安が残るのか、ジェイガンはもう一人の同行を強要する。

●パラディンのカイン……………270へ　●スナイパーのジョルジュ……………284へ

252

「これは、ロレンス将軍になにか考えがあっての反乱だ。彼を決して傷つけないように」
マルスは皆にそう言いわたすと、砦へと足を踏みいれた。が、彼らが見たのは、傷だらけになったロレンスの姿だった。
「どうしたんだ、ロレンス将軍！　その傷は!?」
駆けより、自分を抱きおこそうとするマルスを見、ロレンスは驚いたような表情をした。
「帝国の援軍が来るという話だったが、王子、あなたでしたか……」
将軍は、うれしそうな顔をすると、マルスの肩を借りて立ちあがった。
「あなたになら、私の真意をわかっていただけると思います。私は、グルニア王家の生き残りの王子と王女……まだまだ先の長いあのお二人を救うことだけを考えていました。それが、グルニア王家に仕える私の使命ですから……。反乱軍の汚名を着せられた今でも、間違ったことはしていないと考えています。この傷が誰の仕業か、言うまでもないでしょう。私は、もう長くはもちませんが、王子たちは安全な場所へ逃がしました。思い残すことは、なにもない。後は潔く己れの最後を、己れでつけるだけです……」
ロレンスはそう言うなり剣を抜くと、マルスの制止を振りきって心臓を一突き！
「最後を見届けてくれたのが王子で、本当によかった……。これであなたの顔も立つでしょう。スターロード・マルスとアリティアに栄光を!!」

それが、最後の言葉になった。

そうだったのか……。事情を知り、あまりにも男らしく潔い同志の最後に、マルスは最敬礼をした。そして、誇り高きこのジェネラルのために、小さいながらも精一杯の墓標を作り、皆で合掌をした。ロレンス将軍を知るドーガやゴードンは、男泣きに泣いた。

と、そこに――。

↓290へ

253

アランの銀の槍は、圧倒的に相手を威圧していた。勝利は目前だった。が、一方のルークは大苦戦。威力の弱い手槍だけで戦うには、限界があった。敵の槍が、ルークの心臓を狙う。もはやこれまでか!! ルークがそう覚悟した瞬間！

ビシュ――――ッ！

後方から細い槍が飛んできたかと思うと、正確に敵の胸を捕らえた。なにごとが起こったのか理解できず、もんどりうってもがくソシアルナイトの姿を茫然と眺めていたルークの前に現れたのは――！

「よかったわ、間にあって。あなたがた、アリティアの兵でしょう？ 私はマケドニアのカチュア。マルス様の知りあいよ。そうだ、これ、いただいていきましょう」

敵が落とした鉄の槍を拾い、ルークに手渡したのは、なんと、暗黒戦争でマルスと共に戦

った、マケドニア白騎士団ペガサスナイト三姉妹の次女・カチュアだったのだ。

◆ルークの装備表に『鉄の槍』を加える。経験値にプラス2して……………179へ

254

いつもの力は半減とはいえアリティア軍の中心的存在のアラン、そして頼もしいアーマーナイトのドーガ、それにルークが加わり、形勢は一気に逆転した。敵は地に倒れふし、あっという間に動かなくなっていた。

◆経験値にプラス1して……………………137へ

255

「ここは任せて、お兄ちゃん！」

チキはそう言うと、竜石の力を借りて神竜に変身。力ずくで魔竜を押えこむ。

「今だ！」

マルスたちは、二匹の竜の傍らを過ぎ、さらに進んでいった。

その時魔道士のマリクがマルスに話しかけた。

「マルス様、ガーネフを倒せるのはスターライトの書を持った魔道士だけです。私が行きますから、あなたがたは守りを固めてください！」

マルスは黙ってうなずき、マリクを送りだした。
「よし、マリクは俺が護衛する。必ずガーネフのところまで送りとどけてやる！」
そう名乗りでたのはジェネラルのドーガ。ドーガは銀の槍を油断なく構え、マリクの前に立って走りだした。

⬇280へ

256

さっき飛竜を倒した、大きな扉の前に出た。

●力にチェックがあれば……………87へ　●なければ……………………206へ

257

「ああ、アリティアの騎士様たち！　どうかあのラングからこの国を守ってください！」
「……あの暴君を倒すためなら、我らはどんな協力もいたします！」
グルニア解放に向けて兵を進めるマルスたちは、どこへ行っても歓迎された。と同時に、改めてラングの悪逆非道ぶりが明らかになる。マルスは、小さな集落で、ユベロとユミナの養育係をしていたという女に出会うと、幼い二人を預け、ラングのもとへ向かった。
一方、当のラングはと言えば、グルニアの中心にあるオルベルン城で、玉座に座り部下のトラース将軍を怒鳴りつけていた。

「アリティアごときになにを手を焼いておるのだ！　ヤツらには大した兵力はないはずだぞ!!」
「……しかしラング司令官。ヤツらはアリティアの精鋭部隊……我が軍にとって頼りのジョルジュ殿率いる弓兵隊は城にはいません……大丈夫でしょうか……」
「ならば、すぐにジョルジュを呼びもどせ！　いいか、トラース将軍、わしは城内を固めるゆえ、おまえは城門を死守せよ！　城下にも入れるでないぞ。さあ、シューターとしての腕の見せどころだ！　ふん、アリティア軍など、わしらの敵ではないわ!!」

➡291へ

258

「白騎士団のカチュアか……。ふ、今ごろミネルバ王女はどこにいるのやら」
「え!?」
　リュッケの言葉に、一瞬カチュアの攻撃が鈍った。リュッケはその隙を逃さず、手にした鋼の槍の柄で、カチュアの細身の槍を跳ねとばした！
　さらにリュッケは容赦なくカチュアに鉾先をむける！
　カチュアは次第に、壁に追いつめられてしまった！
「待ちなさい、今度は私が相手よ！」
　パオラが、リュッケとカチュアの間に入ると、しなやかに鋼の槍を突きだした！　そして

それは、敵将の胸深く突きささった！
「うぐっ……む、無念……」
ついに、反乱の将リュッケはその場に崩れおちた。
◆キにチェックする。経験値にプラス2して……**237へ**

259

マジックシールドの杖を買うことにした。これは魔法防御率をあげることができるすぐれた杖だ。９５００ゴールドは惜しくない。
「これは、シスターか司祭のどなたかが持っていてください」
◆ウェンデルかマリーシアの装備表に『マジックシールドの杖』を加えて……306へ

260

ボルガノンの魔法は、命中率こそ低いが当たればでかい！　加えて、地面が揺れるため皆立っているのがやっとという状態になってしまう。
「……俺がヤツをひきつける！」
そう言うと、オグマが敵に向かって一直線に駆けでる！
そのオグマに、ヨーデルはボルガノンの集中砲火を浴びせてきた。その一つが命中！

「う！」

オグマの体が宙に舞い、砂漠へと沈む！

しかし、オグマがおとりになっている間に体勢を整えたジョルジュ、ゴードン、ライアンらの弓矢部隊が、いっせいに矢をしかけた！　オグマに気をとられていたヨーデルは無数の矢をおい、崩れおちる。

「……エルレーン……本当にこれでいいのか……」

ヨーデルは一言うめき、息絶えた。

ヨーデルを倒したところへ、マルスら別動隊が合流してきた。

◆Tにチェックする。経験値にプラス2して……285へ

261

マルスを、紅蓮の炎が襲う！　そこへ、馬のいななきと共にカインが現れ、マルスをかばった。

思わず歯を食いしばるカイン！

カインのおかげで炎の直撃をさけることができたマルスが、再び炎を操ろうとしている魔道士に必殺の一撃を浴びせた！

「カイン、大丈夫か！」

「……大丈夫です、王子。それよりも、残念な知らせです。魔道軍が帝国側につきました」
「な、なんだって！　いったいどうなっているんだ……」
「わかりません。しかし、私どもにはウェンデル司祭もおいでになります。ことの真相をたしかめるためにも、このまま神殿をめざすことになりました。ただ、この先出会う魔道士も、我らを見たらすぐに攻撃をしかけてくるでしょう」
「ありがとう、カイン。君が知らせに来てくれなかったら、危ないところだったよ」
◆経験値にプラス1して……………301へ

262

マリクはエルファイアーの書を唱えた！
その瞬間、炎の柱が天高くごうごうと立ちのぼり、氷竜を包みこんだ。炎に弱い氷竜はたまらず息絶えた。
「残るは一匹！」
オグマはそう叫ぶと、ドラゴンキラーをきらめかせて、氷竜に突っこんでいった。
ザクッ！　ドラゴンキラーの一撃が氷竜の腹の厚い脂肪を貫いた。続いてナバールもまたドラゴンキラーを氷竜に突きたてる。
これにはさしもの氷竜もたまらず、断末魔の叫びをあげて息絶えた。

マルスたちは、氷竜の隠し持っていた20000ゴールドを入手した。

◆経験値にプラス5して……………317へ

263

「やあ、おまたせ！　相変わらず真面目そうな顔してんな、マルス！」

柱の影から一人の少年が現れた。コマンドのチェイニーだ。誰にでも変身できるという不思議な能力を身につけた彼は、やはり先の戦いでマルスと巡りあっていた――。口は乱暴でなまいきだが、不思議と憎めない少年だ。

「チェイニー、きみがガトー様のお使いなのか？」

「まあね」

「でも、どうして……」

「ええと、それは……ま、そのうち話すさ。ほら、ぽかんとしてないでついてこいよ。案内するからさ！　ただし、この先も、ちいとばかりきついから覚悟しとけよな！」➡238へ

264

リザーブの呪文を使うダークマージさえいなくなればこっちのものである。ドーガは巧みに銀の槍を振るって、あっという間に二人のダークマージを倒した。

「今だ、マリク！」
ドーガに言われるまでもない。マリクは暗黒の司祭ガーネフの前に進みでて、その邪悪な瞳をにらみつけた。
◆経験値にプラス2して……465へ

265

鉄の槍と手槍を一本ずつ買うと、ちょうど1000ゴールドになる。マルスは、ルークに400ゴールドの鉄の槍、そしてドーガに600ゴールドの手槍を渡した。
◆ルークの装備表に『鉄の槍』、ドーガの装備表に『手槍』を加える。
●Bにチェックがあれば……234へ　●なければ……121へ

266

武器屋に入ろうとしたマルスめがけ、小道に潜んでいた反乱軍の兵士が襲いかかってきた！
●Fにチェックがあれば……354へ　●なければ……379へ

267

「ゴードン、ライアン、きみたちの出番だ！」

マルスの号令で、二人はいっせいに弓を構えた。前方の騎馬隊に全神経を集中させ、追っているドラゴンナイト。
二人の兄弟は草むらに隠れて身がまえ、同時に矢を放つ。
ビュン、ビュ――――ン。
技アリの連続攻撃は、みごとに決まった。二体のドラゴンは一撃で打ち落とされ、背中のナイトを高みから振りおとす。しかもラッキーなことに、敵の一人が、鈍く輝くナイトキラーを持ったまま絶命していた。
「マルス様、これをいただいていってもいいですか？　なかなか使いやすそうだ」
ナイトキラーを手にしたドーガが、ニヤリと笑みを浮かべる。その背後に、残るドラゴンナイトが突撃!!
「ドーガ、後ろ、気をつけろ!!」
マルスは、ドーガをかばうように、敵の前へ進みでた。
◆ドーガの装備表に『ナイトキラー』を加える。経験値にプラス2して
●Nにチェックがあれば……………329へ　●なければ……………………369へ

268

「ナバール、きみならこの剣の持つ力を、充分に発揮することができるだろう。きみが持っ

ていてくれ。頼むよ」
マルスの一言で、ナバールがサンダーソードを装備することになった。
◆ナバールの装備表に『サンダーソード』を加える。トにチェックして……286へ

269

平原ルートへの偵察は、ペガサスナイトのパオラと、どんな敵に遭遇するかわからないので、魔法が使えるリンダを送りこむことにした。
◆Yにチェックして……304へ

270

メンバーにもう一人カインを加え、マルスたちは城中を進んでいった。そして到着したのが、大広間の扉の前。ここには敵の主力が集結しているとの報せが入っていた。扉の向こうからは、戦いに備える敵兵の殺気が伝わってくる。
●コにチェックして……311へ

271

倒れたハーディンは、最後の力を振りしぼってマルスに話しかけた。



「マルス……王子……。私はようやく長い夢から目覚めたようだ……。許せ、王子……。私は、自分の中にいる恐ろしい悪魔と戦っていた。だが私は弱すぎた。最後はヤツのいいなりになってしまった。心の中では、誰かに私を止めてほしかったのだ。きみたちの手にかかって死ぬことができたのは幸せだった……」

なんと声をかけていいのか、マルスにはわからなかった。そんなマルスに、ハーディンは闇のオーブを取りだし、宝槍グラディウスと共に託した。

「王子……。ニーナを頼む。そして伝えてくれ。最後まで愛していた。どうか、許してほしい……と……」

ハーディンはやっとのことでそこまで言うと、そのまま息絶えた。

黙って、闇のオーブを握りしめるマルス。しかし悲しんでばかりはいられない。ハーディンを操ったガーネフはまだ健在で、今も暗黒の策謀をめぐらしているのだ。

「これですべてのオーブがそろったわけだが……」

マルスは五つのオーブを取りだして、しげしげと眺めた。と――！　五つのオーブはひとりでに浮きあがり、ファイアーエムブレム――紋章の盾にピタリとはめこまれた。突如として聖なる光を放ち、ついに、地竜の力を封じこめる封印の盾が完成したのである。

◆『闇のオーブ』を入手した。オーブリストにチェックする。ドーガの装備表に『グラディウス』を加える。経験値にプラス3して……………**5**へ

272

「俺に続け!」
そういってまっさきに駆けだしたのは、傭兵のオグマ! 大砲の玉を右に左にかいくぐり、一気に橋を渡りきると、そのままトラースに切りかかる!
たまらず飛びすさるトラース!
しかし、次の瞬間にはオグマの剣の餌食となり、石畳の上に崩れおちていた。
「砲撃がやんだぞ、オグマに続くんだ!」
マルスの言葉を合図に、アリティア軍は橋を駆けわたり、城門を守る兵士たちと剣を交える! そしてついには城門を打ちやぶり、オルベルン城下へ!
「……ラングなどに仕えたばかりに、哀れ」
ジェイガンは、トラースの遺体に向かってつぶやいた。
そのトラースの横には、星のかけらが一つ、転がっていた。
◆**『星のジェミニ』を入手した。星のかけらリストにチェックする。経験値にプラス3して**

……**382**へ

273

マリクは氷のブレスをかわしながらエクスカリバーの魔法を唱えた。マリクの素早さに氷

竜はイラ立ち、今までで一番大きな叫び声をあげた。その瞬間、真空の刃が氷竜を直撃！
あまりの衝撃に氷竜は体を硬直させた。

➡341へ

274

「うわちちち！　お、おのれ〜〜〜」
リンダの手から放たれたまっ赤な炎が、ガイルを一飲み！
さあ、最後のとどめは？

●ドーガ……………………401へ　●オグマ……………………378へ

275

時折吹きだす溶岩に気をつけながら、マルスらは進んだ。
と——。やがて、大きな扉の前に出た。
「やった、ここから外へ出られるんだ！」
チェイニーが手を叩く！　しかし、その頭上には飛竜が！
「どうしますか？　魔法で先制するか、傷ついた者の回復を先に行うか……」
ジェイガンが、マルスに向かってつぶやいた。

◆ケにチェックして

●マリクの魔法で先制……………………………………235へ
●マリーシアにライブをかけてもらう……………………143へ

276

と、そのとき、ナバールがマルスを呼び、持っていたサンダーソードを手渡した。
「俺は銀の剣もマスターソードも持っている。これは、王子が持っていたほうがいいだろう」
マルスは、ナバールの好意をありがたく受けることにした。
◆ナバールの『サンダーソード』をマルスの装備表に移動させて……………455へ

277

星のかけらがすべてそろったことを確認したガトーは、マルスに一つの宝玉を手渡した。
「ガトー様、こ、これは!!」
「そうじゃよ、闇のオーブに唯一勝つことができる光のオーブじゃ。これをマルス、そなたに預けよう。」
さらにガトーは、十二個の星のかけらを甦らせて星のオーブを作りだし、これを授けた。
「ガトー様、これは神竜族の大切な聖玉なのでは……。なぜ僕などに……」
◆『光のオーブ』と『星のオーブ』を入手した。オーブリストにチェックして　…294へ



278

民家の中では中年の男が一人、ちょうど昼食をとっているところだった。
「カダイン魔道軍が帝国軍についたって？　そうか……いや、魔道軍を指揮しているのはエルレーンて若者さ。悪いヤツじゃないんだけど、ひねくれもんでね。好敵手のマリクのことでひがんでるって噂さ。そうだなあ、あいつを押さえられるのはウェンデル司祭ぐらいかなあ。お、よかったらおまえさんがたも一緒に食べてくかい？」
男は、興味深い話を聞かせてくれた。
食事の誘いは断り、今度は店へ。

⬇319へ

279

「マルス様、危ない！」
叫び声が聞こえたかと思うと、馬車で戦況を見まもっていたジェイガンが飛びだし、マルスを押したおした。反射的に今度はドーガが躍りでる。
敵は慌てて弓矢を放ったが、照準をマルスに絞っていたせいか、てんで的外れ。その隙にドーガの攻撃が炸裂した。
「ふう、間に合ったか……」
ジェイガンのため息と、敵の断末魔の悲鳴が同時に聞こえた。

◆経験値にプラス1して……………………366へ

280

祭壇に向かって突きすすんでくるジェネラルと魔道士。この二人を見て、ガーネフと側近たちは色めきたった。
ガーネフの側近二人がドーガめがけてボルガノンの呪文を呪えた。
そのうち一つは不発だったが、もう一つがドーガに直撃した。だがドーガはそのダメージをものともせず突進し、ダークマージの一人を銀の槍で貫いた！
●タにチェックがあれば……………400へ　●なければ……………307へ

281

まっすぐの通路をずんずん進んでいくと、行きどまりに、火竜がまっ赤な口を開けて待ちかまえていた！
◆カにチェックする。マリクが『ブリザーの書』を……
●持っていれば…………244へ　●持っていなければ…………11へ

282

氷の世界では炎系の魔法は役に立つに違いない。との判断から、エルファイアーの書を買うことにした。エルファイアーの書はマリクに持たせることにする。

◆クにチェックする。マリクの装備表に『エルファイアーの書』を加えて ……**306へ**

283

一晩休息をとったアリティア軍は、翌朝さっそく、ジェイガンを囲んで作戦会議。

「ラーマン神殿は、ここから見て、北北東にあります。そこに行く道は二つ。神殿まで続く深い森を横切るか、もしくは、北へ延びる平原を進み、東へとまわりこむか……ただし、森は盗賊や兵士くずれの巣、また平原の西にそびえる岩山には火竜、北西には大陸へとつながるカシミア大橋を守るアカネイアの勇者軍がひかえており、いずれも安全とは言えません。まずは、偵察の必要があるでしょう」

森には、オグマとジュリアンが向かうことになった。さて、平原ルートには誰を向ける？

●**パオラとリンダ** ……**269へ**　●**カチュアとセシル** ……**364へ**

284

最後のメンバーはジョルジュに決まった。マルスは仲間と共に城中を進み、敵の主力が

もっている大広間の扉の前に到着した。扉の向こうからは、戦いに備える敵兵の殺気がひしひしと伝わって来る。

⬇311へ

285

「ミネルバ様、ああ……御無事だったのですね！」
マルスと共に現れたミネルバに、パオラとカチュアが駆けよる。
「……きっと、きっとまた会えると信じておりました……」
普段は気丈な白騎士たちの目に、涙が浮かぶ。
「二人共、心配かけたな……エストもきっとどこかで生きている。そう信じてこの戦いを生きぬこう」
ミネルバは二人の肩に手をかけると、優しく言った。
「マリク、エルレーンら指揮者の真意がわかるまで、できれば無茶はしたくない。戦いは最小限にとどめ、速やかに神殿まで進むんだ！」
マルスの言葉を合図に、兵士たちはカダイン城の中へ。なお、激しい攻防が予想されるため、マリーシアは、シーダらペガサス部隊と共に城の外で待機。

●パワーリングがあれば……………320へ
●なければ……………………………303へ

286

カシミア大橋を渡っていると、前方から一頭の馬が駆けてきた。その背には、アリティア宮廷騎士団の一人・カインの姿が!!
「カイン！　無事だったのか!!」
マルスは馬を飛びおりると、カインのもとへ走る。
「王子も、よくぞ御無事で。……アリティアを守れず申し訳ありませんでした」
カインもまた馬を降りると、マルスの前に膝を折り深々と頭をさげた。みると、服はところどころ破れ、あちこちに血がにじんでいる。その様子から、アリティアでどんなひどいことが起こったのか想像できる。
「王子、ヤツらはすでに、橋の北のほうまで迫ってきております」
「大丈夫だよ、僕たちがきっと撃破してみせる！」
「いえ、それがだめなのです。ハーディンは不思議な力に守られていて手出しができないのです。とにかく、今は戦っても勝ち目がありません。北西の砦から対岸のカダイン砂漠へ逃げましょう！」
「そんな！」
「……王子、お気持ちはわかりますが、後方からは勇者部隊も迫っております。たしかにここは戦うときではありません。カインの申すとおり、ここは一時カダインに逃れましょう。

そこで兵を立てなおし、あらためてアリティアへ。王子、兵を退かせる勇気も必要ですぞ！」
ジェイガンの言葉に、マルスは辛い決断を下した。
「わかった。逃げるのは、悔しいけど……しかたない。全員、北西の砦へ！」

⬇325へ

287

「お兄ちゃん、地竜はわたしに任せてハーディンのところへ行って！」
チキはそう叫ぶと、地竜に向かって霧のブレスを吐いた。激痛にみもだえする地竜。
明らかにチキの力は地竜を圧倒していた。
「よし、ここはチキに任せよう。行こう、オグマ！」
マルスはオグマと共にハーディンのいる玉座の間に向かった。

⬇475へ

288

塔の中は薄暗く、外とはうってかわってひんやりとしていた。
皆が、久しぶりに体を休める中、ジュリアンが塔の中を探索しようと立ちあがった。
「あれ、ジュリアン怪我をしたのか？」
軽く足をひきずるジュリアンに、マルスが声をかける。
「なに、軽くひねっただけですから」と笑うジュリアンをマリーシアが止める。

「いけません。ほら、私に見せて！」
ライブの杖で、ジュリアンは回復。しばらくすると、彼のかわりに探索に行っていたナバールが聖水を見つけてきた。
◆『聖水』を入手した。アイテムリストにチェックして……**263**へ

289

いや、今のところ怪我人も出てはいないし、それよりも一行の武器を整えたほうが賢明にも思える。それに、この商人のあまりにも調子の良い台詞が、どことなく胡散臭さを感じさせたのも、マルスをより慎重にしたようだった。商人の誘いを丁寧に断り、マルスは早足に目の前の武器屋に入っていった。

⬇**185**へ

290

「くだらぬ感傷に浸っているなど、マルス殿らしからぬ行為ですな」
憎きラングのお出ましだ。
「グルニアの王子と王女は見かけませんでしたかな？」
「知りません！　我々が到着したとき、ロレンス将軍はもう、虫の息だった。詳しい事情など、僕が知るわけもないでしょう」

マルスはとっさに嘘をついた。彼の胸にはすでに、[illegible]ていたのだ。もちろんラングには、そんなマルスの心は読めない。

「くそ〜っ。遅かったか……。ロレンスめ、最後の最後まで余計なことをしてくれるわ。しかしマルス殿、そなたは裏切りとは無縁と信じる。よいですかなマルス殿、次なる目的地は海の向こうのマケドニア。あそこでも反乱が起き、たいへんな状況になっていると聞く。ハーディン皇帝の命令ですからな。すぐさま向かってもらいたい」

マルスの心には、なにかしっくりこないわだかまりが生まれていた。ハーディンは、本心から我々を戦いの最前線へ向かわせているのだろうか？　小さな疑問符が、彼の心の中を駆けめぐる。

●抵抗する……………324へ　●とりあえず黙って従う……………348へ

291

さて、話はアリティア軍に戻り——。

民衆の協力もあって、マルスたちはオルベルン城が見える、湖のほとりまで迫ってきていた。そこで本隊は城をめざし、まだ足を踏みいれていない北の森や平原には、偵察隊を出すことにした。

森にはカチュアとジュリアンを、平原にはドーガ、リンダ、それにゴードンだ。

「！　おいでなすったぞ！」
平原を、先頭を切って歩いていたドーガが足を止めた。ほどなくして、草むらの中から黒いマントをすっぽりとかぶった魔道士の一団が現れる。目には邪悪な光が!!
どう戦う？
●ドーガが盾となり、リンダが魔法を使い、後方でゴードンが援護……**330へ**
●ゴードンが弓で先制、リンダとドーガは二手にわかれて、襲いかかる……**342へ**

292

ゴードンとライアンが弓をかけるが、敵までは距離がありすぎるため、なかなか敵に当たらない。
そうこうするうちに、トラースの砲撃がマルスたちの側で爆裂！
「このままじゃ、らちがあかない。よし、作戦変更、敵の懐に飛びこむぞ！」
◆ウにチェックして……**272へ**

293

オグマが剣を抜くと、あっという間にシーフの一人を切りたおし、さらに返す刃で、別の一人の体をまっ二つ！

オグマはさっと剣を収めると、なにごともなかったかのように隊列に戻
「……さすがだね。彼が味方でよかったよ」
マルスの言葉にジェイガンが深くうなずいた。
ラーマンシーフは宝箱を持っていた。その中には傭兵のクラスチェンジに必要な勇者証が入っていた。
さっそくそれで、オグマが勇者にクラスチェンジ。銀の剣が使えるようになった！
そこで、彼は持っていた鋼の剣を「これは貴様に譲ろう」と、ジュリアンに渡した。

◆オグマが『勇者』にクラスチェンジした。装備表の職業にチェックする。『鋼の剣』をオグマからジュリアンの装備表に移動させる。経験値にプラス2して**……………376へ**

294

「よいかマルスよ、そなたの持つ紋章の盾を見よ。形こそが変わっておるが、それはまさしく封印の盾。地竜を封じる力を持った盾じゃ。まだまだ完全な形ではないが、五つのオーブをすべて集めれば、必ず封印の盾は甦る。そしてそれができるのはお主だけなのじゃ」
ガトーはマルスに封印の盾にまつわる話を聞かせた。
かつて封印の盾には五つのオーブがはめられ、それにより地竜は封じられていた。
ところが、ある時一人の盗賊がこの盾を盗みだし、五つのオーブを取りはずして、売って

しまったのである。
盗賊はその金で強力な軍団を編成し、その軍事力で王国を築きあげ、自ら王におさまった。
その国の名はアカネイア。盗賊だったアカネイアの初代王は、その盾に書かれていた炎の紋章をアカネイアの紋章にした……。
「アカネイアの初代の王が盗賊だったなんて……」
初めて聞く話にマルスは困惑の色を隠せない。

⬇334へ

295

灼熱地獄の中を、もくもくと進むマルスたち。

●ケにチェックがあれば……256へ　●なければ……275へ

296

武器屋に入ろうとしたマルスたちに、小道に潜んでいた反乱軍の兵士が襲いかかってきた！
しかし、村人からの情報で用心していたマルスらは、慌てることなくそれをかわす！
「王子、覚悟――――！」
奇声をあげて剣を振りまわす敵とマルスの間に、ジュリアンがさっと割って入ると、手にした剣で敵の胸を切りさいた！

◆経験値にプラス1して……323へ

297

先程のトラースの砲撃で軽傷を負っていたマルスは、さっそく傷薬を一つ飲んだ。
「……よし、待ってろよラング！」マルスの体に闘志がみなぎる。
◆ウのチェックを消す。アイテムリストから『傷薬』を一つ消して……468へ

298

アランたちは槍を手に、ドラゴンナイトの前に躍りでた。先手必勝とばかり、ビュン、ビュンと槍攻撃をしかけるが、これをことごとくかわす敵は、なかなか手強い。その上、頭上から次々と槍の攻撃をしかけてくる。
「うっ！」
敵の執拗な攻撃に手間取っている間に、カチュアが肩口をやられた。
「大丈夫か？」と問いかけるアランの声に、「これくらいの怪我、日常茶飯事よ」と、強がりを言ってはいるが、見た目よりも傷は深そうだ。
アランは、後方からやってくる歩兵隊を確認すると、騎馬隊たちに撤退の命令を出した。
「飛行系の敵は弓矢に弱いはずだ。ここは全力で逃げ、マルス様たちに任せたほうが無難だ」

アランの言葉に、逃げの体勢を取る騎馬隊。
マルスはその様子を確認すると、自らの率いる歩兵隊を振りかえった。

◆Qにチェックをして……………267へ

299

「うむ、万能の傷薬と聞いたからには、買っておきたいのはやまやま。が、あいにく先ほど武器をそろえたもので、持ちあわせがない。もしも、あなたがたいへん徳のある方で、それでもこんな私たちに薬を持たせてやりたいとおっしゃるなら、その申し出、有りがたく受けとらせていただくが……」

軍師のジェイガンが、わざと渋い顔をしながらそう言うと、商人の顔から笑みがさっと引き、逃げるように反対方向に駆けだしていった。皆の間に、笑いが広がる。

しかし、マルスはすぐに表情を引きしめた。どうしても、ラングのことが気にかかる。

「とにかく、残るたった一人の少女、マリーシアという娘を訪ねてみよう」

マルスはそう言うと、皆を率いて村はずれへと向かった。

⬇321へ

300

「なあんだ、怪我人はいないの？　それなら、別の使いかたをしましょう」

本来、怪我を癒すものだったらしい魔法は、リンダの手によって、強引に向きを変えられた。
「ええと……うん。こうして、ああすれば……えいっ！」
ボムッ！
突然、目の前に現われたのは、なんとキルソード!! 必殺の一撃が出やすい貴重な剣だ。
「これは、やっぱりマルス様が持ってるべきね。明日はいよいよマケドニア城下でしょう？
私も手伝わせてもらうわね。じゃ、お休みなさ～い！」
リンダはそう言うと、呆気にとられている皆を尻目に、一人とっとと寝入ってしまった。
「カチュアといい、リンダといい、さすがは暗黒戦争を戦い抜いた猛者ですな。いや、失礼」
アランの言葉を聞いたカチュアは、猛者とはなによとばかりに、目を吊りあげた。
マケドニアの夜は、穏やかに更けていく。
しかしマルスは、たった今手にしたばかりの紋章の盾に、いいようのない不安感を抱いていた。

◆マルスの装備表に『キルソード』を加えて……………………34へ

301

なんとか砂漠を横切り、村にたどり着いたマルスたち。そこで、マルスを思いがけない人物が待っていた。そう、マケドニアの王女、ミネルバだ！

「ミネルバ王女、捜しましたよ！　どうしてこんなところに？」
「兄のミシェイルが助けてくれたのです。そして、マルス王子に力を貸せと……」
「そうですか、よかった……カチュアやパオラもとても心配していたんですよ」
さらにうれしいことには、ミネルバは星のバルゴを持っていた。
さて、先を急ぐマルスたち。ここで悠長なことをしている時間はない。
次は？
◆『星のバルゴ』を入手した。星のかけらリストにチェックして
●民家へ……………278へ　●店へ……………………319へ

302

装備を整えたマルスたちは、村の外で待つ本隊に戻ると、兵をあげた。
●Fにチェックがあれば……………134へ　●なければ……………………6へ

303

暗闇からふいに襲いかかってくる魔道軍兵士！　彼らの繰りだす炎や氷の魔法にてこずりながらも、神殿をめざす！
その頃、城の奥にある神殿では二人の若者、マリクとエルレーンが言いあらそっていた……。

◆経験値にプラス3して……………………337へ

304

偵察を待ちゆっくりと兵を進める本隊は、小さな村にさしかかった。そこで、さっそく情報収集をと、民家の一つを訪ねる。

「ラーマン神殿ねえ……あの神聖な神殿も、今じゃ盗賊ども、ラーマンシーフに荒されちまって。まったく罰あたりなことだよ」

「ええかね、神殿前の森には近づかんほうがええ。盗賊共がうじゃうじゃしとるゾイ」

家の中で糸を紡いでいた老夫婦が、マルスらに忠告。

民家を出たところに、森に偵察に行っていたオグマたちが戻ってきた。

「森には目障りな盗賊らがうろついてます。が、森を突っきるのが神殿へは一番の近道かと」

さらにマルスらは、平原ルートの偵察隊を待ったが、彼女たちはなかなか戻ってこない。

「……このままでは時間がもったいない。とりあえず本隊を出発させましょう！」

ジェイガンにうながされ、マルスらはラーマン神殿をめざすことにした。

さて、どちらのルートから？

●平原からまわりこむ……………322へ
●森を突っきる……………336へ

305

「マルス様、危ない！」
馬車の中で戦況を見まもっていたジェイガンが事態に気づき、大声で叫んだ。しかし、当の本人は、先ほどラングの近衛兵にやられた傷が癒えず、素早く動けない。
「ええい、この身がもどかしい！　誰か、マルス様を！」
その言葉に、弾かれたように躍りでたのが、ドーガだった。
◆バトル対戦表で戦います。ドーガはA、相手はC。相手より数値が……

●上……………………345へ　●下……………………326へ

306

店を出て、しばらく歩くと前方に神殿が見えた。
「おー」と皆が声をあげた時、神殿を覆い隠すように数匹の氷竜が現れた！
「現れたな……」
ナバールが薄く笑い、攻撃をしかけようと身がまえる。オグマとリンダそしてマリーシアが後に続いた。
あと一人出撃させるとしたら……。

●魔道士のマリク……………327へ　●スナイパーのゴードン……………335へ



307

残るはあと一人！　ドーガは銀の槍を引きぬくと、もう一人のダークマージのほうに向きなおった。

その時……。

背筋に悪寒が走った。いやな予感がして振りむくと、さっき倒したはずのダークマージが立ちあがり、ドーガにボルガノンの呪文を唱えている。

「あそこのダークマージがリザーブの呪文で回復させているんだ！」

マリクが指さす方向を見ると、遠く離れたもう一つの祭壇にダークマージの姿が見えた。

ヤツを倒さねば、勝ち目はない！　焦るドーガ。

だがマルスがすでに手を打っていた。離れた祭壇に向かって、シリウスをワープさせていたのである。

⬇375へ

308

リンダは、オーラの光をガイルに向けて放った！　が、ガイルはとっさに味方のバイキングを盾にし、身がわりに！

「仲間を盾にするなんて、なんてヤツ！」

「がはは！　残念だったな、お嬢ちゃん！　さあ、死んでもらおうか!?」

危機一発のところで、ペガサスに乗ったパオラがリンダをすくい上げ、空へ！

「誰か!! ガイルにとどめを!!」

●マルスがとどめをさす ……………332へ　●オグマがとどめをさす ……………378へ

309

塔の中は薄暗く、外とはうってかわってひんやりとしていた。皆が、久しぶりに体を休める中、ジュリアンは塔の中を探索。しばらくすると『ブリザーの書』と『聖水』を見つけてきた。

◆『聖水』を入手した。アイテムリストにチェックする。マリクの装備表に『ブリザーの書』を加えて ……………………………………263へ

310

「この私に挑戦するとは百年早い！」

勝ちほこったハーディンが、グラディウスをオグマの頭上に振りおろした。オグマはこれを間一髪よけたものの、体勢を崩してそのまま床に転がってしまう。

「とどめだ！」

再び頭上にグラディウスが振りおろされる！

オグマは無我夢中で体をひねり、剣をハーディンに向けて投げつけた。
ガキッ！　グラディウスの穂先がオグマの目の前で床に突きささった。
これまでか……。観念して目を閉じるオグマ……。
しかしなにもおきない。ゆっくり目をあげて見上げると、ハーディンの胸を銀の剣が貫いていた。

↓271へ

311

マルスたちが大広間に突入しようとした瞬間、扉が開き、アカネイアの兵士たちが飛びだしてきた。これは人数の少ないマルスたちには、かえって好都合だった。
狭い廊下では、大人数の部隊は動きがとれない。一度に突撃できる人数はせいぜい三人だからだ。そんな状況の中で、敵兵の主力である勇者が二人、マルスたちに襲いかかってきた。
「ここは任せろ！」
勇者二人をかかんに迎えうつは、マスターソードを構えたナバール！
この肉厚の剣を軽々と振りまわすナバールは、すさまじい勢いで斬りかかり、二人の勇者を圧倒して後退させた。
ヒュン！　同時にゴードンが銀の矢を打ちこんだ。勇者は喉を貫かれ、その場で倒れる。
続いて魔道士のリンダがオーラの書を唱えると、聖なる光が勇者を包みこみ、すさまじいダ

メージを与えた。耐えきれず、その場に倒れふす勇者。

仲間二人を倒された帝国軍であったが、めげることもなく突撃を敢行する。ナバールはこの怒濤の攻撃に一歩も引かず、ただひたすら剣を振るいつづけた。自身もいくつかの傷を負いながら、次々と屍の山を築いていく！

「！」

鬼神のごとく奮戦するナバールの剣が一瞬止まった。それは敵兵の中に見なれた顔を一つ見つけたからにほかならない。その顔とは……。

「アストリアか……」

かつて共に戦ったアカネイアの勇者アストリア……。思わぬ強敵を前にしたにも関わらず、ナバールの口の端には不敵な笑みが浮かんでいた。

戦いに生きる傭兵の性とでもいうべきか……。

●コにチェックがあれば……361へ　●なければ……340へ

312

その時、突然、マルスの耳に激しい羽ばたきの音が入った。飛竜が飛来したのだ！

「新手か！」

剣を握る指に力が入る。

だが、よく見ると、それはチキが変身した飛竜だった。
「おにいちゃん、外はあらかた片づいたから加勢に来たわ！」
チキは移動力の優れた飛竜に変身して、マルスの加勢に駆けつけたのだ。しかし飛竜の姿で戦うと戦闘力で地竜にひけをとる。そのため、チキは竜石の力で飛竜から神竜へ再変身をとげ、地竜と向かいあった。

⬇**287**へ

313

「ナバール、この剣は君が！」
「いや。その剣は軍の長であるあなたにふさわしい。あなたなら使いこなせるはずだ。皆のためにもあなたが持つべきだ」
「……わかった!!」
ナバールの強い勧めもあり、サンダーソードはマルスが装備することになった。

◆マルスの装備表に『サンダーソード』を加えて ……………**286**へ

314

迫りくるマルスを見たウィローは、とっさにメティオの魔法を唱えた。
しかしシスターのマリーシアが、すでにマルスにマジックシールドを施していた。

シールドに守られたマルスは、メティオの魔法による隕石の直撃をまぬがれ、難なく山中へたどり着いた。

⬇389へ

315

チキは神竜族の血を引く者として、育ってはいけない宿命のもとに生まれていた。いつ凶悪な竜に変貌し、人間に敵対する存在になるかわからなかったからだ。ガトーはそのためチキに長い眠りにつくことを命じたのである。成長しなければ、チキは愛らしい優しい女の子のままなのだ。

「だが、封印の盾を蘇らせることができることがわかった今は別だ」

どこからか、ガトーの声が響きわたった。

「封印の盾の力さえあれば、チキは今の理性を保っていられる。マルス王子、チキの力をオーブ探しに役立てるがよい。それがまたチキを守ることにもなるのじゃ」

マルスはガトーの言葉に黙ってうなずいた。そしてチキの肩に優しく手をやる。

「寂しかっただろうが、これからはいつも一緒だよ」

「本当、おにいちゃん！」

チキを仲間に加えたマルスたちは、ガトーの指示に従い、氷の神殿内の竜石屋に向かって歩きだした。

⬇351へ

これからの過酷な戦いを考えて、傷薬を買うことにした。

◆『傷薬』を十個入手した。アイテムリストにチェックして

●ウにチェックがあれば……297へ　●なければ……468へ

317

「寒くて震えてたけど、一汗かいてしまったな」

そう軽快に言うのはオグマだった。一行は笑いながら氷の神殿に入っていった。天井や床や壁、あらゆる装飾品がクリスタルガラスのように光り輝いている。靴音が響く長い長いホールを抜けると、三つの塔が視界に入った。中央に一塔。その両側にも一塔ずつ立っている。

「ここの位置から見て東と西といったところか……」

三つの塔を見あげながら、マルスが静かにつぶやいた。

さて、どの塔に向かう？

●東の塔へ……368へ　●中央の塔へ……402へ

●西の塔へ……380へ

318

マルスは傷薬をジェイガンに一つ飲ませることにした。
「そんな、わしは大丈夫ですぞ！」
そうはいうものの、高齢の彼にとってこの熱さはかなりこたえているはずだ。
「ジェイガン、命令だ。飲んでくれ」
マルスに言われ、ジェイガンは渋々薬を飲む。
「さあ、まわれ右！　さっきのT字路へ戻ろう」
◆アイテムリストから『傷薬』を一つ消して……………………96へ

319

武器屋は、こじんまりとしていたが、いくつかの品がマルスの目をひいた。
１５００ゴールドの銀の槍と、２０００ゴールドの銀の剣、それに２５００ゴールドの銀の弓。所持金は５０００ゴールドあったが、マルスはナバールのために銀の剣を買うだけにしておいた。傭兵の身では銀の剣は扱えないが、どこかで勇者証を調達すれば……。
「それじゃナバールは、近々勇者にクラスチェンジさせるのね？」
シーダの問いにマルスは軽くうなずくと、皆を率いて武器屋を出た。
◆ナバールの装備表に『銀の剣』を加えて……………………331へ

320

暗闇からふいに襲いかかってくる魔道軍兵士！　しかし、パワーリングに力を借りたマルスは、敵をものともせず皆を率いて神殿をめざす！

その頃、神殿では二人の若者、マリクとエルレーンが言いあらそっていた。

◆経験値にプラス4して……337へ

321

男の言葉どおり、村落が消えかかったところに、ぽつんと一軒の小さな家が見えてきた。明かりは消え、人の気配がないようだが、もしかしたらラングを恐れ、息を殺しているのかもしれない。

マルスは、相手を驚かせないよう、そっと扉を叩きながら言った。

「もしもし、中にいらっしゃるなら答えてください」

と、扉が細く開き、老婆が不安げな顔をのぞかせた。

「なんのご用でしょう？　村にはもう、女などおりません。マリーシアはまだ十歳のいたいけな子供。どうか、どうかご慈悲を……」

「ちょっと待ってください。僕はアリティアの王子マルスです。ラングの真意はともかく、我々は、村の女をどうこうしようという意志はまったく持っていません。ただ、状況がどう

なっているのか、少しでも話を聞きたいだけなのです」
「この村の状況は、ご覧のとおりです。ほかにお話することはなにも……」
老婆は、そう言って扉を閉めようとした。すると、その背後から一人のシスターが!!
「待って、おばあさま。このかたの言葉には真実が見えます。私がご説明を」
事情を聞けば、このシスターがマリーシアという娘で、歳を偽り、ラングの目をくらませていたとか。たしかにその容姿といい、しっかりした物言いといい、十歳には到底思えない。
「あなたは、スターロード・マルス様。間違いなく信ずるに値するおかたです。この村でラングに怯えて暮らすのはもうたくさん。どうか、私にお供させてください。ライブの杖しか持ってはおりませんが、なにかのお役に立てることもあるかと……」
マリーシアの言葉に、マルスは力強くうなずいた。マリーシアは心配顔の老婆を説得して旅支度を整えると、アリティア軍の一行に加わった。
「マリーシア、僕らはグルニアの砦へ行き、かつての友人だったロレンス将軍と話をするつもりなんだ。でも、途中で野蛮な山賊に出会う危険もある。いいかい、ドーガの側を、決して離れないようにね」
強靭な体力を誇るアーマーナイトのドーガは、マルスの言葉を受け、胸を張ってマリーシアにあいさつをした。

⬇344へ

322

「キエエエ！」

平原を進む本隊の前に、草むらからアカネイアの兵士が槍を手に現れた！

とっさに、ドーガがマルスをかばうようにして前へ出ると、すかさず銀の槍で応戦！　力で勝るドーガが、ついに敵を突きたおした！

「おそらく、橋を守る勇者軍の偵察隊でしょう。この男が戻らなければ勇者たちに我々の存在が知れるのも時間の問題。今、あの隊と戦うことになれば、よくて引きわけ悪くて……」

「わかった、ジェイガン。……みんな、進路を変更する！　森を抜けて神殿をめざすぞ！」

◆Iにチェックする。経験値にプラス1して……………………336へ

323

「いらっしゃい……ほほお、あんたらアリティア軍か。まあ、金さえ払ってくれりゃ俺は、誰にだって武器は売るがね。アリティアだろうと、反乱軍だろうとさ」

店の奥で商品の手入れをしていたごつい男が、マルスたちを見て言った。店主の態度は気に入らなかったが、武器はそこそこそろっていた。そこで、彼らは800ゴールドの鋼の槍と、600ゴールドの手槍を買うことにした。

「王子、あと600ゴールドありますが、どうなさいますか？」と、ルーク。

「うーん、どうしたもんだろうか……？」
マルスは、店の品物を、もう一度じっくり見まわした。

◆セシルの装備表に『手槍』、ルークの装備表に『鋼の槍』を加えて

●手槍をもう一本買う……405へ　●傷薬を六つ買う……438へ

324

「ラング将軍、あなたの話は聞けない。今すぐここに、ハーディンを呼んでもらおう」
マルスは、そうラングに詰めよった。すかさずラングの近衛が剣を抜く。
「お待ちを！……つっ！」
とっさに間に割って入ったのは、軍師のジェイガンだった。剣が彼の腕をかすめ、鮮血が飛びちった。
「ジェイガン！　大丈夫か!?」
「なんの、これしきの傷。しかし、マルス様。ここは私の願いを聞いてはくださいませんか。どうか、押さえて。お心のうちはどうであれ、とにかく反乱は鎮めなければなりません」
ジェイガンにそう悟らされ、マルスは悔しさを噛みしめながらうなずいた。

◆Dにチェックして……348へ

325

橋を渡っている途中に、盗賊の一団が現れた！
●現在のレベルが4以下なら……**356へ**　●5以上なら……………………**339へ**

326

ビュ――――ン。
敵の矢は、しかし、虚しく宙を舞っていった。狙いをマルスに絞っていたせいか、照準が狂ってしまったのだろう。ここぞとばかりにドーガが攻撃体勢を整えたが、敵の姿はもはや視界にはなかった。
「くそ～っ、逃げ足の早いヤツめ……」
しかし、マルスを襲ったピンチは、どうにか切りぬけることができた。

⬇366へ

327

マリクはオグマたちの前へサッと出た。氷竜は赤い目をギラギラとさせ、長い首を前後に振ってマリクを威嚇した。

⬇358へ

328

あと一歩！　その思いが、戦士たちをふるいたたせた！
あたり構わず火炎を吐きつける飛竜の頭上に、ミネルバが、パオラが、そしてカチュアが飛ぶ！　さらに下からはジョルジュ率いるゴードン、ライアンの弓兵たちが矢で応戦！
最後に飛竜は小さな火をひと吐きすると、そのまま砂漠に落下した。
そしてその横には、マルスたちに倒されたバーサーカーの骸が転がる。
バーサーカーは、マスターソードを持っていた。さっそくナバールに装備させる。
◆ナバールの装備表に『マスターソード』を加える。経験値にプラス2して　……309へ

329

敵を見すえたマルスは、レイピアを抜いた。が――。
「この勝負、お預けとしよう」
さらりと身をかわしたドラゴンナイトは、そう言うと高々と舞いあがっていった。
「マルス様、先ほどの怪我がこたえているようですね。でも、もうご安心を。ヤツら、傷薬を隠しもっていたんですよ」
弓矢でドラゴンナイトをしとめたライアンが、思わぬ戦利品をマルスに手渡した。
「ふう、力が蘇ったようだ」

薬を飲んだマルスの傷が、たちまちのうちに癒える。これで正念場を迎える準備は整った。

◆Nのチェックを消して……………………………391へ

330

魔道士たちの指先から、渦巻く炎が繰りだされた！　ファイアーよりも強い、エルファイアーの魔法だ！

ドーガは、リンダとゴードンを守るようにその灼熱の炎に向かって仁王立ち！

「今だ、リンダ、ゴードン！」

ドーガが膝を落としたのと同時に、術をかけ隙が出来ていた敵に向かって、リンダのオーラが炸裂！　おいうちをかけるように、ゴードンの矢が敵の額を射る!!

「ドーガ、大丈夫だった？」

慌てて駆けよるリンダにドーガは、

「生まれつき、体だけは頑丈にできているんでね」と、すすけた顔で笑うと、魔道士の持っていたエルファイアーの書をリンダに手渡した。

「リンダ、これ、使いこなせるかい？」

「もちろんよ！」

リンダは胸を張ってそう言うと、強力な火炎魔法を放つエルファイアーの書をしまった。

◆リンダの装備表に『エルファイアーの書』を加える。経験値にプラスして423へ

331

さて、そのころジェイガン率いる本隊はというと、敵意をむきだしにしたカダインの軍勢に、苦戦を強いられていた。

マリーシアやウェンデルなど防御力の低い者を守りながら前進を続けていたが、守りに徹しているだけの状態には、そろそろ限界がきていた。

⬇353へ

332

「今度は僕が相手だ！」

マルスは剣を構えると、ガイルに切りこんでいった！

「へん、ひよっこが！」

ガイルは鬼のような形相でマルスに斧を振りおろす！　それを、右に左によけていたマルスだったが、石畳につまずき、体勢を崩してしまった！

次の瞬間、右肩に激痛が走る！

見ると、斧で鎧がざっくりと切られてしまっている。

「さよなら、王子さん」ガイルはにやりと笑い、再び斧を振りあげた。

「マルス様っ！」ジェイガンの悲鳴にも似た叫びがあたりにこだまする！
が！
「な、なんのこれぐらいの傷！」
マルスは、顔をあげると、石畳に転がったまま、油断しきっていたガイルの喉もとに剣を突きたてた！
「うがあああ！」
断末魔の悲鳴をあげてガイルは後ろに倒れ、やがて動かなくなった。
「王子、肝が冷えましたぞ。このジェイガンの寿命を縮めるおつもりですか……」
慌てて駆けよってきたジェイガンが、マルスに手を差しのべて言う。
「ごめんよ。僕の腕もまだまだだな」
マルスがその手を取って微笑んだ。
戦いがすみ、城の中を探索している途中で、ジュリアンが宝箱を二つ見つけだした。小さな箱には傷薬が一つ、大きな箱には銀の斧が三本も入っていた。
「銀の斧は武器屋に売ったらいい金になるぜ！」
傷薬は、さっそく傷ついたマルスに使われた。

◆**『銀の斧』を三本入手した。アイテムリストにチェックする。経験値にプラス2して**

……**357**へ

333

あまりの熱さに目眩を感じながらも、今来た道を戻ると、さっきの T 字路へ。

◆Vに一度もチェックしていなければチェックして……………………96へ

334

「マルス、驚いている場合ではないぞ。その盾が壊されてから六百年が経つ。そろそろ封じられていた地竜が目を覚ます頃じゃ。急いで東の塔まで行け！　そこにはおまえの力になる人物がいる！」

ガトーに指示されたマルスは、慌てて東の塔へ向かった。扉を押してみると、鍵が開いている……。

中に入ってみると、そこには寝ぼけまなこの女の子がポツンと立っていた。先の暗黒戦争でアリティア軍と共に戦った神竜族の王女チキだ。

「チキ、チキじゃないか。会いたかったよ！」

「マルスおにいちゃん!?」

チキはガトーの命によって、マルスに再会するまで眠りつづけるという運命を受けいれていたのである。彼女は眠っている間、ずっと竜に成りかわっていく夢にうなされていたという。

⬇315へ

335

ゴードンは背中の袋から銀の矢をひき、弓をぐいと引いた。そして——。
「みんな、さがってろ」
叫びざま、氷竜に狙いをつける。
ビュン！
銀の弓はものすごい勢いで放たれ、みごと氷竜の体に突きたった。

◆Xにチェックして……………………358へ

336

昼なお暗い、樹海のような森をアリティア軍は突きすすむ。
ほどなくして、怪しい気配が……。
「上だ！」
オグマが叫ぶ！
木の上から短剣を振りかざして現れたのは、ラーマンシーフ！　木の影からも一人！

◆この敵と戦うのは……

●オグマ……………293へ　●マルス……………355へ

337

「エルレーン、帝国軍に荷担するのはやめてくれ、カダインは中立国のはず！」

青いローブをまとったマリクが、エルレーンに追いすがり、抗議。正義感あふれるまっすぐな瞳に、微かに少年の匂いを残した面ざし――マルスの幼なじみでもあるこの魔道士は、修行を積むために、このカダインに身をおいていた。

「うるさい！　……マリク、ついに決着をつけるときがきたようだな」

エルレーンは鋭い目でマリクをにらみつけ、言った。赤いマントに、金色の髪がよく映えている。しかし、美しいその横顔は憎しみに燃えていた。

「待て、エルレーン。なぜ戦わねばならない。僕たちは共にウェンデル先生のもとで修行をした仲間だろ？　なぜ僕を憎む！」

「……俺は貴様より早く先生の弟子になり、力もあった。それなのに先生は、後継者の証しともいうべきエクスカリバーの書を貴様に与えてしまった。それまで俺は、先生の後を継ぐのはこの俺だと信じていたのに……俺の気持ちが貴様にわかるか！」

「そうだったのか……でもエルレーン、僕は後継者になるつもりはない。ここで学び終えたら、アリティアに帰るつもりだ。あそこには、生涯をかけて守りたい人がいるんだ……それは先生も御承知のはず」

そう言ったマリクの胸を、エリスの面影がよぎる。

そこへ、報せが舞いこんできた！
「アリティア軍が侵入してきました！」
「なんだと〜〜〜!?　さてはマリク、貴様が手びきしたな！」
「そんな、誤解だ！」
「いいや、もう聞く耳もたぬ……おまえとの対決はお預けだ。アリティア軍を全滅させ、その後にゆっくりと料理してやる！」
エルレーンはマントを翻し、神殿を飛びだしていった。マリクもまた、修行仲間と従兄弟との対決を阻止するため、神殿を後にする！
➡388へ

338

アリティア軍は手わけをして、砦の中を探索した。しかし——。
「王子、敵はすべて逃げましたが、ミネルバ王女の姿が見あたりません！」
ジェイガンが残念そうに、マルスに報告に来た。
「そんな、ここに捕らわれていたんじゃないのか？」
「……皆で、くまなく捜したのですが……」
ジェイガンに続き、カチュアとパオラが残念そうに砦から出てきた。
「……彼女のことだ、きっとどこかで生きている。そう信じよう！　もちろん、マリア、レ

ナと同じように手をつくして捜すつもりだ」
マルスは、肩を落とす二人をはげました。と、そこへ、見張りのルークが駆けてきた。
「王子、ラング将軍がまもなくやってきます！」
「なに？　ヤツめ、またなにか無理を押しつけにきたのでは……」
ジェイガンの心配は的中した。
ほどなくしてやってきたラングは、馬から降りることもなく、マルスを見おろすと言った。
「ほほお、さすがはマルス殿。たいしたものだ、ご苦労、ご苦労。マケドニアは我らが預かろう、貴公には新しい任務が待っておるのでな」
「ラング将軍……今度はいったいなにをせよと？」
ラングの言葉にマルスの顔がパッと輝く。
「なに？　そうか、あの子たち無事だったのか！」
「実はな、グルニアの王子と王女の行方が、わかったのだ」
「……ヤツらは南にあるホルム海岸に逃げこんだらしいのだ。貴公の任務とはほかでもない。あやつらを捕らえるのだ！　反乱の種は根絶やしにせねばな」
「そんな！」
ラングの言葉にマルスは思わず叫んだ！
「ふん、わしの命令はハーディン様の命令……それにそむくというのか？」

●この無礼な将軍に、マルスは？
●抗議する……………………365へ　●耐える……………………461へ

339

「おまえたち、アリティアの！　……あのマケドニアバイキングやラーマンシーフらを全滅においこんだ……や、野郎ども逃げろ！」
盗賊の頭らしき男が合図すると、一同まわれ右でマルスたちの前から逃げだした。盗賊の去った後には皮袋が落ちており、中から星のかけらが出てきた！
◆『星のレオ』を入手した。星のかけらリストにチェックして……………………390へ

340

ナバールのマスターソードとアストリアのメリクルソード。二人の勇者の剣が今まさにぶつからんとしたその時！　風きり音と共に一本の矢が飛来し、二人の間に突きたった。
「アストリア、剣を引け！」
聞き覚えのあるその声に、思わず動きを止めるアストリア。
「ジョルジュ……。この裏切り者が……」
二人の間に矢を放ったのはスナイパーのジョルジュだった。ジョルジュとアストリアは、

アカネイアのかつての仲間同士。アストリアは突きさすような視線でナバールをにらみつけた。

↓469へ

341

手傷（てきず）を負（お）った氷竜（ひょうりゅう）だったが、なかなかとどめを刺（さ）すことができなかった。安易（あんい）に近づいたナバールは、逆上（ぎゃくじょう）した氷竜の尻尾（しっぽ）による一撃（いちげき）をもろに受け、氷の大地に叩（たた）きつけられてしまった。

「なかなか手ごわい！」

マルスとゴードンは、同時に同じ言葉をつぶやいていた。手傷を負（お）った氷竜は狂（くる）ったように暴（あば）れ、氷のブレスをまき散（ち）らす。

「わっ、気をつけろ！」

かろうじてブレスをさけるマルスとゴードン。そこへリンダとオグマが援護（えんご）にかけつけた。四人はそれぞれの武器でいっせいに攻撃（こうげき）を開始。連係（れんけい）プレイがうまくいくと氷竜はあっけなくやぶれ去（さ）った。

マルスたちは、氷竜の隠（かく）し持っていた２０００ゴールドを入手した。

◆経験値にプラス５して……………………………317へ

魔法を繰りだそうと、手を高々とかざした魔道士に対して、三人はパッと三方向に飛んだ！

◆バトル対戦表で戦います。マルスたちはB、相手はA。相手より数値が……

●上……374へ　●下……396へ

343

それは、怪我人の傷を一気に癒してくれる、貴重な魔法だった。リンダが魔道書を読みあげると、傷ついた者の痛々しい怪我が、あっという間に消えさる。

「明日はいよいよマケドニア城下でしょう？　私も手伝わせてもらうわ。じゃ、お休み！」

リンダはそう言うと、呆気にとられている皆を尻目に、一人とっとと寝入ってしまった。

「カチュアといい、リンダといい、さすがは暗黒戦争を戦い抜いた猛者ですな。いや、失礼」

アランの言葉を聞いたカチュアは、猛者とはなによとばかりに、目を吊りあげた。

マケドニアの夜は、穏やかに更けていく。

しかしマルスは、たった今手にしたばかりの紋章の盾に、いいようのない不安感を抱いていた。

◆A、G、Dにチェックがあれば、すべて消して……34へ

344

案の定、グルニアの砦を目前にしたマルスたちは、あたかも砦の守り主とでも言いたげに身がまえている、五人の山賊と対面するはめになった。

山賊を片づけるため、マルスは四人の精鋭を選んだ。パラディンのアランにアーマーナイトのドーガ、アーチャーのゴードン、そしてソシアルナイトのルークの四人だ。

が、もしもの時の安心の切札として、素早い攻撃が得意なセシルか、回復の杖を使えるマリーシアのどちらかを加えたい――。

マルスは二人を交互に見つめた。

●マリーシアを加える……363へ
●セシルを加える……386へ

345

ビュ――ン。

ドーガに気づいた敵は、慌てて矢を放ってきた。が、狙いをマルスに定めていたせいで矢の威力が落ち、鎧の上を虚しく撫でるだけ。

「ん？　蚊でもいたか？」

ドーガは、ニヤリと笑うと、ドシドシと敵に近づいて槍の一撃！

「ふう、危ういところだった……」

勝利を見とどけたジェイガンは、小さく安堵のため息をもらした。
◆経験値にプラス1して……………………………………366へ

346

「なまはんかな攻撃じゃ、ヤツには通用しないな……」
オグマはいまいましげに地竜を見あげた。
「やっぱりこれしかないか……」
言うなり、改めてドラゴンキラーの柄を両手で握りなおし、そのまま剣先を水平に保つ。まるで防御などいっさい頭にないといった構えだ。
「どりゃああああ！」
オグマは奇声をあげて、体ごと地竜にぶつかっていった。全体重を剣にのせ、一気に地竜の皮膚を貫きとおすつもりだ。まさに捨て身の攻撃！
◆バトル対戦表で戦います。オグマはC、相手はB。相手より数値が……
●上……………387へ　●下……………451へ

347

ガトーは首を横に振り「スコーピオとアクエリアが足りん」とつぶやくと、「マジックシー

ルドの杖と聖水を持っておるじゃろう？　それをここに……」と言いはなった。
マルスはうなずき、杖と聖水をガトーに手渡す。ガトーはそれを両手に持つと、声高らかに呪文を唱えた。すると！　杖と聖水が消失し、代わりに二つの星のかけらが!!
「今、ここにある十個の星のかけらが残りのかけらを呼ぶ力に、杖と聖水の魔法の力を加えてやったのじゃ。スコーピオはラーマン神殿を荒らした盗族の手に、アクエリアはオルベルン城の奥に、それぞれあったようじゃな……」
◆アイテムリストから『聖水』を消す。マリーシアかウェンデルの装備表から『マジックシールドの杖』を消して

……………………………………277へ

348

「わかった。マケドニアだな」
マルスはラングを見すえ、低い声で言った。
「そうそう、おとなしく言うことを聞いてくれるほうが身のためですぞ」
重ね重ね憎たらしいヤツだが、今はただ、黙って従うほうが賢い選択のようだ。
マルスはラングをきつくにらむと、さっと身をひるがえして、その場を離れた。
めざすは、東の海の向こうに位置するマケドニアだ。

⬇373へ

349

ヨーデルが、大地を揺るがすボルガノンを放つ！
たまらず伏せるアリティア兵たち！
だが、そこへマルスら別動隊が到着。
「帝国軍についた愚かな魔道士、おまえの相手は私だ！」
ドラゴンに乗ったミネルバが、ヨーデルの頭上から銀の槍を突きおろす！
「そんな！」
慌てたヨーデルは、ミネルバに向けてもボルガノンを唱えた。が、不発！
ミネルバの鮮やかな槍さばきの前に、ヨーデルは敗退！
「……エルレーン……本当にこれでいいのか……」
ヨーデルは一言うめき、息絶えた。
「王子、よくぞ。さあお早く！」
「うん、フィーナのおかげなんだ」
彼女の不思議な踊りの応援のおかげで、マルスらは砂漠に体力を奪われることなく、かつ予想以上の速さで神殿にたどり着くことができたのだ。

◆経験値にプラス2して…………………………………285へ

350

「観念しろ！　とどめだ！」
勝ち誇ったハーディンがグラディウスを振りかぶった。だがそれはあまりにも無防備な構えだった。百戦錬磨のオグマがこれを見逃すはずがない。
オグマは低い体勢から一気にハーディンの懐に入り、そのまま下段から剣を跳ねあげた！
「ぐっ……」
胴から血しぶきがあがり、ハーディンはその場に倒れた。

⬇271へ

351

マルスたちは竜石屋にたどりついた。
竜石は、マムクートたちが竜に変身するためには欠かせないアイテム。ぜひここで手にいれておかねばならない。

●クにチェックがあれば……………383へ　●なければ……………………410へ

352

マルスらが選んだ枝道は、途中溶岩の河に寸断されていた。
「……時間を無駄にしてしまったな……」

マルスが汗をぬぐいつぶやく。
しかし、無駄にしたのは時間だけではなかった。体力もそうとう使ってしまっていた。

●傷薬があれば……318へ　●なければ……333へ

353

魔道軍が現れたかと思うと、それに追いうちをかけるようにドラゴンナイトや盗賊の急襲！
「うぬぬ、闇雲に戦っていてもらちがあかない。きちんとした布陣をひかねば！」
そこで、ジェイガンは二つの作戦をたてた。どちらを実行する？

●ナバールとオグマを先鋒に、ジョルジュら弓兵が後方から援護する……371へ

●ジョルジュらを前に出し、敵との距離を保ち戦う……448へ

354

「王子、覚悟――――！」
奇声をあげて剣を振りまわす敵とマルスの間に、パオラがさっと割って入ると、手にした槍を敵の胸に突きたてた！　一撃必殺!!

◆経験値にプラス1して……323へ

355

ラーマンシーフの不意打ちに、思わずマルスが倒れる。そこへ別のシーフが馬乗りに！
ほかの戦士たちは、マルスを傷つけてはと手が出せない！
「おまえらぐらい、僕一人で充分だ！」
マルスは、上になったシーフを投げとばすと、すぐさま剣を敵に向けて一閃！　さらに返す刃で、残りの一人を腹から肩へと切りさいた！
「おみごとでした、王子」
かつてマルスの剣の師匠でもあったジェイガンが、目を細める。
ラーマンシーフは宝箱を持っていた。その中には傭兵のクラスチェンジに必要な勇者証が入っていた。さっそく、オグマが勇者にクラスチェンジ。銀の剣が使えるようになった！
そこで、彼は持っていた鋼の剣を「これは貴様に譲ろう」と、ジュリアンに渡した。
◆オグマが『勇者』にクラスチェンジした。『鋼の剣』をオグマからジュリアンの装備表に移動させる。Zにチェックする。経験値にプラス2して……………………376へ

356

「……後ろからはアカネイアの勇者軍が迫ってるってのに、邪魔な盗賊め！　命が惜しければとっとと道を開けろ！」

「なんだと？　若造が、野郎ども、やっちまえ――――！」
盗賊たちは、手に手にナイフや剣を握り、襲いかかってきた！
やむなく、戦闘開始！　誰を軸に戦うべきか？
●シーダ……………………372へ　●ドーガ……………………456へ

357

「さあ、これでマケドニアも平和になるだろう。これで僕らもひとまず国に帰れる。今後の作戦はアリティアで練ろう。……みんな、ご苦労だったね！」
マルスが兵たちの労を労っているところへ、一頭のペガサスが舞いおりてきた。その背には、長い髪をなびかせた美少女が！
「シーダ、シーダじゃないか。どうして君がこんなところに!?　……まさかアリティアになにかあったのか？」
「マルス様……アリティアが帝国軍に襲われて……アカネイア、グラ、オレルアンの連合軍に奇襲をうけて騎士団は全滅。城も落とされてしまったの……」
ペガサスを降りたシーダは、辛そうに答えた。
「な、なんだって！　まさかアリティアが……ジェイガン、これはいったい！」
マルスの問いに、ジェイガンは眉間のシワをさらに深くして言った。

「……無念です。一番恐れていたことが起こりました。ハーディン皇帝はマルスの話を聞いて我らを反逆者としたのでしょう。いや、それにしてはあまりに早すぎる。おそらくはグルニア遠征も、マケドニアの反乱もしくまれた罠だったのでしょう……我らをアリティアから遠ざけて、戦力が二分されたところを叩く……」

「そんな、僕には信じられない。あのハーディンがわが国を攻めるなんて！　だって、ハーディンはかつて心を一つに戦った、仲間じゃないか！」

「……王子、お気持ちはわかります。しかし、いずれにせよわが国はアカネイアから攻撃を受けたのです。……それでシーダ様、ほかの者はどうなったのですか？」

「はい……カインもよく戦ってくれたのですが……皆どうなったのか。そして、エリス様はたまたま来訪していた私を逃がすために、敵の虜に……」

エリスの名前を口にしたシーダの目から、堰をきったように、涙があふれだした。

「ごめんなさい、マルス様！　私だけ逃げのびて……でも、どうしてもこのことをマルス様にお伝えしなければと！」

「シーダ、泣かないで！　わかっているよ、君だけでも無事でいてくれて本当によかった。謝るのは僕のほうだ。きみたちをこんな辛い目にあわせてしまって……大丈夫、アリティアはきっと取りもどす……たとえ、ハーディンと戦うことになろうとも……きっと！」

マルスは顔をあげると、きっぱりと言った。

「王子、もう城には帰れませぬぞ。どうなさいます？」
「ジェイガン……僕はどうしてもラングだけは許せない。まずはヤツとかたをつけたい」
「そうおっしゃると思いました。おそらく、皆も同じ気持ちでしょう！」
ジェイガンの言葉に振りかえると、そこには心を一つにした兵士たちがマルスを見あげ、うなずいている。
「よし、グルニアへ向けて、出発だ！　そして……ラングを倒す！」

⬇257へ

358

グアアアアア！
氷竜が強烈な氷のブレスを吹きかけてきた！
「よし、俺たちも応戦開始！」
ナバールの呼びかけで皆もそれぞれに氷竜を相手とし、戦いを挑んだ。オグマとナバールは共にドラゴンキラーを握っている。
リンダは氷竜をにらみつけると呪文を唱えはじめた。

◆リンダが『エルファイアーの書』を……
●持っていれば……370へ　**●持っていなければ……394へ**

359

翌朝、マルスたちは新たなる使命に燃え、カダイン城を後にした。
マリクはウェンデルと共にアリティア軍に加わることになり……。
「エルレーン、おまえはわしやマリクが留守の間、このカダインを守ってくれ。頼んだぞ」
ウェンデルの言葉に、エルレーンは力づよくうなずいた。
「そうだ、司祭、これを！」
言いながらエルレーンが差しだしたのは、星のかけら、星のアリエスだった。
◆『星のアリエス』を入手した。星のかけらリストにチェックして**……………17へ**

360

ガトーは首を横に振ると、ため息をつきながら言った。
「星のスコーピオが足りんようじゃな……仕かたない。マジックシールドの杖をここに」
マルスはうなずき、杖をガトーに手渡す。ガトーはそれを高く掲げると、厳かな声で呪文を唱えた。すると！　杖が消失し、代わりにガトーの手のひらに星のかけらが!!
「今、ここにある十一個の星のかけらが残りのかけらを呼ぶ力に、杖の魔法の力を加えてやったのじゃ。このスコーピオは、ラーマン神殿を荒らした盗族が持っていたようじゃな……」
◆マリーシアかウェンデルの装備表から『マジックシールドの杖』を消して**……277へ**

361

ナバールのマスターソードとアストリアのメリクルソード。二人の勇者の剣が激しく交差した！　共に剣の技では名の知れた勇者。しかしアカネイアの宝剣を相手にしているぶん、ナバールの剣勢のほうがかなり鈍い。
同等の技量の持ち主同士の戦いでは、このハンデは致命的だった。一瞬の隙をつかれたナバールは、メリクルソードの一撃を受け、傷を負ってしまう。
「ナバール、あとは任せろ！」
傷を負ったナバールをかばい、前に出てきたのはマルスだった。
「アストリア。君はかつて共に戦った戦友だ。戦いたくない。剣を引いてくれ……」
サンダーソードを隙なく構えながら、マルスはアストリアに語りかけた。
「なにをバカことを！　俺はアカネイアの勇者。国のために戦うまでだ！」
そう叫ぶと共に、アストリアはメリクルソードをマルスに向けて振りおろした！
かろうじてかわすマルス。同時にサンダーソードを天に掲げた!!

◆バトル対戦表で戦います。マルスはB、相手はE。相手よりも数値が……

●上　……………………381へ　●下　……………………407へ

362

聖水の効果で、隕石から身を守ったマルスは、そのまま一気に玉座へと突き進む！

◆アイテムリストから『聖水』を消して……389へ

363

もしも……。いや、彼らが山賊などを相手に苦戦とは考えにくいが、まさかのときには彼女の癒しの力が役にたつはずだ。マルスはマリーシアに目で合図を送ると、ドーガにぴったりと接近させる。そして、馬に乗っているルークとアランに先行を命じた。

◆Pにチェックして……411へ

364

平原ルートの偵察は、足周りのいいペガサスナイトのカチュアとソシアルナイトのセシルに頼むことにした。

➡304へ

365

「僕はあの子らを助けられなかったことを今でも後悔している……もう、僕はこれ以上あなたの思いどおりにはならない！」

マルスは、きっぱりと言いきった。その姿に、控えていたアリティア軍全員が思わず歓声をあげる！
「そうですとも、王子！」
「ラングのタヌキめ、帰れ帰れ！」

↓415へ

366

「なかなか見せてくれるではないか。しかし、その強運も、もはやそれまでだ!!」
ルーメルは、いよいよ本気になってきたらしい。
これからが真価の問われる本当の戦いだ。

●レベルが2以上なら……418へ　●1なら……395へ

367

ウェンデル司祭が手にしたマジックシールドの杖から、聖なる光があふれマルスの体を包みこむ！　魔法からガードされた彼は、なおも攻撃をしかけようとしている一人に、やむなく剣を一閃！　そのとたん、ウェンデルの叫び声が!!
「おまえたち、もはやわしの顔すら見忘れたか、それとも、もうわしなどの言葉には耳を貸さぬというのか！」

とたんに魔道士たちの攻撃の手が鈍る。そこへ、マリクが現れた。
「先生、マルス様！……エルレーンを止めることができず、申し訳ありませんでした！」
◆経験値にプラス１して……………………………………**429**へ

368

東の塔に到着した。塔の入口の大きな扉にマルスが手をかける。
「開かないな……」
押しても引いてもビクともしない。固く鍵がかけられているようで、どうにもならない。
マルスたちは中に入ることをあきらめた、さて、どこへ向かう？
●中央の塔へ……………**402**へ　●西の塔へ……………**439**へ

369

勝負は、拍子抜けするほど呆気なかった。マルスのレイピアとドーガのナイトキラーは同時に繰りだされ、左右から敵の体を串刺しに!!
「ふむ、意外にあっさりと倒れましたねぇ……」
槍を収めたドーガは、マルスを振りかえって余裕の笑顔を見せた。
◆経験値にプラス１して……………………………………**391**へ

370

氷竜はリンダめがけて氷のブレスを吐いた！
だがリンダはそれを巧みに避け、なおかつ呪文を唱える。そうエルファイアーの書を！
とたんに辺りに爆炎が生じた。爆炎は炎の槍と化して氷竜を貫いた！

↓419へ

371

「行くか」
「ああ！」
オグマとナバールの二人は、風のように敵に向かって切りこんでいく！
◆ナバールが『サンダーソード』を……
●持っていれば……………425へ　●持っていなければ……………398へ

372

橋が揺れ、思うように戦えないマルスらに対し、盗賊たちは欄干や橋桁から身軽に体を躍らせてきた！
「お待ちなさい！　私たちが相手よ!!」
シーダを中心とするカチュア、パオラのペガサス部隊が上空から敵を攻撃！

「う、上にもいやがった！」
不意をつかれて、盗賊たちは焦る！
そこへ、体勢を整えた地上のマルスらがたたみかけ、盗賊は全滅！
盗賊の頭は、懐に星のかけらの一つ、星のレオを隠しもっていた。
◆『星のレオ』を入手した。星のかけらリストにチェックする。経験値にプラス5して……………………**390**へ

373

海を渡り、マケドニアのある大陸に到着したマルスたちは、国境の森の入り口にある洞窟で、密かに作戦を練っていた。反乱軍たちは、この森の中で守りを固めているという。とにかく防御に撤し、身の危険を感じた場合のみ、敵を倒そう。マルスがそう宣言したとき、
「どんな傷でもたちまち直してくれる、傷薬はいかがですか？」
背後からの愛想のよい声がした。振りかえると、大きな布袋を担いだ、行商人らしき男が笑顔で立っている。
「傷薬は、一つたったの100ゴールドですぞ、旦那！」
●Cにチェックがあれば……**404**へ　●なければ……………**48**へ

374

魔道士の指先から、渦巻く炎が繰りだされたのとほぼ同時に、ゴードンの矢が魔道士の肩を射ぬいた！

「うぐ！」

たまらず膝を落とす魔道士に、ドーガの槍とリンダのオーラがとどめを刺す！

倒れた魔道士の傍らには、エルファイアーの書が落ちていた。

ドーガがこれを拾うと、さっそくリンダに持たせた。

◆リンダの装備表に『エルファイアーの書』を加える。経験値にプラス5して ……423へ

375

ワープの杖によってシリウスは祭壇に送りこまれた。ダークマージは慌てて攻撃魔法の呪文を唱える。

シリウスは無言で武器を構えた。

●聖水があれば ……420へ　●なければ ……440へ

376

「……それにしても、偵察隊は遅いなあ。大丈夫だろうか。まさか、敵に……」

「それなら、私が見てくるわ！　マルス様」

平原ルートへ向かった偵察隊の安否を気づかうマルスに、シーダが申しでた。たしかにペガサスならば、上空から探索するのにちょうどいい。

「一人では危険、地上からは私も同行しよう」と、シリウスも進みでる。

●Yにチェックがあれば……428へ
●なければ……397へ

377

左に折れる枝道が現れた。このT字路を？

●そのまま直進……295へ
●左へ折れる……352へ

378

「今度は俺が相手だ！」

ガイルの前に、オグマが走りでると、その懐に飛びこみ、目にも止まらぬ早さでガイルの喉笛をかっきった！

ビシュ――ッと血しぶきをあげて、ガイルは絶命！

一瞬にして首領を倒された残りのバイキングは、武器を放りだすと逃げだしていってしまった。

「ハン、逃げ足の早いヤツらめ」

戦いがすみ、城の中を探索している途中で、ジュリアンが宝箱を二つ見つけだした。小さな箱には傷薬が一つ、大きな箱には銀の斧が三本も入っていた。

「こいつは武器屋に売ったらいい金になるぜ！」

◆『銀の斧』を三本と『傷薬』を入手した。アイテムリストにチェックする。経験値にプラス2して……………………………………**357**へ

379

「王子、危ない！」

とっさに、アランはマルスを突きとばす！　間一髪、敵の剣先は、マルスをかばったアランの肩をかすめる！

「まったく、卑怯なヤツだぜ！」

躍りでたジュリアンが素早く敵の懐に飛びこみ、その胸に鉄の剣を突きたてた！

「すまない、アラン！　油断してたよ……大丈夫かい？」

「こんなもの、怪我のうちにはいりませんよ」

心配するマルスに、アランは静かに微笑んでみせた。

◆Rにチェックする。経験値にプラス1して……………………………………**323**へ

380

「あ、あいつらは!?」
一行(いっこう)は西の塔(とう)の前で、盗賊(とうぞく)たちと遭遇(そうぐう)した。
マルスとルークが三人の盗賊と向きあう。彼らは剣(つるぎ)を振りかざして襲(おそ)いかかってきたが、マルスたちに歯の立つ相手ではなかった。
マルスたちはいとも簡単に盗賊を片づけた。ラッキーなことに盗賊の一人がワープの杖(つえ)を隠(かく)し持っていた。
「ウェンデル司祭(しさい)、これはあなたが……」
そう言ってマルスはウェンデルにワープの杖(つえ)を手渡した。
邪魔者(じゃまもの)のいなくなったマルスたちは西の塔に入ってみる。しかし、中にはなにもなかった。
さて次は……。
◆セにチェックする。ウェンデルの装備表に『ワープの杖』を加(くわ)える。経験値にプラス3して

●中央の塔へ……………402へ　●東の塔へ……………368へ

381

サンダーソードから電撃が放たれた。電撃はみごとにアストリアを捕らえ、彼にたしかなダメージを与えた。

しかしアストリアは気丈に持ちこたえ、剣を構えてマルスの次の攻撃に備えた。

一方マルスは迷っていた。アストリアにとどめの剣を振るうべきか……。

その時、二人の間に割って入る戦士が一人。

「待ってください、マルス王子！　剣を引けアストリア!!」

見れば、それはスナイパーのジョルジュ。彼はかつての仲間のアストリアがいると聞いて、別の場所から駆けつけたのだ。

「ジョルジュ……。この裏切り者が……」

アカネイアの兵士仲間の姿を認めたアストリアは、突きさすような視線でジョルジュを見つめた。

➡469へ

382

「ああ、これであのラングさえ倒してくだされば、また平和な生活ができるわ！」

「そうだとも、皆さん頑張ってくださいよ！」

城下町の人々は、こぞってアリティア軍を歓迎してくれた。

「王子、やっとグルニアを制圧できましたな。あとはラングがいるオレルアン城のみ。しかし、ヤツのことです。どんな罠が用意されているか……ここは一つ、戦力を整えましょう」

ジェイガンの言葉に、マルスらは、はやる気持ちを抑え、店で武器を補充することにした。

武器屋は、銀の斧三本を１００００ゴールドの高値で買いとってくれた。所持金と足すと１８０００ゴールドだ。それで、１００００ゴールドの騎士勲章、１５００ゴールドの銀の槍、２５００ゴールドの銀の弓、２０００ゴールドの銀の剣、１０００ゴールドのキルソードを購入。マルスはさっそく騎士勲章をドーガに渡し、階級アップをはかった。

「ええと、これで残りは、あと１０００ゴールドか。なにを買おう？」

◆ドーガが『ジェネラル』にクラスチェンジした。装備表の職業にチェックする。ドーガの装備表に『銀の槍』、ゴードンの装備表に『銀の弓』、オグマのアイテムに『銀の剣』と『キルソード』を加える。アイテムリストから『銀の斧』三本を消して

●傷薬を十個買う ……**316**へ **●マルスにキルソードを買う** ……**406**へ

383

手持ちのゴールドで買える竜石は、氷竜石と飛竜石だった。

マルスは氷竜石をバヌトゥに、飛竜石をチキに、それぞれ託した。

「これからの戦いには、二人の力が欠かせない。頼むよ！」

◆シにチェックする。バヌトゥの装備表に『氷竜石』、チキの装備表に『飛竜石』を加えて…………**437**へ

384

ガトーは首を振り「アクエリアがない……」とつぶやくと、聖水を所望した。そして、マルスから聖水を受けとると、それを高く掲げて呪文を唱える。すると！　聖水が消失し、代わりにガトーの手のひらに星のかけらが!!
「今、ここにある十一個の星のかけらが残りのかけらを呼ぶ力に、聖水の力を加えてやったのじゃ。このアクエリアは、オルベルン城の奥にしまわれていたようじゃな……」
◆アイテムリストから『聖水』を消して…………**277**へ

385

マルスから、竜の盾も受けとっていたオグマは、グラディウスの一撃を、あっさりとかわす。そして、そのままハーディンの背後にまわると見せて、すれちがいざまに攻撃！
傷口を手で押え、がくりと膝をつくハーディン。勝者のオグマも少し驚いたような顔で振りむき、ハーディンを見つめた。あまりのあっけない勝利にオグマ自身もとまどっているようだった。ハーディンがわざと負けたようにも見えた……。

◆アイテムリストから『竜の盾』を消して……………………271へ

386

もしもの時には、やはり経験がものをいう。マルスは身のこなしの素早いセシルに同行を命じた。とりあえず、先行部隊は騎馬隊のルークとアランだ。

⬇411へ

387

オグマのドラゴンキラーが地竜を襲った。

ガキッ！

たしかな手ごたえがあった。

剣は、地竜の腹筋に深々と突きたっている。

これが必殺の一撃となり、地竜の動きが極端に鈍くなった。マルスはこれを見逃さず、渾身の力を込めて、マスターソードを地竜の心臓に突きたてた。

地竜はすさまじい叫び声をあげ、そのまま息絶えた。

「オグマ、このまま玉座の間へ向かい、ハーディンと雌雄を決しよう！」

二人は玉座の間めがけて駆けだした。

◆経験値にプラス4して……………………475へ

388

マルスらの前には、魔道士たちの厚い壁が立ちはだかっていた。
「道を開けるんだ！　マリクに、エルレーンに会わせてくれ！」
しかし、彼らはマルスの言葉など聞こえなかったように、魔法をしかけてくる！

◆ウェンデルがマジックシールドの杖を……

●持っていれば ……………367へ

●持っていなければ ……………408へ

389

マルスは銀の剣をウィローの頭上に振りおろした。
ザシュ!!
必殺の一撃が炸裂し、ウィローはそのまま玉座の中に倒れふした。

◆経験値にプラス3して ……………224へ

390

橋の途中にある島に差しかかったところで、マルスが全員の足を止めた。
「マルス様、どうされました？」
「……島のはずれにある村が気になるんだ……もしやあそこに星のかけらが……」

「しかし、今は一刻を争う時ですぞ」
「うん。でもジェイガン、なんて言うか、心にひっかかるんだ！」
「……わかりました。では、本隊は先に進ませ、村には目立たぬよう少人数で参りましょう」
マルスはジェイガンとゴードンを連れ、本隊とわかれて島の村を訪ねることにした。
村についてすぐに、井戸のところで野菜を洗っているおばさんを見つけた。どうする？

●話しかける ……………………422へ
●気づかれないように先へ進む …403へ

391

一方、ドラゴンナイトを振りきって進んでいた先行の騎馬隊たちは、早くも前方に、敵の盗賊を発見していた。
「ん？　ヤツめ、剣のようなものを大事そうに隠しもっているが……？」
アランの言葉を聞きおわらないうちに、カチュアが全力でペガサスを駆った。
「あれはマケドニアの財宝、レディーソード！　取りかえさなくっちゃ！」
アランたちはカチュアを追って馬を走らせた。

●Qにチェックがあれば ……443へ
●なければ ……………………414へ

392

敵の振りまわすデビルアクスを、ドーガが槍の柄でガッと受けとめる！　歯を食いしばり押しあううち、蛮族は石に足をとられ、溶岩の河へまっ逆さま！

蛮族のいた場所には宝箱があり、中には10000ゴールドが入っていた。

ゴールドを入手し、階段を昇りきった一行は、左右に伸びる細い通路を発見。

さて、どちらに進もうか？　マルスは思案する。

◆経験値にプラス1して

●右に進む……………281へ　●左に進む……………377へ

393

テーベの塔の前には、大きな飛竜が待ちかまえていた！　さらに、しつこいバーサーカーたちも襲いかかってくる！

辛い道のりだったが、そのぶん実力もつけてきた彼らは、怯むことなく剣を抜く！

⬇328へ

394

リンダは氷竜に向けてファイアーの書を唱えた！

炎が氷竜を包みこみ、敵にたしかなダメージを与える。しかし氷竜は、叫び声をあげながら氷のブレスを吐いて反撃に出た！
「きゃー!!」
氷のブレスがリンダを直撃した。

➡453へ

395

思わぬ残党の登場で、逆に冷静になったアリティア軍は、一瞬にしてみごとなフォーメーションを組んだ。
が、そんな彼らを嘲笑うかのごとく、敵の増援部隊が!!
「ふはははは、ぬかったな、マルス王子。この場にて息絶えるがよい！」
砦の中から現われた増援部隊の背後に隠れ、ルーメルは高らかな笑い声をあげた。
「ぬう、卑怯な！」
「マルス様、雑魚は我々に任せてください！」
後方で、手槍を構えたドーガとルークが、同じく間接攻撃要員のアーチャー、ゴードンとライアンを急かせて、増援部隊の攻撃に当たる。
「よし、行こう!!」
それを見たマルスは、アランとセシル、そしてカチュアを率いると、増援隊の攻撃を避け

ながら、ルーメル目がけて突進した。
長く苦しい死闘に、ようやく決着のつくときがきた。
「ルーメル！　潔く逝け！」
マルスの繰りだしたレイピアが、敵将の胸に深々と突きささる。ドラゴンナイト・ルーメルは、胸のレイピアをぐっと握りしめながら息絶えた。
◆経験値にプラス3して……………………………………**444**へ

396

魔道士の指先から、渦巻く炎が繰りだされたのと、ゴードンの矢が放たれたのは、ほぼ同時だった！
が、矢は炎に焼きおとされてしまった!!
ドーガは、敵に攻めこもうとしたが、これまた次から次へと巻きおこる炎に、間合いをとりかねて苦戦！
しかし、その隙にリンダが敵の横にまわりこんだ！
「さあ、これで決まりよ！」
至近距離から放ったリンダのファイアーに、魔道士の体は炎に包まれた！
「案外手ごわいやつだったな」

プスプスと燃えくすぶる敵の屍を見おろし、ドーガがつぶやいた。

◆経験値にプラス4して……………423へ

397

「ああ、やっと追いついたわ!」

シーダらを送りだして半日が過ぎた頃。木々を押しわけ進むマルスらのもとに、セシルを先頭に、カチュア、シリウス、そしてシーダが戻ってきた。

「西の岩山に近づきすぎて、火竜に気づかれてしまって。手間取っていたところに、お二人が来てくださったので助かりましたわ」

カチュアが、感謝をこめて言った。

二人の報告によると、北西の勇者軍が少しずつ橋のほうへ進行しているとのこと。しかも隊を率いているのは、アカネイア屈指の勇者にして、かつてはマルスの同志だったアストリアだという。彼との戦いを避けたいマルスは、神殿に向けさらに足を早めた。

➡416へ

398

オグマとナバールは、地面を蹴って魔道士の仕かけたエルファイアーの炎をかわすと、次々に魔道士を打ち倒した! と、その二人の頭上に、ドラゴンナイトが迫る!

「させるか！」
すかさずゴードンが矢をかけ、ドラゴンナイトを射落とす！　その腕は、まさに百発百中！
頼もしい援護に、ほかの戦士たちも心おきなく剣を振るう！
激しい戦いは、アリティア軍の勝利に終った。砂埃がおさまり、見まわすと、盗賊は、いつの間にか逃げてしまっていた。

◆経験値にプラス4して……412へ

399

マルスとオグマは懸命に剣を振るった。しかし地竜の皮膚は固く、なかなか傷を負わすことができない。苦戦する二人……。

●シにチェックがあれば……312へ　●なければ……346へ

400

残るはあと一人！
ドーガは銀の槍を引きぬくと、もう一人のダークマージに向きなおり、あっという間にこれを串ざしにしてしまう。
「今だ、マリク！」



ドーガに言われるまでもない。マリクは暗黒の司祭ガーネフの前に進みでて、その邪悪な瞳をにらみつけた。

◆経験値にプラス2して……………………465へ

401

全身に火傷を負いながらも、鋼の斧を振りまわすガイルに、ドーガが挑む！

「うおりゃ――――！」

鋼鉄の鎧をまとったドーガは鋼の斧をものともせず、敵に近づくと、手にした槍で力いっぱい突いた！

「うがあああああ！」

断末魔の悲鳴をあげ、ガイルはドウッと倒れふした！

首領を失ったバイキングたちはどうすることもできず、アリティア軍の前に降伏！

戦いがすみ、城の中を探索している途中で、ジュリアンが宝箱を二つ見つけだした。小さな箱には傷薬が一つ、大きな箱には銀の斧が三本も入っていた。

「こいつは武器屋に売ったらいい金になるぜ！」

◆『銀の斧』を三本と『傷薬』を一つ入手した。アイテムリストにチェックする。経験値にプラス5して……………………357へ

402

中央の塔は一番遠く離れていた。少し登り坂があり、それを登りきると今度は下りの道が門にまでつながっていた。

「こんな底のほうに建っていたのね。見て、門のまわりのすばらしい彫刻を」

リンダが皆にそう言った時……。突然、盗賊が物陰から飛びだしてきて、マルスに襲いかかった！

とっさに剣を抜いたマルスは、ひらりと身をかわして、盗賊を斬りすてる。

「ふぅ、おどかすなよ。」

冷や汗がマルスの額から流れおちた。

しかし、この戦いでマルスは、盗賊の持っていた７０００ゴールドを手に入れた。

◆経験値にプラス１して……245へ

403

マルスは、村のはずれの一軒家へとやってきた。

そこで彼を待っていたのは……。

「おお、これはマルス王子、久しぶりじゃなあ！」

頭から緋色のローブをかぶった老人が、思わず戸口まで走りでてきた。

「バヌトゥ、バヌトゥじゃないか！　ああ、こんなところで会えるなんて……」
バヌトゥ――竜石をもって竜に変身することができるマムクート族の老人で、かつて神竜族の王女チキを捜していた時に、マルスと出会い仲間になった。
先の戦いより、久しぶりの出会いであった。
「チキは元気なの？」
「あの子はもうわしのもとにはおらんよ。ガトー様が再び氷竜神殿へ連れて行かれたんじゃ」
「氷竜神殿？」
「ずっと北の氷の大地にあるんじゃが、かつて勇者アンリが訪ねたほかは、誰もたどりつくことができずにいるのじゃ」
「勇者アンリ……」
マルスは、勇猛だっただろう自分の祖先に思いを馳せた。
「ふむ……詳しいことは、いずれガトー様からお聞きすればよい。それより、この老人の頼みを聞いてくれぬか？　実はな、わしの大事な火竜石が盗賊に盗まれたのじゃ。なんとしても取りかえしたい……どうじゃな、旅のついでにわしを連れて行ってくれんか？」
●ナにチェックがあれば　…………435へ　●なければ　……………………446へ

404

マルスはジェイガンに残金をたしかめさせた。幸いにも、300ゴールド残っている。

「もらうよ、三つ」

「さすが旦那、お目が高い！　そんじょそこらの薬とは、効き目が違いますからね、うちのは。絶対、後悔なんかさせませんぜ」

なんだか、調子のよい商人の言葉につられた感じもしなくはないが……。

◆『傷薬』を三つ入手した。アイテムリストにチェックする。G、N、Dのチェックが……

●一つでもある……433へ
●一つもない……467へ

405

結局、残金で手槍を買い、カチュアに装備させることにした。

◆カチュアの装備表に『手槍』を加えて……217へ

406

これからの戦いに備え、キルソードを買うことにした。そして、それはマルスが装備することに！

◆マルスの装備表に『キルソード』を加えて……468へ

407

サンダーソードから電撃が放たれた。だがアストリアは間一髪でこの電撃をかわす。すかさず反撃に出るアストリア。マルスはその猛攻をただ受けとめるだけで、なかなか反撃に出られない。

そのとき、二人の間に割って入る男が一人。

「待ってください、マルス王子！　剣を引けアストリア!!」

見れば、それはスナイパーのジョルジュ。彼はかつての仲間のアストリアがいると聞いて、別の場所から駆けつけたのだ。

「ジョルジュ……。この裏切り者が、よく俺の前に姿を見せられるな……」

かつての兵士仲間に、アストリアは突きさすような視線を送った。

⬇469へ

408

敵の操るエルファイアーの炎に、思わずマルスが膝を折る！　それを見たウェンデルは、制止するジェイガンの手を振りきり、魔道軍の前に走りでた。

「おまえたち、もはやわしの顔すら見忘れたか、それとも、もうわしなどの言葉には耳を貸さぬというのか！」

ウェンデルの叫びに、魔道士たちの攻撃の手が鈍る。そこへ、マリクが現れた。

「先生、マルス王子！　……エルレーンを止められず、申し訳ありません！」

➡429へ

409

「バーサーカーには、魔道で攻めるのが有利、リンダ殿、マリク殿！」
「まっかしといてっ！」
「リンダ、行くぞ！」
ジェイガンの求めに、マリクとリンダが身を躍らせる。そして、オーラとエクスカリバーの連続攻撃で無傷のうちに四人もの敵を倒してしまった。後には、バーサーカーの落とした剣・マスターソードが。マルスはこの強力な武器を、ナバールに装備させた。

◆ナバールの装備表に『マスターソード』を加える。経験値にプラス4して……288へ

410

手持ちのゴールドで買える竜石は、氷竜石一つだった。本当は飛竜石も買いたいところだったのだが、お金が足りず、マルスは結局あきらめた。
氷竜石はバヌトゥに手渡された。

◆バヌトゥの装備表に『氷竜石』を加えて……437へ

411

速攻だ！　アランとルークは槍を構え、山賊たちに襲いかかった！

◆バトル対戦表で戦います。アランたちはE、相手はA。相手より数値が……

●上……………………436へ　●下……………………105へ

412

ジェイガンの戦略と戦士たちの活躍で、本隊はついにカダイン神殿へとたどりついた。

しかし、その門の前には、エルレーンの配下であるヨーデル司祭が待ちうけていた！　大地を揺るがすボルガノンの魔法を操るかなりのクセ者だ！

「神殿を侵す者は、なんびとたりとも許さぬ！」

●ナにチェックがあれば……………156へ　●なければ……………249へ

413

階上からデビルアクスをブンブンと振りまわし迫る蛮族に、マルスらは懸命に応戦！

しかし、足場に気をとられ、思うように戦えない。なにせ、一歩間違えば溶岩の河にまっ逆さまだ！

最後、ナバールが敵をしとめ、ラッキーにも１００００ゴールドを手に入れた時には、全

員、一小隊相手にしたときと同じぐらい体力を使いきっていた。

マルスたちは、10000ゴールドをしまうと、再び前進。階段を昇りきると、細い通路が右に左に伸びていた。

◆エにチェックする。経験値にプラス1して

●右に進む……281へ　●左に進む……377へ

414

女性といえども格段の腕を持つカチュアにとって、盗賊など問題のうちに入らなかった。ようやく追いついたアランたちが目にしたのは、地面に伸びている敵と、対照的に、レディソードを手にしてにっこり微笑むカチュアの姿。

「これはね、賊にすごい威力を発揮してくれる、女性専用の武器なの。私かセシル、どちらが持ってても役にたつと思うわ」

さしもの聖騎士たちも、口をポカンと開けるばかりだった。

◆カチュアかセシルの装備表に『レディソード』を加える。経験値にプラス1して……464へ

415

「……そうか、アリティアもやはりグルだったのだな。……なにせ、王子たちを連れだしたのは、かつて貴公の部下であった、あのタリスの傭兵オグマなのだからな！」
これは、マルスにとって意外なことだった。しかし、同時に納得もできる。なるほど、ロレンス将軍は、オグマだからこそ信頼し、王子と王女を託す気になったのだろう。
マルスは、ラングをキッとにらみ、再び口を開いた。
「我々は、オグマのことは今まで知らなかった。しかし、会ったらオグマに礼を言いたいぐらいだ。ラング将軍、もう一度言う。僕は彼らを助ける。たとえあなたと戦ったとしても！」
「なに!?　その言葉、明らかに反逆……ハーディン皇帝に報告してもいいのだろうな！」
「好きにすればいい。しかし、いずれ僕もパレスに行く。そしてハーディンやニーナ様にこの事実を伝え、あなたの罪を明らかにするつもりだ！」
「……後悔するぞ」
ラングは憎々しげに顔を歪めた。が、今度はジェイガンが黙っていなかった。
「黙れ、ラング！　今までの王子に対する度重なる無礼な振舞い、もはや勘弁ならぬ！　これ以上非礼を重ねるのなら、この場で貴様を串刺しにしてくれるわ！」
「貴様ら……いいか、皇帝に申し上げてアリティアなどひねりつぶしてやる！　覚えてろ！」
ジェイガンの勢いに押されたラングは、捨てゼリフを残し立ち去った。

「驚いたな、ジェイガン。君があそこまで言うなんて」
「王子、わしとてまだまだ若い者には負けませんぞ。しかし、いささか軽率でしたかな。さて……これからどういたしましょう？」
「うん。とにかく、彼らより先にオグマたちを捜しださなくちゃ。ラングの話だとホルム海岸に来ているらしいけど、たぶんウェンデル司祭がおられる村を訪ねるつもりだろう。司祭はたしか、グルニアの王子、王女の保護者であったと聞いたことがある」
ウェンデル司祭——魔道の国カダインの、最高司祭である。やはり、先の戦いでマルスと行動を共にした仲間だ。
「そうですな。ミネルバ王女やレナ殿も心配ですが、ここにいてもしょうがない……とにかく、ウェンデル司祭に会いに参りましょう！」
一行はウェンデルが滞在している村をめざすことになった。しかし、司祭がいるというホルム海岸は、悪名高いバイキングの支配地である。行く手には幾多の敵が待ちうけていることか。アリティア軍の困難な旅は続く——。

⬇20へ

416

夕暮れが近づき、辺りはいっそう暗くなってきた。このままでは、道に迷ってしまう。そこで、神殿へのルートどりをするために、分隊を作り、先行させることにした。

選ばれたのは、オグマ、ジュリアン、そしてライアンだ。
「！」
先頭を走るオグマが急に立ちどまった。見ると、前方の熊笹がザワザワと揺れている。
敵か!? それとも……。
さて、どうする？

●様子をみる ……………………431へ　●攻撃をする ……………………472へ

417

オグマはグラディウスの一撃を銀の剣で受けとめた。が、予想以上の重い衝撃に、思わずよろめいてしまう！

●レベルが9以上なら ……………350へ　●8以下なら ……………310へ

418

思わぬ残党の登場で、逆に冷静になったアリティア軍は、一瞬にしてみごとなフォーメーションを組んだ。
最後尾にある馬車に張りつくようにして、弓兵部隊のゴードンとライアンが武器を構える。
もちろんマリーシアは、馬車の中だ。そして、手槍を持ったドーガとルークが、その前で防

御ラインを張った。飛び道具を持った彼らの役目は、馬車の防御と間接攻撃だ。
一方の前衛部隊は、レイピアを持ったマルスに、銀の槍のアラン、そして、素早いセシルにカチュアの四人。マルスを中心とした彼らは、軽い身のこなしでルーメルの前進を抑え、思い思いに武器を繰りだした。
さしものドラゴンナイト・ルーメルも、アリティア軍のチームワークの前には、なす術がない。
戦いがはじまって数分も経たないうちに、マルスの繰りだしたレイピアの餌食となり、いとも呆気なく息絶えた。

◆経験値にプラス2して……………………444へ

419

グギャ———！
氷竜は苦しげな声をあげて息絶えた。

●Xにチェックがあれば……………430へ　●なければ……………………247へ

420

シリウスは銀の槍を抜き、一瞬のうちにダークマージの喉を突いた。ダークマージは声も

あげずにその場に倒れる。シリウスならではのみごとな技だった。

◆経験値にプラス3して……………264へ

421

一方こちらはパレス城の玉座の間……。皇帝ハーディンは、捕らわれた反乱分子のリーダー、女騎士のミディアに接見していた。

「ミディア。貴様まで裏切るとは、アカネイア騎士団の忠誠心も地に落ちたものだな」

ゆったりと玉座に腰を下ろしたハーディンは、あざけるような目でミディアを見くだした。

「ぬかせ、ハーディン。貴様、ニーナ様をどこに隠した！ いい加減、目を覚ませ！」

ミディアは負けずにハーディンをにらみ返した。

「ニーナか……。あの女は俺を裏切った……。この世の中は腐っている。こんな世界は滅んだほうがましなのだ。ふふふ……。ミディア、おまえはここで見守るのだ。あの小僧、マルスの死にざまをな……。ふはははははははは」

狂気に満ちあふれたハーディンの笑い声が、玉座の間に響きわたった。

➡462へ

422

「あら、あんたたち旅の兵隊さん？ そっちのお兄さんは立派な弓を持っておいでだねえ」

マルスらが話しかけるまでもなく、おばさんのほうから声をかけてきた。
「たとえばさ、弓矢使いは弓矢使いどうし、仲がいいのかねえ？」
「さ、さあ……」
なんと答えたらいいのかわからず、ゴードンは思わず首をひねる。

↓403へ

423

ちょうど三人が魔道士を倒したところに、森に偵察に出ていたカチュアらが合流。
「……あの森には、腕利きのスナイパー部隊が待機しているそうよ。今の私たちの戦力では近づかない方が得策ね」
「腕効きのスナイパー……まさか、あのかたでは……」
カチュアの報告に、ゴードンは思わず森の奥に視線を馳せる。

↓442へ

424

マルスが迫りくるのを見たウィローは、とっさにメティオの魔法を唱えた。
メティオは敵の頭上に隕石を落とすおそるべき呪文だ。
マルスに隕石が降りそそぐ！
「ぐ……」

隕石の直撃を受けたマルスの顔が激痛に歪む。

⬇447へ

425

ナバールのサンダーソードから、敵に向かっていかずちが走る！
激しい雷鳴と共に、魔道軍の兵士がふっとんだ！
さらに、地面を蹴ったオグマが、ひるんだ魔道士に追いうちをかけ、頭上のドラゴンナイトはゴードンが射落とす！　その腕は、まさに百発百中！　頼もしい援護に、ほかの戦士たちも心おきなく剣を振るう！
激しい戦いは、アリティア軍の勝利に終った。さらに、盗賊のかついでいた袋の中から竜の盾を発見！

◆『竜の盾』を入手した。アイテムリストに記入する。経験値にプラス4して　…412へ

426

にわかには信じられないドーガの言葉だったが、焚火に赤く照らされた娘の顔は、たしかにあの、勝ち気な女魔道士・リンダのものだった。
「マルス様、お久しぶりです。それから、ええと……初めましてのかたもいらっしゃるわね。私、暗黒戦争のときに、マルス様たちとご一緒させてもらった、リンダと言います」



リンダは、初対面のルーク、セシル、ライアン、そしてマリーシアに手早く自己紹介をすませると、自分の荷物をごそごそやりだした。そして、小さな盾を、マルスに手渡す。
「これ……ニーナ様が、一刻も早くマルス様へ渡すようにって……」
それは、暗黒戦争のとき、マルスが肌身離さず身につけていた、ファイアーエムブレム——アカネイア王家に伝わる紋章の盾だった。
「これは、アカネイア王家の代理として、正義の戦いを行う者に託される紋章。なぜ、ニーナ様はこれを僕に？　ハーディンは、皇帝はこれを知っているのか？」
アカネイア王室にハーディンがいる以上、ほかの者に正義の戦いを依頼する必要などない。ましてアリティア軍は、反乱を鎮圧しにきただけに過ぎないのだ。それなのに、なぜファイアーエムブレムを託されるのか……？　マルスの疑問ももっともだった。しかし、これを届けにきた当のリンダも、アカネイアの王女ニーナの真意はわからないという。
「私にも、なにがなんだか……。ニーナ様は、悲しそうに微笑まれただけだったわ……」
「とにかく、これは貴重な盾。僕が大事に預かっておくよ」
マルスはファイアーエムブレムを、受けとり、自分の体に身につけた。リンダは、ひとまず役目を果たし、ほっとしたように息をつく。
「それからね、ニーナ様からもう一つ、特別な魔法を授かってきたの。一度っきりしか使えない魔法なんだけど、今、怪我人はいる？」

リンダは言うなり、荷物の中から一冊の魔道書を取りだした。
◆A、G、Dにチェックが……
●一つでもあれば……343へ　●一つもなければ……300へ

427

セシルらソシアルナイトたちが、手にいれたばかりの武器でバーサーカーに挑みかかろうとした！　しかし、バーサーカーの必殺の一撃に思わずうしろへ退却する！
⬇409へ

428

「遅くなりました！」
シーダが出向こうとしたところに、パオラとリンダが戻ってきた。
「途中岩山に住む火竜に気づかれて、手間取ってしまいました。でも、リンダが魔法で敵の注意を引きつけてくれたので、なんとか倒せました。それに、ほら！」
と、差しだしたパオラの手には火竜へと変身する不思議な石『火竜石』が握られていた。
現在はメンバーの中にその石を使いこなせる者がいないので、荷物の中へとしまう。
「二人共無事でよかった。だけど、たった二人で火竜を倒すなんてすごいな！」
マルスの言葉に、ジェイガンが「まことに」と微笑んだ。

二人の報告によると、北西の勇者軍が少しずつ橋のほうへ進行しているとのこと。しかも隊を率いているのは、アカネイア屈指の勇者にして、かつてマルスの同志だったアストリアだという。彼らとの戦いを避けたいマルスらは、神殿をめざしさらに足を早める！

◆ナにチェックして……………………………416へ

429

魔道士たちは戦うのをやめ、ウェンデルたちに道を開けた。その先にはエルレーンの姿が！目には冷たい炎が揺れている。

「待ってください司祭。危険すぎます、僕が！」

エルレーンに歩みよろうとしたウェンデルを、マルスが止める。さて、マルスとウェンデル、どちらが先にエルレーンに話しかける？

●マルス……………441へ　●ウェンデル……………454へ

430

続いてゴードンが銀の弓を氷竜に放った！　矢は狙いたがわず、氷竜の首に命中した。

ギャァァアゴゴゴ！　首にささった矢を抜こうと、氷竜は懸命になって首を上下に振った。相当きいているようだ！

➡341へ

431

「きゃ――――、助けて！」

熊笹の中から、短い薄衣をまとった少女が飛びだすと、オグマにしがみついてきた！　その背後に、盗賊が迫る！

オグマが剣を構えなおそうとしたその瞬間！　いやらしい笑いを浮かべた盗賊は、そのまま前のめりに崩れおちた。

「フィーナ、命が惜しかったら離れるなと言ってあっただろう」

盗賊のうしろには、キルソードを手にした青年が立っていた。みごとな亜麻色の長髪に、端正な顔、そして鋭い目……。

「貴様、ナバール！」

オグマの言葉に、青年の眉がピクリと動く。

「……オグマ……か？」

二人の間で、火花が散る。ナバールもまた、暗黒戦争で出会った傭兵の一人で、その剣の腕は、オグマにもひけをとらない。常々二人は、互いの存在を強く意識していた。

◆経験値にプラス1して……………………………449へ

432

あと一歩で階段を昇りきるというときに、階上から蛮族が襲いかかってきた！
「火の部族だ、気をつけて！」
チェイニーが叫ぶ！
◆バトル対戦表で戦います。マルスたちはA、相手はE。相手より数値が……
●上 ……………………392へ ●下 ……………………413へ

433

一行の中には、先ほどの戦いで負傷した者がいた。まずはその傷を回復させ、ベストな状態でマケドニアに乗りこみたい。マルスはそう考え、負傷した者に傷薬を手渡した。
◆ここで、『傷薬』を使用してOK。G、N、Dのチェック一つにつき『傷薬』一つを使用し、使った数だけアイテムリストの『傷薬』とG、N、Dいずれかのチェックを消して ……467へ

434

「さあかかってこいマルス。このグラディウスのさびにしてくれる」
ハーディンはグラディウスを構えマルスを挑発した。とまどいを見せるマルス。彼はまだハーディン説得に希望を抱いていた。しかしオグマは違った……。

「王子……。もはや説得は不可能です。ここは私がやらせてもらいます」
オグマはそう言うと、銀の剣を構えて、ハーディンと対峙した。
「王子……。光のオーブを貸してください。でないと、彼をうちやぶれません」
やむなくマルスはオグマに光のオーブを手渡した。

➡463へ

435

「そうだ！　これは火竜から勝ちえたものですが……」
マルスは、荷物の中から火竜石を取りだした。
「おお、これはまさに！　これで火竜に変身することができる……王子、この礼にきっとひと働きしてみせようぞ」こうしてアリティア軍に、新しい仲間バヌトゥが加わった。
「王子の勘もたいしたものですな。おかげでこうしてバヌトゥと会うことができた……おっと、いかん。先を急がねば、アカネイアのはさみ打ちにあってしまいますぞ」
ジェイガンに促され、マルスらは橋へと全速力で引きかえす！

◆バヌトゥの装備表に『火竜石』を加えて……………………**200へ**

436

さすがにアリティア宮廷騎士団が誇る強者たち。彼らは正確な一撃でそれぞれに山賊たち

をしとめた。

◆経験値にプラス2して

●Pにチェックがあれば……141へ　●なければ……41へ

437

「さぁ急ぐのだマルス！」

どこからかガトーの声が聞こえてきた。

「わしはここに残って調べねばならないことがある。死んだと思われていたガーネフの魂が闇のオーブによって蘇ったのじゃ」

「ガーネフが!?」

マルスは思わず声をあげた。

暗黒戦争で世界を滅ぼしかけたあの闇の司祭が生きている！

「わしはガーネフの企みをなんとしてでも探りだす。おぬしは急いで祖国へ戻り、アリティアを奪回するのだ。そして盾の復活をめざせ！　世界を救うために!!」

ガトーはそう告げると、大ワープの魔法を用いて、マルスたち一行を一気にアリティアへと送りだした。

➡36へ

438

残金で傷薬を買うことにした。

◆『傷薬』を六つ入手した。アイテムリストにチェックして

●Rにチェックがあれば……………474へ　●なければ……………………217へ

439

西の塔の入り口までやってきた。あたりを油断なく見まわすマルス……。

●セにチェックがあれば…………452へ　●なければ……………………380へ

440

呪文が終わらないうちに倒さねば！　シリウスは銀の槍を素早く振るってダークマージを倒そうとした。しかし長い槍を振るうには、この祭壇は狭すぎた。

動きが抑制されるために、いつもの槍のさえがシリウスに見られなかった。

ダークマージは槍をたくみにかわし、ボルガノンの呪文を唱えた！

爆音が鳴り響き、シリウスの体に衝撃が走った。思わず槍を取りおとし、ダメージにガクリと片膝をつく。

「くくく。たわいもない……」

勝ち誇るダークマージ。だがこれはシリウスの策略だった。シリウスは素早く槍を拾い、柄の部分でヤツの足をひっかけたのだ。

たまらず転ぶダークマージ。ゆうゆうと立ちあがったシリウスはそのまま銀の槍で敵の胸を貫いた。

◆経験値にプラス2して……264へ

441

「エルレーンといったね、話をさせてくれないかい？」

「帝国軍に謀反を企てたアリティア軍を、わがカダインから生かして出すわけにはいかない」

エルレーンは冷たく言うと、マルスをスッと指さした。その指先にはトロンの火花が小さく弾けている。

「……王子、お下がりくだされ」

堪えきれず、ウェンデルが進みでる。

↓454へ

442

ゴードンの視線のずっと奥には、アカネイアの弓兵隊が陣を張っていた。その中心には、金色に輝く髪を無造作に束ねた若き部隊長が、部下と向きあい立っていた。

見かけは華奢だが、ひとたび弓を持たせれば、向かうところ敵なしと恐れられた名スナイパーのジョルジュだ。彼もまた、かつてはマルスたちと暗黒戦争を戦った仲間であったのだが、今は敵――。

「ラングのやつ、俺に城に戻ってこいと？　ふん、オレはどうもあの男は好かん。ヤツは民を奴隷のようにあつかう……俺はあんなヤツの下で働くのはまっぴらだ」

「……しかしジョルジュ隊長、それではあなたが罪に問われます……それとも、アリティアに寝返るとでも!?」

「いや、それはできぬ。今俺が寝返れば、部下のおまえたちも巻きこんでしまうからな……とにかく、今俺たちがすべきことは、ここで反乱軍を鎮圧することだけだ。いいか、オレたちはニーナ様につかえるアカネイア兵だ、ラングなど放っておけ！」

それから、ジョルジュは顔をあげ、ふっと懐かしそうにつぶやいた。

「……アリティア軍。マルス王子か……」

➡466へ

443

ドラゴンナイトに与えられたダメージが効いているのか、一人先に盗賊と対峙していたカチュアは、厳しい戦いを強いられていた。が、盗賊が持っていたレディーソードは、すでにカチュアの手に。敵は取りかえそうと、躍起になってカチュアを攻めたてていた。

「この身がバラバラになっても、これは離さないわよ」
必死で孤独の戦いに耐えるカチュアの視界に、アランたちの姿が！　疾走してくる騎馬隊を見た盗賊は、勝算なしと判断したのか、大慌てで退散していった。
「大丈夫か！」
心配そうなアランの声が響く。
「根性のないヤツね！　でも、宝は取りもどしたわ。これは、賊に強力な力を発揮する、女性専用の武器なの。私かセシル、どちらが持ってもいいと思うわ。それにこれも……」
カチュアはレディーソードと一緒に、傷薬を握りしめていた。
「黙ってやられるなんてシャクだもの、敵の懐からいただいちゃったの」
傷薬を塗り、あっという間に元気を取りもどしたカチュアの、この首尾のよさ！
「カチュア……ただ者ではない……」
さしもの聖騎士隊長アランも、口をポカンと開けるばかりだった。
◆Qのチェックを消す。カチュアかセシルの装備表に『レディソード』を加えて　…464へ

444

「ふあ～っ、食った食った～、満足だ！」
豪快なアーマーナイト・ドーガの大声で、まだ手持ちのスープを半分も食べていなかった

面々は、呆れたようにため息をついた。

ここは、マケドニアの国境の砦。ルーメルを倒したマルスたちは、マケドニア城下に攻めいる前に、ここで野営をして体力を回復させ、明日早朝に奇襲をかけることにしたのだった。

疲れのせいか、誰もが食欲をなくしていたが、唯一ドーガだけは旺盛な食欲を見せ、人の二倍の干し肉スープを平らげたのだった。

と、その時――!!

「ふふっ、相変わらずね、ドーガ」

暗がりから若い女のささやき声が！　驚いたドーガは、手にした器を投げすて、すかさず槍を構える。しかし、間もなくその手から、槍がポロリと落ちた。

「リ、リンダ!?　リンダじゃないか!!　なんでまた、こんな危険なところに!?」

ドーガの声に、マルスとゴードン、カチュア、そしてジェイガンがハッと顔を上げる。リンダ？　亡き大司祭ミロアの娘リンダが、いったいなんの用で――!?

➡426へ

445

階段は途中で崩れおちていた！　おまけに、飛竜がバサバサと飛んでいる！

すぐさま、ゴードンが弓に矢をつがえ、射落とす！

飛竜は、溶岩の河に沈んでいった。

マルスたちは階段を降りると、今度はもう一つの階段を昇ることにした。
◆Wにチェックする。経験値にプラス2して……………432へ

446

「バヌトゥ、僕らと来てくれるのか？　それは心強い！　うん、火竜石は僕らも一緒に探そう！」
「……おっと、いかん。王子、先を急がねばアカネイアのはさみ打ちにあってしまいます」
ジェイガンに促され、マルスたちは橋へと全速力で引きかえす！　⬇200へ

447

メティオの威力にひるんだマルス。
ウィローはそれを見てほくそ笑む。
ウィローはさらにメティオを唱えた！
●聖水があれば……………362へ　●なければ……………470へ

448

ジョルジュの弓は、まさに百発百中！　魔道軍は、攻めようにも魔法を使える圏内に踏み

こめずにいる！　そればかりか、一人また一人とジョルジュの矢に倒されていく。さらに、ゴードンとライアンの兄弟がジョルジュをサポート、空から迫るドラゴンナイトを射落とす！　頼もしい援護に、ほかの戦士たちも心おきなく剣を振るうことができ、激しい戦いは、アリティア軍の勝利に終った。さらに、盗賊のかついでいた袋の中から竜の盾を入手！

◆『竜の盾』を入手した。アイテムリストに記入する。経験値にプラス4して　…412へ

449

オグマは、ジュリアンとライアンを先行させ、自分はナバールと少女を連れマルスのもとへ。二人が言葉を交そうとしたところに、少女が割って入った。

「はあい！　わたしはフィーナ、踊り子よ！　わたしの踊りを見ると、みんな元気が出るっていうわ。盗賊に追われていたところをナバールに助けられて、それから一緒に旅をしてるの。この人ね、こんなふうに澄ましているけど、アリティア軍に会ってみたいヤツがいるって、ずっと言ってたのよ。好敵手ってやつ？　それってもしかして……」

フィーナは横で控えているオグマをチラリと見た。そして、さらになにか言おうとしたところを、「おしゃべりはもういい！」と、ナバールにさえぎられた。

「ナバール、ここで会ったのもなにかの縁。よかったら、僕らとこないか？　そして、アリティアを取りもどす力になって欲しい」

「それはまた、暴れがいがありそうだ」
それは、ナバールらしい意志表示の言葉だった。

➡458へ

450

誰もが勝利を確信していた。暗黒竜などに、自分たちが負けるはずはない、そう信じ、ある者は武器を、またある者は杖を振るった。
そして、ついに、暗黒竜の滅びるときがやってきた。
「神竜ナーガよ！　我に力を…………!!」
ザシュ――――――――ッ!!
ファルシオンの必殺の一撃が、みごと、メディウスをまっ二つに裂いたのだ。
「そんな……我が倒れるとは……しかし、いつか再び……この世に……」
ズシ――――――――ン!!
大音響と共に、メディウスの体は崩れおちた。

➡478へ

451

オグマのドラゴンキラーが地竜を襲った。ガキッ！　たしかな手ごたえがある。
だが、剣が突きたったのは、地竜の腕！　体にまでは届かなかった。

激痛に怒り狂った地竜が、鋭い爪を持った腕を横なぎに払った。これを避けきれなかったオグマは十メートルもふっとび、宮殿の冷たい床に叩きつけられた。ドラゴンキラーは、地竜の腕に刺さったままだ。

「危ないオグマ！」

マルスはオグマの前に立ち、彼をかばった。

地竜は燃えるような赤い目で、二人めがけて突進してくる。そのとき……。

立派な翼を羽ばたかせ、もう一頭の竜が出現。地竜と二人の間をさえぎった。

見れば、それは神竜に変身したチキ。

「おにいちゃん、外はあらかた片づいたから加勢にきたわ！」

⬇287へ

452

マルスは扉を開けて中に入った。

「ガランとしてなにもないな……。さっき来たときのまんまだ」

「どうする？」

皆はマルスに問うた。

●中央の塔へ行く……402へ
●東の塔へ行く……368へ

453

「リ、リンダ！」

慌てて駆けよったマリーシアが、ライブの杖でリンダを回復させた。

「大丈夫？」

「ありがとうマリーシア」

リンダは気丈に立ちあがると、再び氷竜に向けて、呪文を唱えはじめた。

●Xにチェックがあれば……430へ　●なければ……247へ

454

「愚か者！」

ウェンデルはエルレーンに向けて、一喝！

普段はもの静かな司祭の思わぬ迫力に、エルレーンだけでなく、そこにいた全員が思わずびくりとなる。

⬇473へ

455

マルスたちはチェイニーに連れられ北へと進んだ。切りたった崖、深い谷、連なる山々……いくつめかの山を越えたところで、彼らは突きさすような熱気に襲われた。

辺りには溶岩が河のように流れ、赤黒い岩肌からはシュウシュウと蒸気が吹きだしている。その岩山の一部にはぽっかりと穴が開いており、チェイニーの手招きで、マルスらはその中へ。そこは、洞穴というよりもまるで城かなにかの廃虚のようになっていた。誰が作ったのか、階段のようなものも見える。そして、外よりもさらに熱気がすごい！

「……すごいな、立っているだけで、体が燃えつきそうだ。なんてところだここは……」

「フレイムバレル……火竜の墓場さ。退化して獣になった火竜族が死を待つところだ」

「退化？　いったいなんのことだ」

「竜族は何万年も前からこの大陸に住みつき、文明を築きあげてきたんだ。そりゃ人間には及びもつかないくらい知恵も能力もあった。けれど、種の終わりってやつがやってきた……それに気づいた長老たちは、竜としての本性を竜石に封じこめ、人間として生きることを決めたんだ。それが唯一の生き残る道ってことでサ。でも、長老たちのいうことを聞かなかった竜族たちも多く、皆やがて理性を失って獣になりはてたんだ」

「それが、あの火竜たちだというのか？」

「うん。今じゃこの谷を支配する火の部族にいいように操られて、まるで家畜だよ……おっと、いけない。火の部族はたちが悪いからグズグズしてたら、火竜のいけにえになっちまう。かといって、ここを通りぬけなきゃガトーのところにはいけないし……入りくんでるから迷子にならないでくれよ、オレもちょっと自信ないけど」



さて、正面に階段が二つ。どちらを昇る？

●右の階段……445へ　●左の階段……432へ

456

ドーガは、銀の槍をブンブンと振りまわし、盗賊の中へ打ってでようとした。しかし！
突如、海峡を吹きぬける突風が、橋を直撃！　思わずよろけてしまう！

➡372へ

457

マルスにかわって一人の男が玉座に飛びこんだ。ナバールだ！　ナバールは銀の剣でウィローの胸を貫いた。
「ぐっ……」
ウィローはこの一撃であっけなく息絶えた。間一髪、マルスはナバールによって救われたのだった。

◆経験値にプラス2して……224へ

458

ナバールという、心強い仲間を得たマルスら。ジュリアン、ライアンらが木につけた目印

を頼りに、ラーマン神殿へと森を進む！

⬇231へ

459

しかし、喜ぶのはまだ早かった！　恐戦士バーサーカーの一団が行く手をはばむ！
必殺の一撃を持つ、恐ろしい敵だ。どうする!?

●魔法で戦う……………………409へ　●武器で戦う……………………427へ

460

誰もが死を覚悟して戦っていた。強大な力を秘めた暗黒竜メディウスを倒し、世界に平和をもたらすことさえできれば、自分の命を犠牲にすることなど、なんとも思わなかった。武器持つ者は全てメディウスに切りかかり、傷ついた味方の体を、闇のブレスの攻撃も厭わずシスターが回復させる。フィーナは爪先に血をにじませながら踊り、ジェイガンさえも、老体に鞭打ち戦った。

そして、ついに、暗黒竜の滅びるときがやってきた。

「神竜ナーガよ！　我に力を……………………………………!!」

ザシュ――――――――ッ!!

ファルシオンの必殺の一撃が、みごと、メディウスをまっ二つに裂いたのだ。

「そんな……我が倒れるとは……しかし、いつか再び……この世に……」
ズシ―――――ン!!
大音響と共に、メディウスの体は崩れおちた。

↓478へ

461

ハーディンの名を出され、思わずマルスは口をつぐんだ。
と、いままで我慢していたアリティア軍の不満が爆発！
「冗談じゃない、ラング将軍、もう俺たちはあんたの命令なんて聞かない！」
「そうだ、そうだ！　王子、もう我慢することありません！」
「そうですとも！　なんならラングなどこの場でひねり潰してやればいい！」
マルスが止めるまもなく、次から次へと非難の言葉がラングに浴びせられる。
そのありさまに、マルスは決心したようにラングに向きなおると言った。
「……僕の気持ちも彼らと同じです」

↓415へ

462

このとき、マルスたち一行は、玉座の間に確実に近づいていた。
だがその前に、ハーディンに忠誠を誓った近衛兵が立ちはだかった。彼らはジェネラルと

スナイパーで構成された精鋭部隊だ。
戦闘が開始された。矢が飛びかい、剣と槍が激しく交差する。そうこうするうちに新たな敵が出現した。宮廷で飼われている地竜が鎖を断ちきって乱入してきたのだ。
マルスとオグマが地竜に向かって走った！

⬇399へ

463

「ほほう。傭兵あがりの貴様が私に挑戦するというのか。面白い、受けてたとう！」
ハーディンは電光のごとき速さでオグマに襲いかかった。
オグマもまた銀の剣でこれを迎えうつ!!

◆アイテムリストに『竜の盾』が……

●あれば……………………385へ　●なければ……………………417へ

464

先行の騎馬隊に、歩兵隊がようやく合流した。アランからカチュアの活躍ぶりを聞かされたマルスは、さもあらんと、コクリうなずく。
「俺だって、マケドニアの三姉妹は、一人でも敵にまわしたくないよ……」
ドーガが、ぶるると身震いをして、その太い首を鎧の中に引っこめた。

「残るは敵将のドラゴンナイト・ルーメルと、側近のアーマーナイト。二人だけのはずです。どういう作戦にしましょうか」
男たちのひそひそ話もどこ吹く風で、カチュアはてきぱきと反乱軍の説明をする。
「ここはまた、二手にわかれたほうがいいだろう。まずはアーマーナイトをかたずけよう」
カチュアの声に気を引きしめたマルスは、ぐるりと味方を眺めまわした。
「対アーマーナイトには、誰がもっとも適しているだろうか……」
●アランとドーガ……………102へ　●ドーガとゴードン…………71へ

465

「小僧っこが……。このガーネフに挑戦するとは千年早いわ！」
ガーネフはマリクに向かってマフーの書を唱えた。マフーは相手の攻撃をすべて封じる暗黒魔法だ。しかしスターライトを所持しているマリクには、まったく効果を現さない。
「な、なんと……」
顔を醜くしかめるガーネフ。
そんなガーネフに向かって、マリクはスターライトを唱えた。
「ぐあああああ！」
ガーネフはスターライトの直撃を受け、悲鳴をあげてもだえた。なんとか逆襲しようと、

必死でマフーを唱えるのだが、マリクにはなんの効果もない。
　マリクはさらに連続でスターライトを唱えつづけた。ガーネフはその衝撃に耐えきれず、がっくりと祭壇の床に崩れおちた。暗黒の司祭が力尽きたのだ。
「マリク、よくやった！」
　戦いを見まもっていたマルスが走りよってきた。
「ガーネフ、姉上たちをどこにやった！」
　マルスは虫の息のガーネフを問いつめた。
「四人のシスター……。彼女たちは暗黒竜メディウスを目覚めさせるのに利用させてもらった。まあいけにえだな……。くくく……。いけにえにされたシスターたちの魂はもう壊れてしまっておる。彼女たちの意志は私ですら戻すことはかなわぬ。くくく……。どうするマルス？　メディウスは完全に復活した。暗黒竜には封印の盾も通用せぬぞ。シスターたちの魂も戻せぬ。ここまで来てとんだむだ足を踏んだものだな。くくく……」
　ガーネフは邪悪な笑い声と共に息絶えた。そのかたわらには神剣ファルシオンが!!
「暗黒竜メディウスが復活した？」
　メディウスを倒すことのできる唯一の剣・ファルシオンを手に、呆然とたたずむマルス……。

◆『ファルシオン』を入手した。マルスの装備表に加える。経験値にプラス3して　…**7**へ

466

偵察隊が本隊と合流したのは、湖に浮かぶ小さな島——そこから、オルベルン城までは橋一本だ。しかし、トラースも必死！　城に近づくにつれ、砲撃が、激しくなってきた。
「安全な位置から弓矢部隊で攻撃するか、いっそ敵の懐に飛びこみ勝負をかけるか……」
ジェイガンの二つの作戦。どちらを選ぶ？

●弓で攻撃　……………292へ　●敵の懐に飛びこむ　……………272へ

467

「これより突入する！　みんな、用意はいいな？」
マルスの号令で、一行はマケドニア国境の森に突入していった。ところが！
「そうはさせるか！」
前方から、馬に乗ったソシアルナイト二人に行く手をはばまれる。
マルスは瞬時にして考えをめぐらせた。
ここはどういう戦法を取ればいいか!?

●ドーガとアランが戦う　……………82へ　●ルークとアランが戦う　……………109へ

468

装備も整え、いよいよオルベルン城へ突入するメンバーを選ぶことになった。
「ぼくにジェイガン、オグマ、シリウス、ドーガ、ジュリアン、セシル、それから……」
あと一人連れていくとしたら？

●ゴードン……………………240へ　●リンダ……………………115へ

469

「アストリア、おまえは誰のために戦っているのだ？　ハーディン皇帝のためか？」
ジョルジュはアストリアに問いかけた。
「違う！　あんな男のためではない！　ニーナ様のため、アカネイアのためにだ！」
「そのニーナ様は、マルス王子にエムブレムを託された。わかるか、この意味が！」
この一言が、アストリアに衝撃を与えた。マルス王子にエムブレムを託す。それはすなわち、ニーナがマルスに助けを求めていることをあらわすからだった。
「アストリア、俺と一緒にマルス王子と戦ってくれ。ハーディン皇帝からニーナ様を救いだし、アカネイアに真の平和をもたらすために！」
ジョルジュはまばたきもせずアストリアを見つめた。その瞳には一点のくもりもない。
「よかろう。ひとまず貴様を信じよう。しかしもし今度の戦いが、ハーディンの言うとおり、

マルス王子の野心から起こったものだったら、俺は貴様を許さないぞ！」
　アストリアはそう言うと、静かに剣をさやに収めた。
　頭目株のアストリアが降りたことにより、帝国軍の士気は一気に低下。さしたる抵抗もなく、マルスたちの前に総崩れとなった。
　大広間を逃げまわる帝国軍人たち。その中には、盗賊が何人か混じっていた。目ざとく見つけたゴードンが銀の矢を放って盗賊をしとめたところ……。
　なんと盗賊の懐から、大地のオーブが発見された。ゴードンのおかげで、大地のオーブが持ちだされることを防ぐことができたのだ。

◆『大地のオーブ』を入手した。オーブリストにチェックする。経験値にプラス3して　…24へ

470

　さらにマルスの頭上に隕石が降りそそいだ。この連続攻撃には、さしものマルスもたまらない。マリーシアがライブの杖でマルスを応援したが、それだけでは間にあわない。
　マルスはガクリと片膝をついた！　その時……。

⬇457へ

471

「王子、危ない！」

オグマが叫んだのとほぼ同時に、剣を持つマルスの手を矢がかすめた！
「うっ！」
鋭い痛みが右手に走り、思わず剣を取りおとす！
すぐさま、シリウスが窓に跳び、ビロードの幕に槍を突きたてた！
「ぎゃあ！」
幕をひきむしるようにして、弓兵が転がりでる。ラングの命令で、密かにマルスを狙っていたのだ！
「つくづく見さげ果てたヤツだな……王子、こんなヤツに騎士道など必要ありません！ ロレンスの無念、民の苦しみ……今、思い知れ！」
オグマは剣を構えると、槍を拾おうとしているラングめがけて切りつけた！ 気迫のこもった一撃に、ラングはたまらず膝を落とす！
◆テにチェックして……………………184へ

472

オグマは静かに剣を抜くと、熊笹から現れた黒い影めがけて切りこむ！ が！
カキ————ン！
オグマの一撃は、相手の剣にガッチリと止められた！



〃できる！〃そう思った瞬間！

「オグマ!?」

刃を交えた相手が、驚きの声をあげて後ろに飛んだ。みごとな亜麻色の長髪に、端正な顔、鋭い目！

「貴様……ナバールか！」

ナバール――暗黒戦争でマルスらと出会った傭兵で、その剣の腕は、オグマにもひけをとらない。常々二人は、互いの存在を強く意識していた。

「ねえねえ、その人たち味方なのお？」

ナバールのうしろから、短い薄衣をまとった少女がひょいと現れた。

➡449へ

473

「……先生お戻りでしたか」

エルレーンの顔に、戸惑いが浮かぶ。

「おまえはたしかに優れた魔道士だが、人を思いやる心にかける。それゆえ、エクスカリバーを与えなかったのだ！　だが、時が来ればおまえをわしの後継者にしようと決めておった。それを逆恨みするとはなんたること……それではあのガーネフと同じではないか！」

「先生は私を魔王と一緒にするつもりですか！　私は、私は……」

473

「まあ聞け、かつてガトー様はガーネフの心の弱さを見抜き、オーラの書とこのカダインをミロア司祭にゆだねたのだ。嫉妬に狂ったガーネフはガトー様のもとから闇のオーブを盗みだし、その結果闇のオーブに心を捕らわれてしまったのだ……嫉妬や妬みが彼を破滅に導いた。わかるか、エルレーン。たしかにわしの言葉が足りなかったことは認めよう。だが、わしはおまえに破滅の道を歩ませぬため、それゆえ……」

ウェンデルの言葉に、突然エルレーンがひざまずく。

「先生、申し訳ありません！　私が、私が間違っておりました！」

ウェンデルの真心にふれ、エルレーンは心から己の否を恥じた。……泣いているのか、その肩は微かに震えていた……。

無事、カダインとの和解に成功したマルスらは、ひと晩城に泊めてもらい、体を休めることにした。

その夜。マルスの夢枕に偉大なる大賢者・ガトーが現れた。

「マルスよ……わしは今、魔道の力でおまえに話しかけている。これは夢ではない。心して聞け……この世には不思議な力を秘めた五つのオーブが存在する。光、星、大地、命そして闇のオーブが。その闇のオーブが、なんということかハーディンのもとにあるのだ」

「……闇の……オーブ？」

「光のオーブと対をなす聖玉で精神エネルギーを増幅させる。また、戦いにおいては相手の

精神を支配し、動けなくする力もある。だが、闇のオーブは人間が持つべきものではないのだ。人間の怒りや嘆き、妬みや嫉妬などに反応してその感情を増幅し、最後には人格を破壊して悪魔にする……ハーディンは闇に心を奪われた……」

「そんな、ハーディンはニーナ様と結ばれ幸せだったはず、妬みや嫉妬なんて……」

「マルスよ、人の心とはそう簡単なものではないのだ。いずれにせよ、ヤツの闇のオーブに勝てるのは光のオーブだけじゃ。ヤツをなんとかしたくば、わしのもとまで取りに来い！」

「行きます！　ガトー様。それでハーディンを救えるというのなら!!」

「……ふ、倒すのではなく救いたいと申すか。おまえらしい……。しかし、条件が一つある。そなた自ら、わしのいる氷竜神殿まで取りに来るのだ。ただし、今までここに来た人間は、古の勇者アンリのみ。もしおまえがアンリと同じ真の勇者であるのなら、たどりつけるだろう」

「たとえどんな厳しい道だろうと、きっとたどりついてみせます！」

「ふむ。では、まずそこから北へ進み、マーモトードの砂漠を越えるのだ。そしてテーベの塔をめざせ。そこに迎えの者を待たせておく……」

それだけ言うと、ガトーの姿は夜の闇へと消えていった。

⬇359へ

474

入手した傷薬を、さっそく傷ついたアランに飲ませた。
「おかげですっかり回復しました。これでガンガン戦えます！」
「うん。でも、無理はしないでくれよ」
マルスは、アランをいたわるように言った。
◆Rのチェックを消す。アイテムリストから『傷薬』を一つ消して……………217へ

475

マルスとオグマは玉座の間にたどりついた。意を決して扉を蹴りやぶり、中に入ると……。
王家の宝槍グラディウスを構えたハーディンが、仁王立ちで二人を待ちかまえていた。
「マルスか……。臣下の分際で、このパレスを侵すとは見さげ果てたヤツだ……」
暗い目をしたハーディンが、吐きすてるように言った。
「ハーディン、あなたは闇のオーブに支配され、正しい心を失っているんだ。どうか正気を取りもどしてください」
ハーディンを必死に説得しようとするマルス。しかしハーディンは……。
「甘いなマルス。私がアリティアを攻めた本当の理由を教えてやろう。それはおまえが憎かったからだ。おまえは、前の戦いではアンリの子孫というだけで、ニーナからエムブレムを

託され盟主にまつりあげられた。光の王子だと……。馬鹿め！　貴様など、俺の助けがなければとっくに死んでいたはずだ。それをつけあがりおって。私はその頃からおまえのことが憎かったのだ！　オーブなど関係ないわ!!」

ハーディンの言葉にがくぜんとするマルス。もはや戦うしかないのか!?

⬇434へ

476

永遠に続くと思われた砂漠の旅もやがて終わる時がきた。ついに、テーベの塔が見えてきたのだ！

●レベルが6以上なら……………393へ　●5以下なら……………………459へ

477

大広間に突入した。だが、そこには多数のスナイパーが待ちかまえていた。マルスたちに向かって、無数の矢が放たれた。

しかしマルスたちはひるまず、武器を振りかざして、スナイパーとの距離をつめた。

マルス、オグマ、アストリアの剣がきらめく！　わずか数秒後には、スナイパーたちの死骸が大広間の床に転がっていた。もはや抵抗する者はいなかった。

一行はそのまま大広間を通りすぎた。

◆経験値にプラス3して……………………421へ

478

辺りに静寂が訪れた。いつの間にか、天井に穴が開き、一筋の光が差しこんでいた。
「……終わった……」
最初に口を開いたのは、マルスだった。
「メディウスは……滅びた。僕らは勝ったんだ!!」
その言葉を聞いたとたん、皆の顔に喜びの表情が浮かび上がった。
「……終わったのですね……ついに……」
蒼白な顔をし、シリウスに抱えられながら、ニーナはこらえきれずに涙を流した。
笑顔を見せる者、感涙にむせぶ者、安堵からその場に座りこむ者、表現はそれぞれだったが、皆の心に浮かんだ思いはただ一つ。
終わった。世界を、愛しい者たちを救えた!! という喜びだけだった。
――神殿の外に出ると、まっ赤な夕日が、英雄たちの顔を照らした。幾度となく見てきた忌まわしい戦火ではなく、自然の美しい赤い色……。
「僕は、この夕焼けを、生涯忘れない……」
マルスの言葉に、全員が静かにうなずいた。

⬇エピローグへ

エピローグ

こうして、後に英雄戦争と呼ばれる、長く辛い戦いは終わりを迎えた。
光の王子マルスは、ニーナから大陸の統率を任され、目まぐるしい一年を過ごした。そして、一年が過ぎた頃、タリス王女シーダとの婚姻をとりおこなった。
暗黒戦争、英雄戦争を勝ち抜いた二人の挙式は盛大に行われ、大陸中の人々の注目を集めた。マルスとシーダは、この祝宴に、英雄戦争の時の仲間を呼び、楽しく語りあった。三日三晩続けられた宴は、皆の祝福のうちに、賑々しく終わりを迎えた。
そして、四日目の夕方――。
マルスとシーダ、そしてジェイガンの三人は、城の北にある小さな教会を訪れた。ここには聖騎士アランの墓所が、ひっそりと佇んでいる。英雄戦争で活躍を治めたアランは、戦争が終わって間もなく病に倒れ、マルスとシーダの結婚を待たずに他界していた。
「アラン。久しぶりだね。今日は報告に来たんだ。僕とシーダはほら、晴れて結婚することができたんだ。きみにシーダの花嫁姿を見てほしくてね……」
マルスは、アランの墓に花を供えながら言った。
「あなた、バカよ。不治の病を隠して戦っていたなんて……」

静かに供物を供えながら、シーダが思わず涙ぐむ。
「私としても、無念です。彼の顔色の悪さの理由を、もっと深く考えるべきだった……」
ジェイガンも唇をかんで沈黙した。
「おお～い、マルス様～～～っ!!」
しんみりとしかけた空気を破ったのは、騎士のドーガだった。アーマーナイトからジェネラルに昇格した後でも、相変わらずの気さくさだ。
「ニーナ様から手紙が届いたんですよ。足の速い者が出払っていたもんで、俺が……」
「ニーナ様からだって……?」
マルスは大急ぎで、手紙の封を開けた。ニーナは、マルスに大陸の治世を託して以来、どこへともなく姿を消し、音信を断っていたのだ。そのニーナからの手紙とは……。マルスは、もどかしそうに手紙を開くと、その場にいた者たちのため、声を出して読んだ。
親愛なるマルス様、シーダ様。私が音信不通になって、さぞかしご心配されたことでしょう。でも私は、あの戦争のことを、そしてハーディンのことを、考えずにはいられなかった。静かに考える時間が欲しかったのです。あれから一年が過ぎ、私もようやく心穏やかに過ごせるようになりました。そしてようやく、女としての幸せを考えることができるようになりました。私がハーディンへの罪にさいなまれて生きていくことを、きっとハーディンは喜ば

ないでしょう。だから……。今私は、一人ではありません。ある人が、常に私を支えていてくれました。彼がいてくれたから、私は、ハーディンへの気持ちを乗り越えられたと言っても過言ではありません。ああ、手紙が長くなってしまいますわね。いつか、お二人の元へ伺いたいと思っております。まずは近況報告まで。ご結婚、本当におめでとうございます。いつまでもお幸せに。皆様にもよろしくお伝えください。

ニーナ

「そうか……ニーナ様は、元気でやっているんだね……」
マルスが、嬉しそうにそう言った。ジェイガンとシーダ、そしてドーガが、それをたしかめるようにうなずく。先の祝宴で仲間たちの話題に一番多くのぼったのは、ぷっつりと消息を断ったアカネイアのニーナと、騎士シリウスのことだった。皆、口にこそしなかったが、シリウスがあの黒騎士カミュであることは、周知の事実だったのである。
「よし、城に帰ってみんなに手紙を書こう。ニーナ様たちは元気で暮らしていると……」
マルスは、顔をあげてシーダを見た。シーダは、こっくりとうなずき、マルスに寄りそう。そんな二人の顔を、まっ赤な夕焼けが染めあげた。一瞬マルスは、一年前、大陸に平和が蘇ったあの瞬間の夕焼けを、思い出していた。
英雄戦争から一年。大陸はようやく戦いの傷跡を癒しはじめた――。

END

ゲームブック
FIREEMBLEM 紋章の謎
企画／**エニックス**
構成・文／エムズカンパニー(池田美佐、前川陽子)
安藤 夏、沙藤 樹
本文イラスト／森下 直親
原作 ゲーム FIREEMBLEM 紋章の謎

ゲームブック
FIREEMBLEM 紋章の謎
1995年10月10日 初版第1刷発行
制 作 **エニックス**
編集人 千 田 幸 信
● ● ●
発行人 福 嶋 康 博
発行所 株式会社 **エニックス**
東京都新宿区西新宿7-5-25
西新宿木村屋ビル3F 〒160
営 業 ☎03(3369)8982
書籍編集 ☎03(3369)7200
印刷所 大日本印刷株式会社
乱丁・落丁本はお取り替え致します。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-87025-845-5

ENIX エニックス文庫　EB62

9784870258457

1910176005800

ISBN4-87025-845-5
C0176 P580E

定価580円（本体価格563円・税17円）

エニックス文庫　EB62

